

孤立させない地域の つながりづくりのススメ



新型コロナウイルスの影響で、さまざまな「集うこと」への中止・抑制により、特に生活困窮者や高齢者等にとっては、孤立のリスクが高まっています。支援者にとっても、参加支援の場となる地域資源や社会的なコミュニケーションが減少したことにより、地域課題が見えづらくなり、地域共生社会の包括的な支援体制の構築に向けて、具体的な取り組みが見い出せない状況に陥っています。

そこで、本事業では、現在の状況下においても、①つながりを切らない活動を進めている地域や支援団体の事例を全国より収集し、活動のポイントを含めて情報提供を行うこと、②これからの地域づくりに向けた支援や、地域と協働しながらの参加支援を行う支援者が身に付けておくべき基本的な視点・ノウハウを学ぶ研修、③現場で悩む支援者に対して、オンラインでの相談・アドバイスをとおして、孤立を防ぐ地域づくりと地域と協働できる支援者の養成を行いました。

目次

はじめに	1
コロナ下でもこんな「気かけ合い」が、 孤立や孤独を防いで豊かなつながりをはぐくんでいます	2
孤立させない地域づくりのために私たちができること	4
コロナ禍で考える「孤立させない」地域づくり	5
NPO 法人すずの会（神奈川県川崎市）	6
一般社団法人音別ふき落団（北海道釧路市）	16
群馬県太田市	24
高知県佐川町	38
竹野南地区（兵庫県豊岡市）	54
泡瀬第三自治会（沖縄県沖縄市）	63
解説	74
事業報告	75
委員名簿	80

はじめに

凧 保 憲 (淡路市社会福祉協議会 事務局長)

厚生労働省 令和3年度新型コロナウイルス感染症セーフティネット強化交付金
「新型コロナ影響下での孤立を防ぐつながり人材の育成及び情報提供・アドバイス事業」運営委員長

2年を超える新型コロナウイルスの蔓延は、私たちの暮らしに大きな影響を与えています。コロナ禍以前に地域ぐるみで取り組んできた、多種多様な居場所や支え合いの活動は、中止や自粛を余儀なくされました。また、活動が途絶えるばかりでなく、丁寧に積み重ねてきた話し合いの場も減少させることとなりました。さらに、経済状況の悪化やつながりの希薄化による、孤立の問題も顕在化してきているといえます。

厚生労働省のセーフティネット強化交付金を受けて実施した本事業は、8人の運営委員をはじめ、研修企画作業部会のメンバーが、それぞれの立場から先述の問題意識を持ちより、孤立させない地域づくりのために必要な視点について、3つの事業（①地域づくり人材養成研修、②情報提供、③相談アドバイス）をとおして提起させていただきました。

地域づくり人材養成研修では、コロナ禍はもちろんコロナ以後の地域づくりをいかに進めるべきかという視点に立って、地域づくりや参加支援に取り組む支援者が身につけておくべき視点について研修Ⅰ、Ⅱを実施しました。

情報提供事業では、コロナ禍でも感染対策を行いつつ、つながりを切らせないための創意工夫の詰まった実践事例を情報誌にまとめ、WEB上で紹介しました。また、その活動を支える住民や専門職が登壇する実践報告の機会を、活動の一端を紹介する動画とともにオンライン配信しました。

相談アドバイス事業では、冒頭に述べた課題を関係者間で共有し、課題解決のための仕組みづくりを進めようとする自治体や支援団体からの申し込みを受け、担当者の問題意識や悩みを運営委員が中心となるメンバーがうかがい、WEB会議方式により助言させていただきました。

2021年4月に改正された社会福祉法は、地域福祉推進の理念として「地域共生社会の実現」を掲げました。コロナ禍の影響のみならず、現在の社会情勢は縦割りでは解決が難しい課題を生みだしています。本事例集（報告書）は、それらの課題解決のために専門職が住民活動を先導するという視点ではなく、住民が課題に気づくための援助を行い、その課題解決のために関係機関と協働することを支える専門職の視点でまとめられています。

今後の地域づくりに役立つ一冊になれば幸いです。ぜひ、手に取ってご覧いただき、関係者の皆さんとも共有いただけることを切に願います。

感染を防いで豊かになつながらりをはぐくんでいきます



家でいろいろ
楽しなくなった
けれど...



コロナ下でも

こんな「気にかけて合い」が、孤立や孤独を

時間を決めて
公園で
おしゃべり



ウォーキング



最近
会う回数が
増えたね



作りすぎ
ちゃって…



ありがとう
つけもの
持ってって



気になる人
おすそわけしながら
元気の確認

サロンの休止で
気になる人とはじめてこと

ラジオ体操



こんなに
曲がるようになったよ



コロナ できた け

オンラインでおしゃべり

孫が
生まれたのよー

元気？



スマホ教室で
LINEの使い方
講座



子ども食堂の利用者に
食材や弁当のお届け



作っている人の
つながりや
生きがいにも

学校どう？



大学生の
お兄ちゃんだー



集まれる
ようになったら
作品展しようね



「孤立させない地域づくり」のために 私たちができること

新型コロナウイルスの感染拡大を防止するために、私たちはいままで「当たり前」と思っていた多くのことが自由にできない日々を、ある日、突然に迎えることになりました。地域サロンの中止、イベントの延期だけでなく、気軽に人と会うこと、おしゃべりをする、ともに食卓を囲むこと、そうした多くのことが感染防止の観点から、自粛せざるを得ない状況となりました。友人や知人と会う、仕事や学校に行くことにも立ち止まっての判断が求められ、気になる人への気かけ合いや支え合いも、それをするものの是非が問われる日々を過ごしたことは、記憶に新しいことでしょう。

コロナ禍で、特に顕著な変化が見られたのは、地域のサロン活動や介護予防教室などの活動でした。行政からの通達や集会所の使用制限などで、多くのところが実質的に休止という措置をとりました。ですが、そんななかでも、気かけ合う気持ちをかたちにする行動が、地域のなかでみやくみやくと続けられてきていたことがわかりました。

たとえば、毎日の散歩を少し遠回りして気になる人を見守る自治会長や民生委員の皆さん。食事のおすそ分けや日々の暮らしのなかで見守りを続ける地域のボランティアの皆さん。顔を合わせる機会にあいさつし合うご近所の皆さん。そうしたつながり、人びとの思いと行動が、地域のつながりをしっかりと育み続けていたのです。

本事業で、こうした気かけ合いを図にしたものが、2-3ページに掲載した「コロナ下でもこんな『気かけ合い』が、孤立や孤独を防いで豊かなつながりをはぐくんでいきます」というイラストです。さらに、そうしたつながりを続けていた人たちは、コロナ禍でもふさぎこむことなく、再び集まれるその日のために、さまざまな工夫をしていました。感染者の増加で思うような活動ができない間も、再び集まれるその日を思い描きながら、つながることをあきらめずにいたのです。イベントとしての活動ではなく、日々の交流やおつき合いから、気かけ合う頻度が高くなり、暮らしのなかの困りごとを相互に解決し合っている場面もあります。コロナ禍だからこそつながり合うことが必要と、感染対策に十分な配慮をしながら維持することで、結びつきを強くしているところもあります。

そして大事なことは、これらの思いは、支援者の一方通行ではなく、「支援される人」とみなされてきた人の力もまた同様に、生み出していました。気かけ合い、支え合いは、「してもらおう」だけでなく、それに対しての「お返し」があったり、「一緒にする」ことで活性化されるなど、双方向の交流があったからこそ、広がっていったのです。

コロナ禍で
考える

「孤立させない」地域づくり

コロナ禍でも「気になる人を真ん中に」
～住民主体の地域活動～

NPO法人すずの会（神奈川県川崎市）



読み解きポイント

- 顔の見えるつながりを続けるための方法を考える
- 会えない人には、電話で寄り添う
- 活動の場が生きがいの場……ボランティアのつながりもたいせつに

6ページ

コロナ下でも変わらない一人ひとりが輝く居場所づくり
～就労と活躍の支援の現場から～

一般社団法人音別ふき蓆団（北海道釧路市）



読み解きポイント

- 地場産品の復活で、地域も人も元気に！
- 人と関わり、活躍できる場があることで自信と自尊心を取り戻す
- 遠くからでも思いを寄せる関係人口を増やすために、音別ふき蓆団の魅力を発信する

16ページ

「つながり」見つけて生かす生活支援体制整備事業
～生活支援コーディネーターの挑戦～

群馬県太田市



読み解きポイント

- 元気高齢者に学ぶ「コロナ禍でもつながる知恵と工夫」
- 実践事例を探して取材、情報紙に掲載して広く発信
- 「地域のお宝」を見える化する従来からの活動がベース

24ページ

コロナ下の住民活動と地域の拠点
～集う・つながる・支え合う 実践の現場～

高知県佐川町



読み解きポイント

- 住民活動組織とその活動拠点が地域づくりの基盤
- 屋外の活動にシフトして三密を回避
- コロナ下で「継続する活動」と「生まれた活動」

38ページ

つながりが地域を元気に！
～気かけ合いが広がる優しいまち～

竹野南地区（兵庫県豊岡市）



読み解きポイント

- 地域の課題をプロジェクト方式で考える
- こぼれ話から思いをくみ取る
- 課題を楽しみに変えて地域に広げる

54ページ

コロナ禍でもつながりをあきらめない
～ワクワクが広がる地域づくり～

泡瀬第三自治会（沖縄県沖縄市）



読み解きポイント

- 自分が率先して楽しみ、その楽しさを地域に広げていく
- 顔を見て、声をかけ合う関係づくりはコロナ禍でも顕在
- 1人の楽しさがみんなの楽しさ地域の楽しさに

63ページ

本事業では、コロナ禍の状況においても、地域とつながり、優れた参加支援・地域づくり支援を行っている団体や、課題を持つ人たちともつながりを切らない活動を行っている地域等を取材し、「コロナ禍で考える『孤立させない』地域づくり」を発行。専用ホームページで公開しました。また、連動企画としてオンライン講座も開催し、現地の動画とともに実践を深く学びました。

すべてのオンライン講座は、以下のホームページからご覧いただけます。

<https://www.tunagari-pj.net/case>

（2023年5月末日、公開終了予定）



「コロナ禍でも「気になる人を真ん中に」～住民主体の地域活動～」

NPO法人すずの会(神奈川県川崎市)

地域の概況

川崎市は、神奈川県北東部に位置し、東は多摩川を挟んで東京都と、西は横浜市と隣接しています。1972年に政令指定都市となり、現在に至るまで、10～30歳の社会増が続いています。

多摩川右岸に沿ってさかのぼるように連なる川崎市宮前区は、川崎市の西部に位置します。19

66年に東急田園都市線が溝の口～長津田間に開通、1968年

に東名高速道路の東名川崎インターチェンジが開通・開設し、さらに1970年代から里山が切り開かれて、相次いで宅地開発されました。ベッドタウンとして急激な人口増加と都市化が進んだことにともない、1982年に高津区から分区するかたちで誕生しました。多摩丘陵に抱かれ、「東高根遺跡」や「馬絹古墳」など文

化的遺産も多く、緑も多く残る地域です。

野川地区は、1970年代に電鉄会社が開発した住宅街として急速に発展。東急田園都市線鷺沼駅からバスで約10分のところに位置し、急な坂や細い道も多くありますが、閑静な住宅も立ち並びます。また、開発と同時期に県営・市営住宅が整備されています。開発当時に入居した住民の急速な高齢化も進んでいます。

川崎市（2021年6月末日）

人口 1,523,924人
65歳以上人口 305,417人
世帯数 770,539世帯
高齢化率 20.0%

宮前区（2021年6月末日）

人口 233,883人
65歳以上人口 48,102人
世帯数 107,353世帯
高齢化率 20.6%

野川地区（2021年3月）

人口 31,505人
65歳以上人口 7,521人
高齢化率 23.8%

NPO 法人すずの会

〒216-0044

川崎市宮前区西野川1丁目19-14



すずの会の誕生

すずの会は、「困ったときには鈴を鳴らして知らせしてほしい」という願いを込めて名付けられた、川崎市宮前区野川中学校区で活動をするボランティアグループです。鈴の音が聞こえるご近所の関係をたいせつに、介護者とその家族を支えてきました。その思いの源流は、1980年代にさかのぼります。すずの会の代表、鈴木恵子さんは、当時30歳代。夫は単身赴任中で、二人の息子の子育て、そして実の父母と義父母の介護は、鈴木さんの双肩に担われていました。介護保険もない時代、使えるサービスはほとんどありません。そんな鈴木さんの心身ともに支えとなったのは、保健師や看護師などの専門職だけではなく、子どもの学校のPTA仲間であるご近所の主婦友たちでした。「私がお母さんを見ているから、ちよつと買いたいものに行っていらつしやいよ」と鈴木さんのたいへんさをおもんばかり、快く送り出してくれていたのです。

10年にわたる在宅介護は終わりを告げましたが、こうしたささやか

すずの会のボランティア

(複数資格所持者はそれぞれ1人と計算)

- 介護支援専門員 (4人)
- 看護師 (1人)
- 社会福祉士 (4人)
- 介護福祉士 (5人)
- 実務者研修 (1人)
- 介護職員初任者研修 (14人)
- 福祉有償運送運転者 (2人)
- 薬剤師 (1人)
- 体育指導者 (2人)
- 整体施術師 (1人)
- 折り紙インストラクター (1人)
- 失語症会話パートナー (1人)
- 証券認定アナリスト (1人)

福祉系の専門職資格保有者の多くは、ボランティアですずの会に関わるようになってから取得をしています

設立当初から変わらな
いすずの会
の根幹の1
つです。
現在、す
ずの会の登
録ボランテ
ィアは60
人(上図表)。
福祉関係を

なお手伝いがあれば、在宅で介護が
続けられる、という自信が芽生えま
した。1990年代に入り、日本は
高齢社会に突入し、寝たきりや認知
症がクローズアップされるようにな
りました。「寝たきりや認知症になっ
たら、地域(家)で暮らせなくなる
の?」という不安に対し、「でも、鈴
木さんの家ではできていたわよね」
「鈴木さんの経験は、鈴木さん個人
の限定された課題ではなくて、自分
の課題になるかもしれないし、隣の
家の人の課題になるかもしれない。
だから、社会全体の課題として考え
ていくべきじゃないかしら」という
PTA仲間の気づきがありました。

「これは鈴木さん一人の課題ではな
い。このまちで住み続けるために、
鈴木さんの経験を活かしていこう」
という思いにあとおしされ、199
5年にボランティアアグループすずの
会が誕生しました。
「自分たちの老後も安心できる地
域づくり」をモットーとし、「高齢者
や障がい者とその家族を支え合い、
ふれあいながら誰にもやさしいまち
づくりネットワークを目指し、地域
のニーズに合った活動を積み重ねる」
という趣旨のもと、活動を広げてき
ました。公的サービスだけではどう
てい不可能な個別支援と地域づくり
を軸に、登録ボランティアによる活
動が会を支えています。「お互いに支
え合える地域づくり」への思いは、

はじめとした有資格者もいますが、
音楽の指導、写真、洋裁、調理、ケ
ーキづくり、編みもの、話し相手、
パソコン、車の運転、手芸など、自
分の特技を活かして活動をする人が
多数。それぞれができる範囲での活
動をしています。

すずの会の 活動の広がり

すずの会の活動は、地域のニーズ
に合わせて、居場所づくりから見守
り・支え合い、相談援助、健康づく
り、協働の場づくりなど、多様に展
開しています。

介護予防事業としては、ミニデイ
サービス、ダイヤモンドクラブ、地
域拠点の居場所「すずの家」による
通いの場事業など。介護支援事業と
しては、家事介護のスポットサービ
ス(コーディネート含む)、介護相談、
介護者の会、ボランティア協力など。
地域ネットワーク活動としては、介
護予防・支援を推進する地域ネット
ワーク「野川セブン」があります。

●ミニデイサービス

「リングリングクラブ」

1996年、若年性認知症の妻を

介護する男性の「僕と妻が参加でき
るところはありますか?」というひ
とことをきっかけに、ミニデイサー
ビス「リングリングクラブ」がスタ
ートしました。介護者である夫が家
族会に参加をしている間に、妻は数
人のボランティアと一緒におしゃべ
りをしながらお茶を飲むことから始
まりました。川崎市野川老人いこい
の家で月2回開催し、野川地区周辺
に住む要介護者と介護者、ボランテ
ィアが参加し、手づくりの昼食をと
もにしながら、一人ひとりに合った
プログラムで1日を楽しみます。こ
うした活動からなじみの関係をつな
ぎ、日常の見守りに活かし、孤立し
がちな介護者やその家族と地域とを
結ぶ場になっていました。ミニデイ
の終了後は、反省会を行い、その日
の様子から「気になったこと」など
の情報共有をし、気になる人への声
かけのコツや必要な配慮、ボランテ
ィア自身の介護体験など、それぞれ
が気づいたことを意見交換し、次回
に活かして、よりよい場づくりを続
けてきました。

●ダイヤモンドクラブ

ミニデイに行きたいけれど、行く



気になる人を真ん中に「ダイヤモンドクラブ」

ダイヤモンドクラブのポイント

- ・気軽に参加できる（歩いて5～6分の場所で開催）
- ・決まりごとが少ない（開催は自由、年3～4回、5人以上の参加がある）
- ・「気になる人」が必ず一人参加（楽しくつどいながら、気軽に悩みも出し合える）
- ・ゆるやかにつなげる（何かあったときに助け合えるつながりに広げる）
- ・つどいの場は、個人宅、集会所などを利用し、ご近所単位で集まる
- ・年1回、ダイヤモンドクラブ全体の交流会を行い、つながりの幅を広げる

ことが困難な人の「集まれる場所がほしい」というニーズに応えて、2004年に始まったのが「ダイヤモンドクラブ」と呼ばれるご近所単位でおつきあいの輪を広げるお茶会です。地域で孤立しがちな高齢者、障がいのある人、介護者、子育て中の母親など、ちょっと気になる人と一緒に、ご近所単位で集まります。困

りごとがあれば日常的にすぐ集まれるようになるほど関係が深くなり、ダイヤモンドクラブの形にこだわる必要がなくなりましたため、発展的に解消したところもあります。ダイヤモンドクラブには、地域包括支援センターなどの専門職も参加することがあります。「専門職は専門知識をもっている人だけでなく、その人の生活についてすべてを知っているわけでは

ありません。専門職がかかわる領域は、生活全体の一部」と鈴木さん。専門職も介護者も、ともに要介護者を支えるそれぞれの役割があり、専門職が専門領

域のプロであるならば、世話焼きさんは生活のプロでなくては、と鈴木さんは考えています。2009年、在宅介護を続けていたHさんは、夫の特別養護老人ホームへの入居を決断しました。Hさんは、3年以上にわたる自身の介護経験を地域に活かすために、ご近所で在宅介護をする人のダイヤモンドクラブに参加します。そこで夫の介護を一人でする妻の姿を見たHさんは、しだいに夫を家に連れて帰れないだろうか、と考えるようになりました。2012年に特養から、療養病床への転院の提案や看取りについての話

し合いの申し出があると、Hさんは、「夫をこのままここで死なせたくな

い。家に連れて帰りたい」と鈴木さんに相談をします。家族の意見も一致し、すずの会のコーディネートによる「チームH」が結成されました。

そしてHさん夫妻の在宅生活を支えるために、すずの会メンバーら地域住民をはじめ、特養（ショートステイ）、医師、訪問看護師、ケアマネジャー、訪問入浴サービス、介護用品レンタルなどが連携し、のちの一人暮らし高齢者のチームサポート体制の原型となりました。

●「すずの家」の開所、通いの場として事業を受託

2014年、すずの会は待望の地域拠点「すずの家」をオープンします。ここでは、川崎市の介護予防・日常生活支援総合事業の「住民主体による要支援者等支援事業」を受託し、近隣住民の通いの場として、高齢者の在宅生活を支えています。週2回、半径2～3kmエリアから高齢者がすずの家に集まります。歩いてくる人もいれば、送迎を利用する人も、昼食を食べたり入浴をしたり、おしゃべりを楽しんだりして過ごし



すずの家外観

ています。
「ここに来ると元気になれる、と言ってくれる人が多いのは、ここに人と人とのふれあいがあるから。元気で明るい表情で家に帰ると、家族がまた本人と向き合えるようになる。家族、専門職と一緒に本人に関わっていくことで、住み慣れた地域で暮らし続けられるのです」と鈴木さんは言います。

●地域ネットワーク会議

「野川セブン」

地域ネットワーク活動として、2

001年に、すずの会を中心に「野川セブン」が結成されました。月1回、地域の深刻な課題を多業種・多主体が同じテーブルで話し合い、解決を目指しており、地域ネットワークづくりや介護予防・支援に関する地域の問題解決の場になっています。現在は、自主活動団体のほか、地域包括支援センター、区役所、地区社協、町内会、自治会、民生・児童委員、医師会、薬剤師会、高齢者施設・事業者との連携強化の場ともなっています。顔が見えて信頼できる医療機関や介護保険サービス事業所、行政機関と日常的につながっているため、緊急事態が発生したときでも、たしかに専門機関につながるができる。「専門職には専門職なりの解決の方法があるし、私たちには住民としてのかかわり方がある。少しずつの力を合わせて、その人のためのネットワークをつくっていく。誰かが『こんなことで困っています』という情報を出すと、『私たちのところならばこんなことができる』と一緒に支えていきましょう」という声があちこちからあがります」と鈴木さんは話します。

新型コロナウイルスが活動にもたらした影響

このように多彩な活動を展開していたすずの会ですが、新型コロナウイルスの感染予防の観点から、活動の中止を余儀なくされました。つながりづくりや重点を置いて活動してきたすずの会にとって、つながりが切られるというこの状況は、大きな試練となりました。

活動が中止となっても、電話で安否確認をしたり、散歩中に出会う人に声をかけたり、弁当をつくって届



近所の畑で野菜を買いながら情報交換

けたり、できる方法を考えて見守り続けています。

さらに、すずの家の隣には畑があり、ここではとれたての野菜が販売されています。鈴木さんをはじめ、すずの会のボランティアもこの野菜のファン。野菜を買いに来がてら、おしゃべりをしながら地域の情報交換をすることも。「すずの家には来ない人も、ここに野菜を買いに来ると出会えることがあります。畑はいつでも誰でも気軽に来て話ができる場所。コロナ禍で改めてそのつながりの重要性に気づかされました。挨拶やちよつとした会話から、体調を気遣う声かけができていくんですよ」と鈴木さんは話します。

●おすそわけのタケノコから

始まったお弁当

川崎市介護予防・日常生活支援総合事業で受託する通いの場合は、市からの要請により中止をせざるを得ない状況になりました。すずの会では、電話で気になる人の安否確認などを続けていましたが、電話口から聞こえる声は「コロナじゃなくて閉じこもりでコロナと行きそう。寂しい」「毎日、行くところもなく、誰とも

タケノコごはんのおすそわけ



しやべらなくなった。テレビは毎日同じことばかりだし、どうなっているの？」など不安や孤独から来る心の叫びでした。

「特に一人暮らしの人などの入浴や食事が心配」と感じた鈴木さんのもとに、近所の人からタケノコの差し入れがありました。そこで、鈴木さんはタケノコごはんをつくり、利用者に配ることを思いつきました。

つくったタケノコごはんは、散歩がてら、すずの家まで取りに来てもらうことにしました。同じ時間に一斉に取りに来てもらうと、人が密集してしまう可能性があります。そこで、取りに来てもらう時間を細分化して伝え、人が集まりすぎないように配

慮をしました。

顔を見てのちよつとのおしやべりとタケノコごはんのおみやげに、「久しぶりに笑った」という声が聞かれました。こうしたささやかなつながりが重要と、すずの会ではその後も弁当づくりを続け、天気が良さそうな日に散歩を兼ねて取りに来てもらったり、取りに来られない人のところには届けて顔の見える見守りを続けました。

次男夫婦と同居をしているという諏佐キミエさんも、その一人。杖をつきながら坂道を登ってすずの家に来ます。「ちよつとたいへんだけれど、歩いて取りにくるのが運動なのよね」と話してくれました。



諏佐さんは、すずの家まで歩いて来る。坂道も「それが運動」と自分のペースで歩く

● ビタミンプロジェクトとスマホクラブ

事業の休止が続くなかで、気になる人は利用者だけではありませんで

した。活動を支えているボランティアもまた、出かける場所や役割がなく、閉じこもりが続いていました。

「家にずっといて、やる気がなくなってしまう。このままでは活動が再開してもまたボランティアができないかわからない」という声を聞き、改めてすずの会の活動が、介護が必要な高齢者やその家族を支えるためだけではなく、関わるボランティアたちの生きがいの場にもなっていたことに気づかされました。

裁縫が得意なボランティアには、当時手に入れることが難しかった布マスクづくりに参加してもらい、定期的に顔を合わせる機会をつくりました。その場を共有し、やはり顔を合わせてつながり続けることのたいせつさを感じたすずの会では、休止となっていたミニデイサービスのボランティアのためにミニデイサービスをすることにしました。

ミニデイは、川崎市社会福祉協議会のふれあい活動小規模デイサービス助成事業の助成を受けて開催してい

ビタミンプロジェクト



ましたが、ボランティアの平均年齢が78歳だったこともあり、全員がその対象となります。平均年齢90歳の利用者は電話や戸別訪問で見守りを続け、ミニデイでは、ボランティアたちが自主的に行っている地域への気配りや、自身が直面しているできごとなどの情報共有をはかる場としました。ミニデイでの介護や話し相手のボランティアとはかたちは変わっても、地域のことを話し合うという役割を担う場です。さらに、「生きがいでだけでなく、体も元気でいられるように」と、ビタミンがたっぷり野菜のおすそ分けも。ビタミンたっぷりの濃い野菜の色は、気分も高めてくれます。そしてなにより、「ネ

ーミングが大事」と、ボランティアのためのミニデイを「ビタミンプロジェクト」と名付けました。

さらには、近隣の大学生を先生に、「スマホクラブ」も開催。コロナ禍で加速を見せたデジタル化に対応するため、すずの家にもwifiを準備し、ボランティアたちがスマホを使いこなせるように学生に教えてもらう取り組みがスタートしました。

●自主事業として再開した通いの場
長引くコロナ禍で、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の対象となった期間は、川崎市の事業としての通いの場「すずの家」は休止が続きます。電話などで安否確認を続けていても、閉じこもりがちになり、ど

うしても気になる利用者がいます。そこで、すずの会では、自主事業として週2回、通いの場の再開を決断します。

再開にあたっては、感染予防に最大限の配慮をしています。消毒、検温、換気やマスクの着用はもちろん、10時から15時まで開催していた場合は、10時から13時過ぎまでに短縮。利用者の数も従来の半数程度です。昼食や入浴はどうしても必要な人ばかりのため、実施しています。

通いの場を開催する前日には鈴木さんが対象者に電話をし、利用をするかどうかの確認をしています。娘と同居する101歳の川俣よし子さんは、毎回、自分の体調を自分で判

断し、利用をするかどうかを決めていると言います。
10時を過ぎると、歩いてきたり、送迎を利用したりして徐々に利用者がすずの会につどってきます。消毒や検温を済ませて順に客間に。水分補給に気を配りながら、マスクごしのおしゃべりやランプを楽しみます。すずの家を再開するにあたり、すずの

会では医師との勉強会を2回実施。感染対策をとりながら通いの場を開くにはどのような点に配慮をすれば



トランプで楽しく時間を過ごす



手づくりのついたてで飛沫を防止し、昼食をとる

いいか、具体的なアドバイスを受けていますが、トランプもその一つ。プラスチック製のトランプを使用し、毎回、アルコール消毒をしています。感染予防をしています。

お昼の時間の前に、音楽に合わせて軽い体操を行います。その場で立って、または座ったままでも行える体操で体を動かしたあとは、昼食の時間です。

この日の昼食はカレーライスとサラダ、汁椀、お漬けもの。サラダの野菜は近くの

TEL友のつながり



畑で朝購入した新鮮なものです。一人分ずつトレイに載せて、スタッフが運びます。机の間には手づくりの飛沫防止用のついたてがたてられ、食事の時間は無言でいただきます。すずの家のボランティアスタッフも「私たち、ついおしゃべりをしたくなってしまうから、奥で場所を離れていた方がいいの」と言うほどの徹底ぶり。爪楊枝がほしそうな人など、ちよつとの動きにはすぐに気が付き、差し出します。食事があらかた終わると、マスクをして再びおしゃべりを楽しんでいます。

食事が終わると再び軽い体操をし、水分補給をしたのち、解散となります。送迎車に乗る人、歩いて帰る人

などさまざまです。「二人暮らしで、週1回すずの家を利用している。ここでのおしゃべりが何よりの楽しみなの」と話す人もいますほど、待ち遠しい場です。

利用者が帰宅したあとは、スタッフのミーティング。その日に気づいたことや、利用者の暮らしの様子に話及びます。ある利用者は、「熱があるから」と訪問介護の際に解熱剤の服用を勧められたことがありました。ですが、認知症のために温度を感じる感覚が鈍くなっていることや、洋服を選ばずに着込んでしま

うこと、そして暑い日でも適切なエアコンを使用していないことから熱中症の疑いが高いことが確認されました。

90歳の男性、Aさんもその1人。娘一家と同居をしています。感染への不安から、娘はAさんにはできない。

●TEL友としてつながり続けるすずの会として、通いの場の開催をしていても、ここに来られない、気にかかる人もいます。デイサービスに通っている人、持病があるために感染リスクを減らしたいと家族が考えている人など、さまざまですが、そうした人にも、すずの会では電話による安否確認も週1回程度行っています。

る限りの外出や人との会話を避けてほしいと考えています。そうした思いを受けて、Aさんも外出や人との関わりなど、感染のおそれのある行動を極力抑えた生活を続けています。ですが、そんなAさんの寂しそうな様子に気づいた鈴木さん。週1回の安否確認の電話だけではAさんの不安に寄り添えないと考えました。「こちらから気にかけてあげるだけでなく、Aさんが誰かとしゃべりたいときに電話をしてもらえよう」と、「20時以降ならばたいい電話にも出られるから、いつでもかけてきて」と伝えました。

Aさんからは、週2〜3回の電話がかかってくることもあり、長いときには20〜30分ほど話し込むこともあると言います。ボランティア的なAさんとの電話は、社会や経済、政治など、さまざまな内容で、「あつという間に時間がたってしまう」と鈴木さん。そしてAさんも、「こんな話に響いてくれる人は、なかなかいないよ」と言います。毎回違う話題で盛り上がりますが、それでも、「人としやべ

暮らしを支えること



らないと、言葉が出なくなるね」というAさんの言葉。そして、外出を控えているために「足が弱くなっている」という実感。「予防接種が終わったけれど、行くところがないんだよ」というAさんに、電話をつうじた友人として、心のサポートを続けています。

● 本人に合ったサポートのかたち

95歳の長瀬進さんは、要支援2の一人暮らしの男性です。ずすの家に週2回通い、昼食や入浴を楽しんでいます。ずすの家が休止している間、週2回の電話で安否確認をしていましたが、ある日、声の調子から元気のなさを感じ、鈴木さんが「どうかしたの？」と尋ねます。すると、



大正14年生まれの長瀬さん。電気関係のエンジニアとして長く勤められた

「一人で大丈夫と思っていたことが、ホームヘルパーは利用していましたが、入浴介助はメニューになかったため、6年ぶりに一人で入浴をしようとしたところ椅子から転倒してケガをしていたことがわかりました。」

外出を控えて動かなくなったために、体が言うことをきかなくなっていた」と言う長瀬さん。ずすの家が再開したときに、ずすの家で一日を過ごせる体力がなくならないように、家の周辺を散歩するなど定期的な声かけをしながら、電話や訪問による見守りを続けていました。

長瀬さんには、もうひとつ気がかりなことがあります。自費のヘルパーが都合により退職し、後任が見つからなかったのです。そこで、長瀬さんと同じ時代を生きてきたずすの会の80歳代のボランティアが有償で毎週3時間通うこととなりました。長いつき合いのボランティアは、長瀬さんの趣味や食の好み、生活ス

タイルを熟知しています。ボランティアにとっても、誰かの役に立ち、ちよつと稼げる仕事があることは、とても励みになることでした。

さらに、体力の衰えは確実に進んでおり、コロナ禍で遠方の家族の訪問も少ないため、充実したサービスの必要がありました。そこで、介護保険区分変更を提出し、要介護2の認定が出たことから、訪問診療や訪問リハビリも導入し、万全のチーム体制が組まれました。

すずの家では、入浴の前に体重を測っていますが、長瀬さんの体重の減少に気づいて様子を聞くと、自宅での食欲がないことがわかりました。介護事業所と話し合いの場を持つと、ヘルパーが買いものをするスーパーが慣れ親しんだところから変わっていったことがわかり、いつものスーパーに変更してもらうことにしました。慣れ親しんだスーパーの利用に戻したことで、長瀬さんは少しずつ元気を取り戻していきます。計測するたびに減少し、一時期は49kgまで落ち込んでいた体重も増加に転じ、50kgを超えました。「目標は52kg」という長瀬さん、みずからの元気が数字

にあらわれると、日々の食欲が増し、「次はステーキが食べたいね」と生きる意欲にもつながっています。

活動を支える行政の体制

2018年度より「住民主体による要支援者等支援事業」を実施する川崎市では、介護予防・日常生活支援総合事業の一般介護予防事業に位置づけ、高齢者の在宅生活を支えるための通いの場を実施する市内の9つの住民活動団体に助成をしています。

緊急事態宣言を受け、川崎市健康福祉局地域包括ケア推進室地域保健担当課長の鈴木宣子さんは、「助成先の住民活動団体は、どの団体も活

動者の高齢化が懸念されていました。つまり、利用者だけでなく活動者にとってもリスクが高く、そうしたなかで市として通いの場を中止するという決断をせざるを得ませんでした」と話します。同推進室地区支援担当の永井麻由美さんは、「外出を控え、生活機能の衰えだけでなく、会話をしていないことでの気力の低下がボランティアのなかにもあることを懸念していました。いざ再開ができる

電話による聞き取りチェック表

対象者名: 川崎 太郎 実施日: 2年 4月 15日

起床 時 / 就寝 時	睡眠		よく眠れる・夜中に目が覚める・あまり眠れない		
日中の生活	家で過ごす	散歩程度	図書館、公民館	親族・友人宅など	公園
過ごしかた	趣味	読書	テレビ・ラジオ	家事	町内会活動
外出	ひとりで	同居の家族と	別居の親族と	友人・知人と	ヘルパーと
来訪者	親族	友人・知人	ヘルパー・ケアマネ	家主・管理人	なし
来訪の頻度	週・月・年 回	週・月・年 回	週・月・年 回	週・月・年 回	不定期
親族交流	週・月・年 回 親族が来訪	週・月・年 回 電話で交信	週・月・年 回 手紙で交信	週・月・年 回 親族宅に訪問	なし
近所との交流	毎日ある	時々ある	挨拶程度	家主・管理人のみ	なし
話し・相談相手	いる(同居の家族・別居の親族・友人・知人・ヘルパー・ケアマネ・民生委員)				いない
食事	朝食(時頃)・昼食(時頃)・夕食(時頃)				
炊事	自炊	自炊と惣菜購入	外食・定食屋	コンビニ食・弁当	配食サービス
掃除・かたづけ	自身で	同居の家族	別居の親族	友人・知人	ヘルパー
洗濯	自身で	同居の家族	別居の親族	友人・知人	ヘルパー
通院の方法	徒歩	自転車	車椅子、手押車	バス・電車	タクシー
受診科目	内科	整形外科	眼科・皮膚科	泌尿器科婦人科	心療内科・精神科
通院回数	週・月・年 回	週・月・年 回	週・月・年 回	週・月・年 回	週・月・年 回
治療中の傷病名					
治療内容	診察のみ・定期的検査・リハビリ・人工透析・手術・入院の予定・その他				
服用中の薬					
処方薬の管理	自身で	同居の家族	別居の親族	友人・知人	ヘルパー
金銭管理	自身で	同居の家族	別居の親族	友人・知人	あんしんセンター
緊急連絡先変更(あり・なし)	氏名	住所	続柄	TEL	
その他	(電話の中で気になったことやその他)				

- すべての項目をチェックしたり記入する必要はありません！
- 皆さんの手間をできるだけ省くために使用する既存の書式です。
- 該当するところがあれば、○を付けてください。
- 1カ所でも○や記載があれば、OKです。

状況になっても、気力が落ちてしまっているのは活動ができません。コロナ禍でもできることで、団体の活動を支える仕組みを考えました」と話します。そして生み出されたのが、「新型コロナウイルス対応の業務委託」。即時性のある安否確認に対して、見守り支援としての加算をつける事業です。対象者1人につき1日1回を上限に、「電話による見守り支援」として5

00円が支払われます。さらに、対象者の健康状態により、専門職との連携が必要と感じられた場合には、「関係機関等との連携支援」として1,000円が支払われます。

永井さんは、「この事業における委託の基準が、通いの場の開催頻度を週1回以上としているため、電話による見守り支援の想定は一人あたり週1回程度と考えていますが、心配の度合いが高い人は当然その頻度も高くなります。1回の電話に30分程度かかることもあると聞いていて、誰かと話すことを望んでいる様子がわかります。高齢で耳が遠くて聞き取りがうまくできない、詐欺の被害を心配する家族から固定電話には出ないよ、うに言われているなど、課題もあります。感染リスクを減らしながらつながりを切らず、地域ではぐくまれている活動を、行政としても支援をしていきたいと考えています」と話します。

すずの会年表

1980年代	鈴木恵子さんの在宅介護がスタート、鈴木さんをPTA仲間が支える
1995年	5人のPTA仲間と在宅生活支援ボランティアグループ「すずの会」が発足
1996年	ミニデイサービス「リングリングクラブ」、介護者の会開始
1999年9月	利用者の視点に立った介護情報誌「タッチ」発行
2001年	野川地区でボランティア活動をする7団体による地域ネットワーク「野川セブン」結成、「男性介護者の会」発足
2002年	特別養護老人ホームで「喫茶マロニエ」開始（月1回）
2004年	気になる人をご近所単位で見守る「ダイヤモンドクラブ」開始
2005年	地域包括支援センターと事例検討会「坂の上クラブ」開始（月1回）
2006年	「公園体操」開始
2011年	支え合いマップづくり（厚生労働省事業）
2012年	H家の在宅介護を支える「チームH」結成
2014年4月	拠点「すずの家」オープン
2014年6月	川崎市モデル事業で一人暮らし在宅高齢者への有償サービス開始
2014年6～8月	川崎市介護予防支援モデル事業を受託
2014年4月～2016年3月	川崎市総合事業住民主体サービスに向けたモデル事業を受託
2018年4月	川崎市介護予防・日常生活支援総合事業「平成30年度住民主体による要支援者等支援事業」受託
2019年	NPO法人すずの会設立
2019年4月	川崎市介護予防・日常生活支援総合事業「平成31年度住民主体による要支援者等支援事業」受託、すずの家で週2回の通いの場を実施
2020年2月	緊急事態宣言により活動を中止、電話等での見守りを開始
2020年3月	マスクづくり、戸別配付
2020年4月	川崎市介護予防・日常生活支援総合事業「令和2年度住民主体による要支援者等支援事業」受託
2020年4月	弁当の提供を開始
2020年6月	緊急事態宣言解除にともないすずの家を再開
2020年6月	公園体操再開
2020年7月	ボランティアのためのミニデイ「ビタミンプロジェクト」開始
2020年7月	「野川セブン」再開
2020年7月	「坂の上クラブ」再開
2021年1月	2度目の緊急事態宣言発出、川崎市事業としての通いの場は中止
2021年1月	自主事業としてすずの家で通いの場を開始
2021年2月	田園調布大学と協働でスマホクラブを開催
2021年4月	川崎市介護予防・日常生活支援総合事業「令和3年度住民主体による要支援者等支援事業」受託

コロナ下でも変わらない一人ひとりが輝く居場所づくり

（就労と活躍の支援の現場から）一般社団法人音別^{おんべつ}ふき落団^{ふき}（北海道釧路市）

地域の概況

北海道の東部の太平洋岸に位置する釧路市は、釧路湿原と阿寒摩周という2つの国立公園をはじめとした雄大な自然に恵まれています。

また、北海道東部の中核・拠点都市として社会、経済、文化の中心的な機能を担っています。酪農、林業、水産業がさかんで、大

規模な食品・製薬工場や全国唯一の石炭鉱業所が操業しています。

2005年10月に、当時の釧路市、阿寒町、音別町が合併して新生「釧路市」となりました。音別町は、釧路市西部に位置する飛び地となります。道東と道央を結ぶ国道38号線を釧路市中心部より西に約45km（60分）ほどの位置にあり、タンチョウヅルが飛来する豊かな自然に囲まれています。

かつては雄別炭礦の尺別炭礦が栄えていましたが、エネルギー政策の転換により1969年に閉山。1,000人を超える従業員は全員解雇となり、炭鉱離職者の多くは働く場を求めて音別町を離れました。かつて約1万人以上の人口を擁していましたが、閉山以降、人口は減少しましたが、それにとまらぬ少子高齢化も進んでいます。

北海道釧路市(2021年8月末日現在)

人口 163,962人
65歳以上人口 56,597人
世帯数 93,806世帯
高齢化率 34.5%

釧路市音別町(2021年8月末日現在)

人口 1,624人
65歳以上人口 664人
世帯数 959世帯
高齢化率 40.9%

一般社団法人 音別ふき落団

〒088-0118
北海道釧路市音別町中音別 494
電話&FAX : 01547-6-8011



ふき落団の看板を囲んで

音別ふき落団の誕生

釧路市音別町に初夏が訪れる6月。中音別に広がる広大なフキ畑を目にします。背丈が2メートルにもなるフキを栽培するのは、一般社団法人音別ふき落団。生産・販売・加工・流通・販売までを担っています。

音別ふき落団は、その設立の前に、一つの象徴的なエピソードがあります。

音別町は、もともとは炭鉱として栄えたまちでした。ですが、炭鉱が閉山され、働き手は職を求めて町外へ転出。人口減、そして衰退する産業に、音別町の元気が失われつつありました。

そんな音別町中音別地区の酪農地帯に、農家レストラン「カフェさつき晴れ」があります。このカフェを運営するのは、のちの音別ふき落団の代表となる伊藤まりさん。伊藤さんは看護学校を定年退職後に音別町に移住、カフェを運営しながら、生活困窮者などの自立支援の活動に携わっていました。カフェさつき晴れでは、近所の元酪農家の人たちがお酒を酌み交わすために、地域

フキ



伊藤まりさん

や自分たちの暮らしについて話をしています。

そうした場を、一般社団法人鉦路社会的企業創造協議会の代表理事、榎部武俊さんが耳にします。榎部さんは、地域の将来について話し合っているところを訪ね、「なんとかして

地域おこしをしたい」「高齢化、人口

減少で衰退していく地域をなんとか

食い止めた」という地元の人

の思いを聞いて、この地になにか目玉と

なる産業を興せないか、考えました。

榎部さんは、他地区での成功例から

「大手の薬品メーカーと契約し、

漢方薬の原料となる薬草を音別で栽

培してみようか。地域の目玉産

業になりうるのでは」と持ちかけま

す。ですが、そこにいた人たちは首

を横に振りました。「音別にはフキと

いう産業がある。せつかくやるなら

ば、フキで地域を盛り上げたい」。

榎部さんの提案した薬草栽培と比

較をすると、フキの収益性は必ずし

も高くはありません。ですが、「地域

の特産品で地域を盛り上げたい。音

別といえはフキなんだ」という地元

の人の言葉を聞き、榎部さんは「地

元の自発性のある思い。これはうま

くいくと感じた」と言います。伊藤

さんと元酪農家と話し合いを重ねて、

フキをどうやって育てていくかとい

った具体的な方法だけでなく、フキ

を活かした地域おこしをしながら孤

立を防止し、就労支援にもなり、そ

して人が活躍し、社会参加の場づく

りをしていこうという考えが固まっ

ていきました。

とはいえ、その道りは簡単では

ありませんでした。「いろいろな人が

一つの場集まり、話し合う。いま

での価値観とは違う意見が出てきた

ときに、その意見をどう取り入れて

いくか。それが地域で、地域おこし

とはときにある人の価値観がひつ

り返るような経験をすることもあり

ます。いろいろな発想を取り入れな

がら、調整をすることが何よりも難

しかった」と伊藤さんは振り返ります。

そうして2017年5月、伊藤さ

んは近隣の元酪農家4人とともに、

一般社団法人音別ふき栽培団を設立

しました。特産品であるフキの栽培や

商品開発を通して、フキ資源の保護

と地域の産業振興を図りながら、低

所得者、生活困窮者、ひきこもり状

態の若者、障害者、高齢者などに就

労と社会参加の機会を提供すること

が主な目的です。

音別ふき栽培団の1年

音別ふき栽培団は、音別町の特産品であるフキを活かした地域おこしをしながら生活困窮者の自立支援、障害者やひきこもりの若者の社会参加支援、高齢者の生きがいづくり、住民同士のつながりづくり、福祉とか地域づくりを学ぶ学生のフィールドワークの場と、多面的な展開をしています。

フキ栽培の活動は4月から11月まで、フキは5月中旬から旬の季節

を迎えます。施肥や害虫防除、除草などから刈り取り、販売、出荷、さらには加工品の準備など大忙しです。始めた当初は10トンほどの生産でしたが、農地も広がり、いまでは50トンの生産を目指すまでに。収穫したフキは、ふき蒔団を訪れる人に販売するほか、新聞販売店とおした市内販売や、道内の個人宅に販売したり、グリーンコープ生活協同組合連合会（本部・福岡県）などにも卸しています。

伊藤さんら団のメンバーらに加え、生活保護を受給しながら市の自立支援プログラムなどに基づいて働く人たちも一緒に汗を流します。年齢層は20～70歳代と幅広く、生活保護に至った経緯もさまざまです。「ここでの仕事を気に入って、4シーズン連続で来てくれている人もいるんですよ」と伊藤さん。すぐに経済的な自立にたどり着けなくとも、社会参加と交流の場があり、地場産業の活性化に貢献し、わずかでも収入を得ることが「心身の健康と生きる力の回復につながる」と伊藤さんは訴えます。

さらに、農場の近くに暮らす90歳

代の夫婦は、もともと兼業農家で、夫が好奇心から育てたフキを近くにあった山菜工場に持って行くことがありました。音別ふき蒔団が一般社団法人化したことから「団を信用できる」と農地を団に貸与。その後も、研究熱心な夫は「どうすれば虫がつきにくいかな」を考えたり、メンバーが作業をしている姿を見かけると畑に出てきて農作業のコツを教えたり、身の上話をすることもあります。夫は2年前に大病をしましたが、ふき蒔団という地域の居場所に戻りたいという思いも相まって元気を取り戻し、ふたたび農地に立っています。妻もパートでふき蒔団の活動を手伝うこともあります。伊藤さんは、「高齢でも探求心や好奇心、そして居場

所と役割と仲間がいることで元気を保っている。これが生きがいというものですね」と話します。このほか、地元の知的障害者支援施設「おんべつ学園」の入居者約10人が除草作業に従事します。

●また来るね、の思いを長靴に

生活保護に至った人のうち、希望する人は福祉事務所から紹介をされて、音別ふき蒔団で就労準備支援事業による自立支援プログラムに参加します。このプログラムは、原則として1年間を1クールとして実施されます。生活保護受給者は、市内のさまざまなプログラムから興味のある活動を選び、参加をします。ふき蒔団を選択する理由は、「農業をして

みたい」という思いから、「釧路の中心部から少し離れたところで活動をしたい」という思いまでさまざまです。音別ふき蒔団にとって、彼らは生活困窮者、生活保護受給者という以上に、フキの栽培にかかわる大きな戦力です。彼らは、週1～2回、釧路市内から音別町に通い、年間をとおして栽培・生産・加工・販売の工程に携わり、ともに過ごします。お客様が来られたときの商品説明をする接客の姿にしたいに自信が見えるようになったり、なかには、食品衛生責任者の資格をとるなど、確実にステップアップをする姿がそこにあります。

とはいえ、1年間のプログラムが終わり、翌年にどんな仕事を選ぶの

長靴



かは、彼らが決めること。普段のミーティングでは来年に向けての改善点を話し合うなど、続けてここに関わりたいという意欲も感じられていると言います。それでも伊藤さんは「来年も来てね、とは言わないけれど、来年も来てくれたら助かる」と声をかけます。彼らは、「また来るね」という言葉とともに、音別ふき露団に、自分の長靴を置いていきます。来年も関わり続ける、帰ってくるよ、という意思表示でもあり、そしてここが彼らにとって、帰ってくる居場所なのです。

そして新しい春が来ると、成長した彼らが新しく来る人たちの指導役となり、農作業や接客のノウハウなどを伝えていくのです。

●地域交流サロンのような居場所

フキの収穫期は大忙し。収穫したフキをそのまま販売するだけではなく、安定した売り上げのために、フキの加工品の製作も進めています。そこでは、地元の80歳代の女性が4人、活躍しています。

女性たちは、かつて音別町でフキの生産がさかんだったころ、町内の

フキの加工場



工場です。工場では、フキの水煮をつくるための皮むきをしていました。昔取った杵柄とばかり、ふき露団の畑につくった加工場で、フキの皮むきの手伝いに来ています。「1週間の予定で来てもらったのに、皆さん手際がいいから3〜4日で終わってしまうことも」と伊藤さん。

加工場では、メンバー4〜5人と80歳代の女性が集まり、好きな音楽



収穫したフキを束ねる

をかけて笑ったりおしゃべりを楽しみなが作業をしています。年齢を重ねても地域産業の振興のための役割を担い、さながらここがサロンのような、フキを中心とした住民の居場所になっています。

●年間をつうじた収入を得るために

収穫したフキの一部は、加工をして販売をしています。生フキの販売だけでなく、年間をつうじた収入を確保することで、経営の安定化をねらっています。

音別ふき露団は、設立以前の2017年3月にワークショップを行い、活動の枠組みを考えたり、マーケットインクショップなどを学び合いました。ワークショップには、ふき露団だけでなく

く、行政、ふき露団の畑で作業する人を派遣する知的障害者施設、フキの加工場の経営を引き受けている地元の警備会社なども参加しています。

このワークショップには、ファッションショーのため、東京在住のプロを招いています。活動に賛同し、協力したいと申し出てくれたファシ



収穫したフキをピクルスに（音別ふき露団ホームページより）



葉は北海道の形。音別町の位置に光が差します。人と人が落のもとに集い、楽しく活動する様子を踊るような文字の角度で表現しています



就労ではなく生活支援として、障害のある人たちがラベルを貼ることを想定しています。ラベルの貼り方は自由。個性のあるメンバーの関わりがこうところにも表れています

リテーターを招くことは、地元では気づかなかつた外から感じる魅力に改めて気づく契機となっています。生フキは、年1回開催されるフキ祭りで販売をしていましたが、新型コロナウイルスの影響で2020年、2021年は中止に。これを機に生産だけでなく、製造、流通、販売にも本格的にチャレンジしていくこと

ランチ



伊藤まりさんは元看護師で、由緒あるレストラン「Café de Fuki」の店主です。伊藤さんは、市内のフランス料理店に依頼しました。いろいろな人がかわり、そして世界に1つだけしかない、さらに体に優しいといった取り組み全体を、関係人口にさまざまな

立場の人の関わりのおかげで生み出していくという価値を広めています。●その人の強みを活かす 伊藤さんは、「週に何度かここで作業し、昼食をしつかり取る」健康面のメリットも「見逃せない」と言います。元看護師、そして農家レストランの経営者としての視点からも、生活困窮やひきこもりで生活リズムが整わない人や、自分の体調に無頓着な人の意識を変えるために、栄養バランスのとれた食事をみんなで食べるのが、生活面においても健康面においてもたいせつなことと実感しています。「友人がいないから昼食はカップ麺しか食べていない」という人も、ここでは一緒に汗を流した

仲間とともに食事をするのです。ふき落団にたどりついた人は、さまざまな人生を送ってきています。「病気になって仕事を続けられなくなった」「会社が倒産した」など、抱える背景は人それぞれですが、活動をおしてその人の強みに気づいていきます。たとえば「以前、農園で働いた経験があつて土の状態がよくわかっていて」「時間管理ができていたり、使用後の資材を洗浄する姿から真面目で几帳面な性格がわかる」など。 食事をつくるのは、伊藤さん。ですが、ここには以前、小料理屋で板前をしていたメンバーもいて、伊藤さんは味付けや調理の秘訣を教えてくださいました。この人は、

になりました。製品化するためには、ブランディングが重要な要素になります。そのため、賛同してくれるデザイナーが加わり、Zoomなどで議論しながらラベルなどを製作しました。音別ふき落団のフキの特徴は、農薬を使わず、人にも環境にも優しいことです。それだけでは魅力は伝えきれません。たとえば商品化されたピクルスは、メンバーがフキの茹で時間なども研究し、みんなで考えました。そうしてできたピクルスの製造は市内のフランス料理店に依頼しました。いろいろな人がかわり、そして世界に1つだけしかない、さらに体に優しいといった取り組み全体を、関係人口にさまざまな

立場の人の関わりのおかげで生み出していくという価値を広めています。●その人の強みを活かす 伊藤さんは、「週に何度かここで作業し、昼食をしつかり取る」健康面のメリットも「見逃せない」と言います。元看護師、そして農家レストランの経営者としての視点からも、生活困窮やひきこもりで生活リズムが整わない人や、自分の体調に無頓着な人の意識を変えるために、栄養バランスのとれた食事をみんなで食べるのが、生活面においても健康面においてもたいせつなことと実感しています。「友人がいないから昼食はカップ麺しか食べていない」という人も、ここでは一緒に汗を流した

仲間とともに食事をするのです。ふき落団にたどりついた人は、さまざまな人生を送ってきています。「病気になって仕事を続けられなくなった」「会社が倒産した」など、抱える背景は人それぞれですが、活動をおしてその人の強みに気づいていきます。たとえば「以前、農園で働いた経験があつて土の状態がよくわかっていて」「時間管理ができていたり、使用後の資材を洗浄する姿から真面目で几帳面な性格がわかる」など。 食事をつくるのは、伊藤さん。ですが、ここには以前、小料理屋で板前をしていたメンバーもいて、伊藤さんは味付けや調理の秘訣を教えてくださいました。この人は、

長い間板前として仕事に就いていましたが、妻と死別し、働く意欲を失ってしまったいました。「以前にたずさわっていた食に関するのならなにかできるかもしれない」とフキに興味を示し、音別ふき露団にやってきたと言います。

農作業のない日に、ふき露団では商品開発会議を開催したことがありました。フキの佃煮を、昔から音別町で受け継がれているレシピ、自分流にアレンジした佃煮、最近の傾向を考えて減塩を意識した佃煮などを持ち寄りました。その会議の場では、「食事を介して話したほうが盛り上がるだろう」とその人に食事づくりを依頼しました。「農作業をしているときは違う、きりつとした雰囲気調理に集中していました。積み重ねてきたことが活かされることでの喜びや誇りを私たちも感じました。食にこだわりがある人も、この日の食事はきれいに食べてくれたんです」と伊藤さん。

伊藤さんは、「暮らしを支えるとは、仕事をするこだけじゃない。人と集まったり、しゃべったり、誰かの役に立ったり、誰かになにかをして

もらったり。そうしたことをふき露団では大事にしています」と話します。音別ふき露団では、フキの栽培だけでなく、その人の個性や強みを見つけて、活動のなかで輝ける場をつくっています。そこは、「働く」だけではない、生き方のいろいろなモデルを、日常の活動のなかで感じ合う場でもあるのです。

釧路市における生活保護受給者の実態

「新型コロナウイルスの影響で、今までなら生活保護の受給層ではない人たちが多く相談に来ます」と話すのは、釧路市福祉部生活福祉事務所生活支援主幹の小半千幸さん。

預貯金があるためにすぐに受給には結びつかなくとも、「シフトが少なくなつた」など、新型コロナウイルスに関連した来所の相談は2021年3月までに86件にのぼり、そのうち48件が生活保護の受給申請をしています。「まずは生活保護を受給して生活を立て直し、健康で働ける状況ならばそこから仕事を探していきますが、生活保護の受給に対して抱える強いステイグマから、『生活保護

だけは受けたくない』という人がいるのも事実」と話します。なかにはダブルワークで働きながら、その双方に影響があり、限界を超えたところでもなお頑張ろうとしている人もいて、定期的な見守りが必要になっている人もいます。

住居確保給付金は、年間5件程度の申請だったものが、新型コロナウイルス感染拡大後は537件の相談があり、うち212件が申請に結びつきました。緊急小口資金は1、378件、総合支援金は734件、それぞれ申請がされています（いずれも数値は2021年7月末日まで）。

すぐに就労に結びつくことができない人は、ボランティアや中間的就労の場への参加をしながら、社会との関わりを取り戻し、自立に向けて動き出します。参加者が働きながら人と関わり、生き活きとした表情を見せ、自信を取り戻していく様子から、「音別ふき露団は、保護をやめていく自立ではなく、まずは自尊心の回復に向けた自立という意味で非常にいい取り組みだと考えている」と小半さんは話します。

最近、音別ふき露団を訪れると、

参加者の様子を聞くだけでなく伊藤さんから団の今後の活動についても助言を求められることもあると言います。「そうしたときは、生活福祉事務所の職員としてではなく、応援団の一人として活動を一緒に考えている」という小半さん。生活保護受給者の就労支援の場だけでなく、農福連携という言葉では収まらない地域づくりに向けた展開が、今後の可能性を広げています。

中間的就労の希望者を受け入れる高齢者施設などでは、人の手が足りずに疲弊している一方で、コロナ禍で人との接触を避けなければならぬというジレンマを抱えています。そうした場でも、「思いを伝え、情報



小半千幸さん

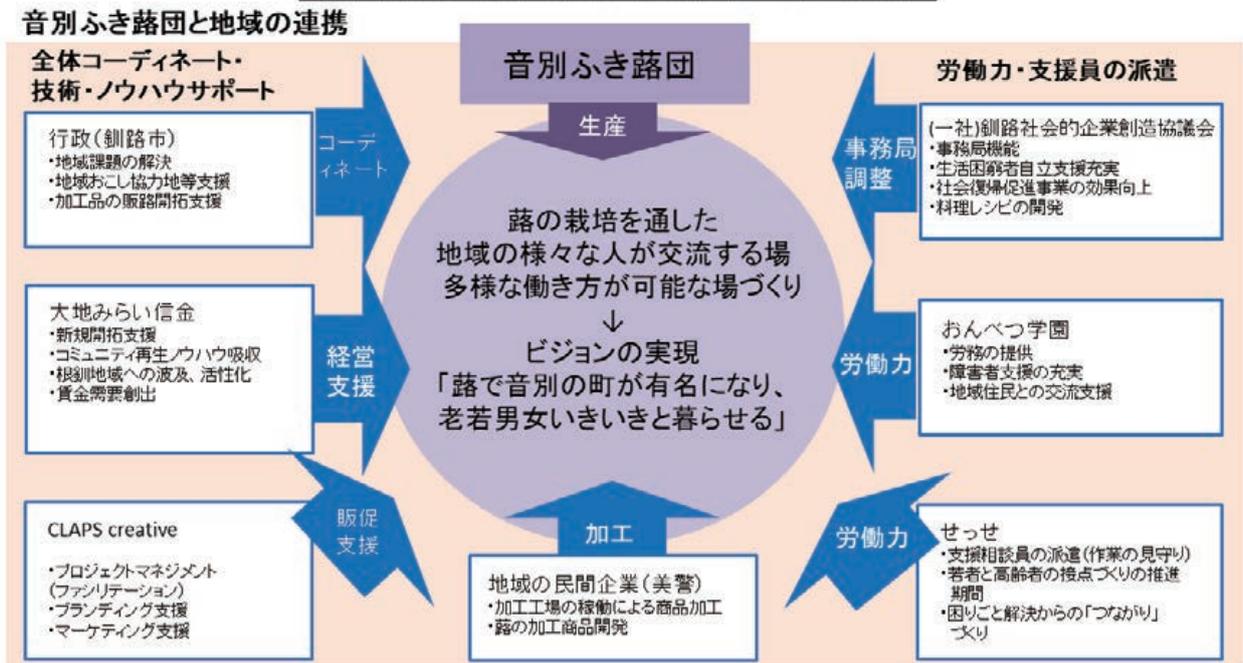
を共有することで、受給者がまずは自尊心を取り戻していくように関わりを続けていきたい」と話します。

人と人のつながりによる新しい活躍支援

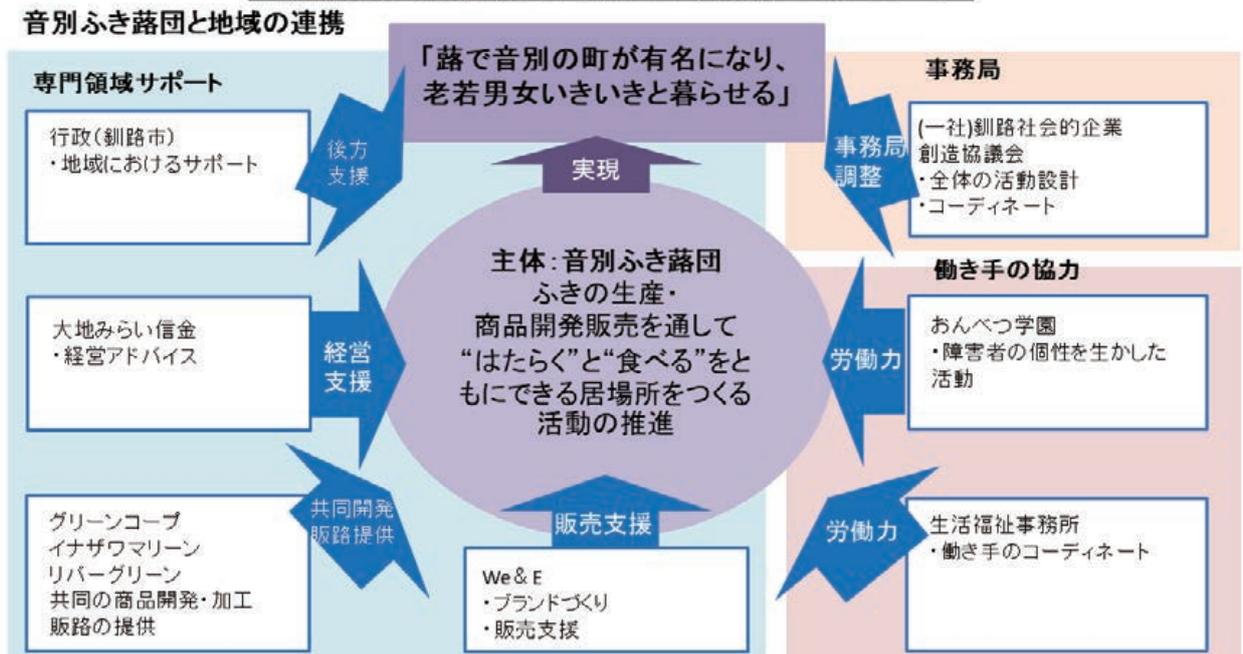
音別ふき落団のビジョンは、「落で音別町が有名になり、若い人から年配の方まで、どんな人も自信を持って、イキイキと暮らせる」。

前述の榎部さんが設立した一般社団法人釧路社会的企業創造協議会は、2012年に生活困窮者の自立支援などを目的に設立され、2013年から北海道釧路総合振興局と釧路市の委託事業として生活困窮者自立支援の総合相談窓口「生活相談支援センターくらしごと」を運営しています。2003年ごろから、地域の基幹産業が衰退し、同時に生活保護受給世帯が増加し、生活保護がそうした人たちの暮らしを支えてきていました。そこで、くらしごとでは、高齢化し、担い手が不足している漁網の整網を生活保護受給者が取り組んでいます。それは、基幹産業を支え、技術を継承し、そしてそれが働く場であり、居場所であり、コミュニケ

関係人口の広がり（生産、～2019）



関係人口の広がり（開発・販売、2020～）





榎部武俊さん

「シヨンの場にもなりうるということを実感する取り組みだったので。」「生活保護を辞めさせるだけが自立ではない、受給しながら自立を目指すかたちもある」と話す榎部さん。「そこで気づかされたのは、本人の自尊心、自己肯定感が出発点であるということ。一般就労か、それであれば働けない、という選択肢ではなく、そのまんなかに中間的な就労という、通いの場であり居場所がある重要性、そしてさらにその場で収入が得られるという仕組みをつくる」と、鉦路市では自立支援を進めてきた」と言います。そして、その活動を「地域づくりという視点で広げ

られないか」とたどりついたのが、音別ふき露団の活動でもあります。

榎部さんは、「中間的就労は、一般就労の途中段階ではない。その人の1つのゴールとして中間的就労というもののあり方を考えたい。その究極の姿が、地域おこしを担うふき露団の活動」と言います。生きづらさや働きづらさを抱えた人も、地域がまるごと受け止め、そして活き活きと活動をすることで地域を支え、人を支える側に。地域も人も自信と誇りを取り戻していくのです。「それが社会的企業。そして次の課題は、単独で持続可能な仕組みをつくること。年金や生活保護など必要な制度を使いながら、仕事をして賃金を得て、そして地域を支えていく」と力説します。

そしてたいせつなことは、関係人口を増やしていくこと。「人口減少は避けられなくても、遠くに住んでも音別町を感じ、ふき露団を考えて支えてくれる人を増やしたい」と榎部さん。関係のしかたはさまざまです。訪れる、体験する、購入する、学ぶ……さまざまなかかわり方があります。

生産を中心とした2019年までは、生産をするための労働力の提供や経営支援などが中心の「働く場づくり」という視点での関係性の広がりが主でした。2020年以降、商品開発や販売にも力を入れ、ブランドینگや販路の拡大により、音別ふき露団が主体となった「ふきの生産・商品開発・販売を通して『はたらく』と『食べる』をともにできる居場所をつくる活動の推進」という「ビジョンの実現」に寄与していくと関係性に変化をしています。

「属性や年齢に関係なく、みんなが活性化することで地域を支える。みんなが活躍すること、それこそが地域共生社会。活躍支援、社会的企業、そして持続可能な地域づくりという取り組みを、音別の地から1つのモデルとして発信をし続けていく」と榎部さんは力強く語ります。



フキ畑付近にはタンチョウヅルも舞い降りる





太田市の中心市街地（左手のビルは市役所）

「つながり」見つけて生かす生活支援体制整備事業
 ～生活支援コーディネーターの挑戦～
 群馬県太田市おたし



まちの概要と生活支援体制整備の解説

群馬県東部に位置。人口22万4497人、世帯数9万7912世帯、高齢化率25・7%（2021年3月末時点）。自動車メーカーSUBARU（スバル）の製造拠点が立地し、工業都市として発展してきた。東武鉄道太田駅を中心に市街地を形成、郊外には田園地帯が広がり、モロヘイヤやスイカ、ホウレンソウ、ネギ、大和芋などの栽培が盛ん。市域は、市の区制規則

に基づき15地区、199行政区で構成される。^{*}生活支援体制整備事業の日常生活圏域Ⅱ第2層Ⅱは単独または複数地区で9圏域を設定（ただし、第2層協議体は14か所に設置）。生活支援コーディネーターは、市社会福祉協議会の地域福祉係に第1層1人、第2層7人を配置。協議体は、第1層が年2回程度、第2層は1〜2か月に1回程度会合を開く。

※生活支援体制整備事業

2015年4月の改正介護保険法施行で、各市町村は「住民主体の地域づくり」の推進役となる生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）ともを配置。併せて、地域づくりを話し合う場（協議体）を設置した。それらは原則として市町村全域（第1層）と、中学校区などを基に設定する日常生活圏域（第2層）とで活動。なお、自治体の規模によっては第1層が日常生活圏域となる場合も。

「コロナ禍の地域支援に挑む生活支援コーディネーターの実践」

2020年4月7日、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、政府が最初の緊急事態宣言を出しました。

これに先立つ同年3月から大人数の会合やイベントを自粛・制限する動きが全国的に拡大。太田市でも、市社会福祉協議会が市内12か所の公民館・集会所で週2回開く地域交流サロン「お茶の間カフェ」（運営は各地区の住民ボランティア）をはじめ、おもに屋内型の各種サークルやサロン、交流行事などが軒並み休止に。お茶の間カフェは、休止期間がすでに1年7か月に及んでいます（2021年10月末時点）。

市社協の生活支援コーディネーターたちはこの間、基本的な感染予防策を徹底しつつ、積極的に地域に向いています。コロナ禍でもできる地域活動や住民同士のつながり・支え合いを探し、取材し、その知恵と工夫を広く発信するためです。

きっかけは2020年5月に行った、第2層協議体メンバー計219人を対象とするアンケート調査。コ

ロナ禍が住民活動や人のつながりに与える影響のほか、「つながりを切らない工夫」などを尋ねる内容です。

アンケートは協議体を開催できないなか、メンバーとの連絡を絶やさない苦肉の策でもありましたが、思わぬ収穫がもたらされました。「つながりを切らない工夫」について多くの回答が寄せられたのです。

コーディネーターたちは、情報を寄せたメンバーらを水先案内人に、「工夫」の現場を取材。

たとえば、三密回避が容易な屋外でのラジオ体操会やグラウンド・ゴルフなどのサークル活動、自治会が主催する産直市や見守りを兼ねた廃品回収、ウォーキング、住民グループが行う花壇整備や畑仕事、親しい関係のなかで続くおすそ分けなどのご近所づき合いや少人数のお茶飲み、無料通信アプリLINE（ライン）を使った親族・友人とのビデオ通話、地域行事の中止で空いた時間を生かした神社の修繕活動など。これらの実践を市民に周知しよう

と、情報紙「つながる通信」を6月15日付で創刊。A4判両面カラーで、原則として月3回発行。電子版を市社協ウェブサイトで公開するほか、印刷して各地区の区長会を通じて自治会へ配付、住民に回覧してもらいます。2021年11月5日時点で第55号を発行。公民館や商業施設などを会場に「つながる通信」パネル展も開きます。

情報紙の発行を重ねると、「うちの地区でもこんな活動がある」「新しくこういう活動を始めた」といった、取材要請を兼ねた住民からの情報提供が増えます。コーディネーターは住民との関わりを求めて地域に入っ

て行くだけでなく、住民の側から関与を求められる存在に。地域に入る頻度は、コロナ前とほとんど変わらな

い水準になっていま

コーディネ

ネーターが掘り起こしたコロナ禍の地域活動や住民同士のつながりは、次の4つに分類されます。すなわち

- ① コロナ前と変わらない活動
- ② コロナ禍で生まれた活動
- ③ つながりを切らない個人の工夫
- ④ コロナ禍でも集いの場を継続する組織や団体の工夫

住民一人ひとりが4要素を一つでも多く持つことが理想。その実現をあと押しすることこそ、太田市のコーディネーターたちがコロナ禍で取り組む地域支援なのです。

「つながる通信」からは、その果敢な挑戦がひしひしと伝わってきます。掲載記事から8つの住民活動事例を選び、以下に紹介します。

太田市社会福祉協議会の生活支援コーディネーターが取材・編集・発行する「つながる通信」(第55号)

空いた時間で神社の修繕 〈コロナ禍で生まれた活動〉

西矢島町(九合地区)

西矢島町(九合地区)を鎮守する赤城神社に、毎週土曜の朝8時30分、70歳代の男性7人が大工道具を手に集まります。社殿などの修繕に取り組む人たちです。日曜大工ならぬボランティアの土曜大工。休憩を取りつつ夕方まで作業に当たります。

境内社の八坂神社も含め、神社の修繕は長年の課題でした。社殿の壁や床、基礎は傷みが激しく、業者に依頼すれば相当な費用が見込まれます。氏子の地域住民が負担するのは、現実的ではありませんでした。そこで2010年から区長や神社総代、



毎週土曜に神社の修繕に集まる男性たち

同世代の仲間が結集。自分たちの力で少しずつ手入れをしてきました。仕事や地区の行事などで皆忙しく、作業はなかなかかかどりません。それがこの2年ほどで一気に進展。コロナ禍で地区の行事が軒並み休止となった影響で7人のスケジュールに空きが生じ、毎週土曜を集中作業日としたのです。ほとんどは屋外作業で「三密」回避も容易。仲間にはプロの大工

もいて、作業方法や手順の指導役を務めています。基礎の補修は劣化した礎石をコンクリートで打ち替える重作業でしたが、自動車修理工場を営む仲間が耐荷重30トンのジャッキを持ち込んで無事完了。外壁などの部材の交換や塗装も着々と進み、社殿は往年の輝きを取り戻しつつあります。

前の区長(自治会長)で神社修繕を仲間と呼びかけた小此木榮二さん(75歳)は次のように話します。「神社は私たちが子どもの頃からずっと、このまちの中心。お祈りするだけでなく、住民がつどい、憩い、交流する拠点だ。社殿や境内がきれ



修繕作業の様子

いになれば親しむ人が増え、地域をつながりも守っていけると思う」コロナ禍で毎年10月の交流イベント「いいとこ西矢島祭り」と例大祭は2年連続で中止。それでも「お参りや散歩で神社を訪れる人は少しずつ多くなってる」(小此木さん)とのこと。

きれいになったね——参拝者のそんな一言が、7人の胸を熱くします。ちなみに作業日のお昼は、弁当を買って、境内にある集会所や社殿の縁、屋外のベンチなどでいただきます。「同じ釜のメシ」を食べ、チームワークもばっちりです。



お昼は皆で弁当をいただく

10年続く朝のラジオ体操 へコロナ前と変わらない活動へ

西矢島町(九合地区)

「いいとこ西矢島体操クラブ」は、西矢島町にある赤城神社(前頁参照)の境内で2010年にスタートした朝のラジオ体操会です。

参加者が集まる時間は、NHKラジオ第1放送で体操が流れる午前6時30分ではなく、8時15分。もともと、地元の主婦たちが子

もや夫を送り出したあとに健康づくりをしようと、この時間にしたそうです。

当初集まったのは3人。そのあと徐々に参加者が増え、最近では10人前後に。2021年10月時点では、常連は70〜80歳代の8人。1人を除いて全員女性です。



いいとこ西矢島体操クラブ(ラジオ体操会)の参加者

活動は平日のみ。雨天は境内にある集会所で体操していましたが、コロナ禍では「7時30分の時点で雨なら中止」というルールを設け、屋内での活動は控えています。また、参加者は体操前に検温し、名簿に名前と体温を記入するようになりました。

クラブ発足当時は、体操が終わるとすぐに解散していました。「いまはおしゃべりタイム」と常連の一人、



神社境内での体操の様子

関塚玉枝さん(83歳)。「おしゃべりも健康にいいからね」と言って笑います。社殿の縁に腰かけて30分から1時間ほど、お互いの生活状況や暮らしに役立つ情報を交換したり、たわいなしな話や冗談を言い合って楽しく過ごします。畑仕事をしている人が季節の野菜などを持ってきて、仲間たちにおすそ分けすることもあれば。

5年前に転居してきた女性は、「高齢になってなじみのないまちで友だちをつくるのは難しい。でも、ここで友だちができた」と喜びます。

知人に誘われて1年前から参加する別の女性は、「最近次々に親しい人



体操後のおしゃべりタイム

と死別して落ち込んでいたけれど、ここで体操してみんなとおしゃべりすると、心も体も元気になる」と語ってくれました。

唯一の男性参加者で、前頁で紹介した神社修繕チームの一員でもある森雄司さん(75歳)は、「4年くらい前から参加している。腰痛がよくなつたし、ここに通うことで生活のリズムが整うんだよ」とその効能を説きます。

事前に何の連絡もなく姿を見せない仲間がいれば、誰かが電話をするか、家に寄って声をかけるなどしています。健康づくりとつながりづくり、そして見守りのラジオ体操会です。

多世代交流の仮装行列 〈コロナ禍でも集いの場を継続する組織・団体の工夫〉

石原町(葦川地区)

2021年の9月から10月にかけて、石原町一区(葦川地区)の区民会館(集会所)に70〜80歳の男性十数人が定期的に集まり、毎年3月12日の恒例行事「例幣使仮装行列」で使う小道具の一つ「陣笠」の制作に励んでいました。

例幣使とは、日光東照宮に幣帛(二

へいはく、神への捧げもの)を納める朝廷からの使者のこと。その使者が歩いた群馬県内、栃木県内の道すじは「例幣使道」と呼ばれました。石原町には旧道筋と、例幣使にまつわる伝説が残っています。

そんな郷土史を生かし、多くの住民が参加できる交流イベントとして



仮装行列の様子。子どもから高齢者まで約150人が練り歩く(2021年3月12日、写真提供：太田市社会福祉協議会)

2016年に始まったのが、同町一区・二区共催の例幣使仮装行列です。毎年、地元の葦川小学校の5年生90人あまりと両区住民約50人の計140人以上が往時をしのばせる装束に身を包み、約2キロの道のりを練り歩きます。

衣装や道具類はすべて手づくり。子どもたちも自分たちが使う衣装の一



仮装行列を発案した小澤登志夫さん

部をつくるほか、例幣使を救った「救命犬」の伝説を、住民が制作した紙芝居で学びます。準備から実行、片付け、そして衣装や大道具・小道具の保管には小学校が全面協力。子どもが騎乗する馬は、地元の飼い主が快く貸してくれます。コロナの第一波が来ていた2020年3月は、仮装行列は中止。翌21年はマスク着用や消毒徹底などの感染予防策を取って実施にこぎ着けました。

仮装行列を発案した一区の元区長で、現在は同区老人クラブ「遊友会」の会長を務める小澤登志夫さん(73歳)は、その狙いを次のように



小道具の一つ「陣笠」制作に励む男性たち

説明します。

「石原町は宅地開発に伴って新たに移り住む人たちが多くなっている。新旧の住民が世代を超えて、郷土史に親しみながら一緒に取り組む行事があれば、顔の見える関係を築いていける」

従来、同規模の交流イベントは毎年8月の夏祭りのみ。こちらは密集・密接を避けるのが難しい場面もあって2年連続中止となり、仮装行列の意義と重要性が一層増しています。

小学生から高齢者までが一行に連なつて歩く様子はそれ自体、地域のつながりを象徴するかのようです。

ビデオ通話アプリを活用 へコロナ禍で生まれた活動へ

遊友会(葦川地区)

遊友会は、石原町一区(葦川地区)に暮らす60歳以上の約80人が加入する老人クラブです。親睦や交流、健康づくりのサロンやサークルを運営するほか、県・市のイベントや自治会の行事では、会員がスタッフと

して活躍。会が主催または協力する活動は、年間約60件にもなります。会員のなかには「結束バンド」というバンド名でライブ演奏を披露する人たちや、「寿会」と称する男性だけの飲食の会で独自に親交を深める



区民会館で開かれたビデオ通話講習会

人たちもいます。小学生の下校時間に合わせて防犯・交通安全を図る地区の「安全見守りたい」活動でも、主要な担い手は会員たち。多彩な活動を繰り広げる遊友会とその会員ですが、コロナ禍の第一波が押し寄せる2020年3月ごろから、感染予防のために大幅な「自粛」を余儀なくされます。



生活支援コーディネーター(写真左奥の男性)が講師に

最初の緊急事態宣言が解除されてまもない同年6月9日、会は区民会館(集会所)で無料通話アプリLINE(ライン)によるスマートフォンのビデオ通話講習会を役員会に併せて開きました。まずは役員がビデオ通話を試し、会員同士のコミュニケーション維持に有効とわかれば、一般会員にも広めていくねらいです。「実はコロナ以前からスマホを持つ会員が増え、会の活動連絡などにアプリを使うと便利ではないかといった声が上がっていた」と説明するのは、会長の小澤登志夫さん(73歳、前頁に関連記事)。



ビデオ通話を試す参加者

連絡や告知だけではなく、「一人暮らしの会員の見守りにもつながるのではないか」との期待もありました。そうした声を把握していた生活支援コーディネーターが、コロナ禍を機に小澤さんに講習会を提案、実現したのです。コーディネーター4人が講師役も務めました。講習会のあと役員らは、LINEのグループ機能を使って連絡を取り合っています。2021年10月時点では、「通話機能だけで十分という会員が少なくない」(小澤さん)ため、広く活用されるには至っていません。それでも、会の前向きな姿勢とチャレンジ精神は、コロナ禍でもいかなく発揮されています。

「つながりづくりの先生」 へつながりを切らない個人の工夫

村山誠子さん（やぶづか 薮塚地区）



ビデオ通話を披露する村山誠子さん（写真提供：太田市社会福祉協議会）

「コロナで逆に人の心の温かさを

感じるが増えたように思います。

つながりのたいせつさも実感します」

こう話すのは大原五区（薮塚地区）

に暮らす村山誠子さん（85歳）。

仏画と俳画の指導者で、外国人向

けの日本語教師も務めています。視

覚障害者のための朗読や、高齢者介

護施設での傾聴のボランティアも。

「歌が趣味」で以前はコーラスサ

ークルや合唱団に所属。現在はシャ

ンソン教室に通っています。

コロナ禍でいずれの活動も大きく

制限されました。絵のお弟子さんや

日本語の生徒、ボランティアや趣味

の仲間、市内外の友人たちに会えな

い日が続きます。

「でも、私は憂うつ

になつたりしないん

です」

絵手紙を書いて送

ったり、コロナ前は滅

多に連絡を取らなか

った友人にも電話を

かけてみたり。

「久しぶりーって話

が盛り上がるんです。

コロナでたいへんね、

会いたいわねって…」

南米や東南アジア

など世界に散らばる

かつての日本語の教

え子たちとも、電話で

近況を語り合います。

「とにかく人と話をしないとダメ。

声も元気も出なくなってしまうす

から」

夕飯を家で一人で取るときは、無

料通話アプリLINE（ライン）の

ビデオ通話を活用。名古屋に住む娘

とつないで、お互いの顔を見ながら

食事と会話を楽しみます。

「距離は遠くても、心は密なんで

すよ」

インスタグラムやフェイスブック

などのSNS（会員制交流サイト）

にも日々の印象的な出来事や風景を

投稿、さかんに情報発信します。

マスクが品薄になったときは、お



描きためた絵手紙作品（写真提供：太田市社会福祉協議会）

手製の布マスクを仲間や友人、離れ

て暮らす家族に送りました。

絵手紙、電話、手づくりマスク、

そして最新のIT技術で温かな気持

ちを伝え、心のふれあいを保ちます。

LINE友だちの一人で、市社会

福祉協議会の生活支援コーディネー

ター、鈴木彩乃さんは次のように話

します。

「村山さんはよく、時候のあいさ

つに季節感のある写真や動画を添え

て、LINEで送ってくれるんです。

私も見習いたいと思います」

絵や日本語だけでなく、つながり

を切らない暮らしかたの先生、それ

が村山さんです。



LINE友だちの1人、生活支援コーディネーターの鈴木彩乃さん（右）と

農地を守って地域も元氣 へコロナ前と変わらない活動へ

台水土里推進協議会(藪塚地区)



ソバの種まきと草刈り作業に集まった協議会の会員
(2021年8月28日、写真提供：太田市社会福祉協議会)

そのうちの1か所、台地区公民館から東へ200メートルほどの道路沿いにあるソバ畑を10月初旬に訪れると、花が見ごろで通りかかる人の目を楽しませていました。毎年11月下旬、収穫した実で会員がそばを打ち、住民に振る舞います。

このほか、藪塚の秋の恒例イベント「かかし祭り」への

台水土里推進協議会は、台地区(藪塚地区)の農地や水路・ため池・農道といった農業施設の維持管理をはじめ、自然環境と田園景観の保全、住民交流などを目的に2007年に結成されました。

会員は農家を中心に、自治会、老人会、育成会などのほか、「ひまわり

会」「台花クラブ」「台ボランティアグループ」といった親睦・交流・地域づくりを目的とする各種団体に所属する計約130人。

現在、地区に5か所ある遊休農地約1・5ヘクタールを活用し、ソバやドーム菊、ヒガンバナ、ツツジ、ウメ、ロウバイなどを栽培しています。



ソバの種まきの様子(写真提供：太田市社会福祉協議会)

創作かかしの出品も行います。活動はほぼ毎月2〜3回あり、少ないときで10人前後、多いと30人以上が参加。春と秋の道路クリーン作戦では地区の全戸(122世帯)に参加を呼びかけ、子どもから高齢者まで多くの住民がともに沿道で草刈りやゴミ拾いに汗を流します。

また、協議会が地区公民館隣接の遊休農地に整備した緑地広場では、住民が毎朝ラジオ体操をしています。総会や打ち合わせを除き、主な活動場所は屋外で「三密」回避は容易。基本的な感染予防でほとんどの活動を継続できます。

会長の小林邦男さん(82歳)は、



10月初旬、開花時期を迎えたソバ畑と協議会役員ら(2021年10月2日)

「協議会に参加してもらおうことで地域の結束が保たれる。クリーン作戦は新旧住民の交流の場になる」と説明。

副会長で台地区の区長、平石正行さん(69歳)は、「作業は大変だが、やりがいがあり楽しい。コロナで集会やイベントの多くが制限されるなか、協議会の活動は貴重」と述べています。

農地と景観を守り、住民同士つながりづくりや健康づくりに役立ち、コロナ禍でも持続可能——一石二鳥どころか四鳥、五鳥にもなる活動です。

つながり切らないグラウンド・ゴルフ
 〈へコロナ禍で生まれた活動〉
 村田寿会生品地区



村田寿会グラウンド・ゴルフ部の皆さん

グラウンド・ゴルフは体育館など屋内でプレーする場合がありますが、愛好者団体のほとんどは公園や広場など、屋外にコースを確保しています。そのためコロナ下では、大きな競技会は中止でも、比較的少人数のクラブ・サークル単位なら、マスク、消毒、検温といった基本的対策で活

動を継続できることが多いようです。新田村田町（生品地区）の老人クラブ、村田寿会のグラウンド・ゴルフ活動もその一つ。原則として県内の感染状況が緊急事態相当にならない限り、休止しません。常連参加者は、寿会の会員59人のうち15人前後（2021年10月時

合って、徒歩圏内にある区民会館前の広場へのコース設置の了承を取り付けます。

2020年11月、必要な備品もそろえ、会専用コースを開設。敷地の制約で4ホール（標準コースは8ホール）ですが、ラウンド数を4回に増やし、プレーの量を保ちます。

会館玄関の軒下は、イスを並べて休憩スペースに。ラウンドごとに水分補給とおしゃべりタイム。まるで「軒下サロン」です。雨の日はお休みですが、おしゃべりしたい人が玄関に集まることも。

「仲間と会って話ができるのが何よりうれしい。それが私の元気の秘



区民会館（集会所）玄関の軒下でおしゃべり

けつ」と話すのは、20年以上一人暮らしの83歳女性。

別の81歳女性はガンを患いプレーを控えています。「家にこもっていると、ますます具合が悪くなっちゃう」と活動日は会館に来て仲間とおしゃべり。ときにはビデオカメラでプレーの様子を撮影し、鑑賞会を開いて喜ばれています。

「仲間のつながりを切らない。それが会のいいところ」と寿会婦人部長の津久井敏江さん（77歳）。

つながりを楽しく育み、守る。グラウンド・ゴルフには、そんな効果もあります。



2020年11月に開設した会専用コースでプレー

かつて活動場所は、専用コースのある市の運動公園でした。プレー環境は申し分なくとも、同町からは少々遠く、車がないと参加しにくい難点がありました。車を持たない人、運転をやめた人も一緒にプレーできるようにしたい——常連たちが区の役員にかけ

お茶飲み、お散歩、お買い物
 吉沢町二区お散歩会(毛里田地区)
 へコロナ前と変わらない＆コロナ禍で生まれた活動

市社会福祉協議会が主催し、住民
 ボランティアが運営にあたる週2回
 の地域交流サロン「お茶の間カフェ」
 が毛里田地区にオープンしたのは2
 020年2月。会場の吉沢町二区集
 会所には、毎回60〜80歳代の利用
 者とボランティア計20人前後が詰
 めかけました。ところが、翌月から



お散歩会のウォーキング (2020年10月28日、写真提供：太田市社会福祉協議会)

コロナ禍で休止。
 「ひきこもりがちだった高齢者も
 来てくれていたのに」と残念がるの
 は吉沢町二区の区長、木村能治さん
 (65歳)。その後も県内のコロナ感
 染は増減を繰り返し、再開は見通せ
 ない状況が続きます。
 「家にこもりっぱなしでは心身の
 不調を招きかねない。外に出てみんな
 で会話できるよう
 にしなくては」
 カフェ休止から
 半年あまりたった
 ころ、木村さんは
 「集会所がダメで
 も公園ならいいだ
 ろう」と新たなつど
 いと交流の場「お散
 歩会」を企画。1キ
 ロほどのウォーキ
 ングに公園でのラ
 ジオ体操と休憩・お
 しゃべりを組み合
 わせた、屋外の「歩

くサロン活動」です。
 カフェ利用者を中心に参加を呼び
 かけると「ぜひやろう」となって2
 020年10月に始まりました。雨天
 を除いて平日は毎日活動(暑さが厳
 しい7、8月はお休み)。50〜80歳
 代の男女が少なくときで6、7人、
 多いと15人ほど参加します。
 常連の一人、川井初枝さん(71歳)
 は、リウマチで歩行がやや不自由と
 なり、リハビリにウォーキングを開
 始。「でも一人では転倒が怖くて、な
 かなか歩けなかった。お散歩会のお
 かげで、仲間と安心して歩ける。い
 までは杖なしで歩ける」と喜びます。
 集合・解散場所は、同じく常連で



岡崎ユキ子さん宅の庭の駐車スペース。近隣住民の憩いの場だ



週3回は移動販売車が来て買い物もできる

一人暮らしの岡崎ユキ子さん(84歳)
 宅。庭の屋根つき駐車スペースは10
 年以上前から近隣住民のお茶飲み場
 です。移動販売車が週3回庭に来て、
 お茶飲みついでに買い物も。お散
 歩会が始まると、自然に集合・解散
 場所になりました。
 「岡崎さん宅のお茶飲みもお散歩
 会も、地区の大事な健康づくりとつ
 ながりづくり。コロナ収束後もずつ
 と続くだろう」と木村さん。
 コロナ前からのつながりと、コロ
 ナ下の知恵と工夫が組み合わせられ、
 長く受け継がれるべき貴重な活動が
 生まれました。

「お宝」生かす地域支援とは 太田市の生活支援体制整備

「課題解決」に住民困惑

「当初は地域の生活課題を洗い出し、住民が課題解決に取り組む方向性で生活支援体制整備事業（以下、体制整備）を進めました」

こう話すのは太田市社会福祉協議

会の第1層生活支援コーディネーター、小林正和さん。

おもな生活課題は、高齢者の移動や買い物、見守りなど。小林さんと第2層コーディネーター7人は、まずは第2層協議体を通じて、住民が主体的に課題解決を図るよう促そ

うとします。ところが一

「話題が課題解決の仕組みづくりに入ると、住民から『また私たちに何か（負担を）求めるのか。担い手はどう確保する。必要な費用は担保できるのか』といった発言が多くなり、協議は停滞しがちになりました」

自治会、老人会をはじめ各種の住民団体は、すでにさまざまな交流事業や健康・生きがいづくり、見守り活動などを実践。

一方、担い手や後継者の確保に苦労していました。そうした状況で「新たな仕組みを」と言われれば困惑や反発も無理からぬことでしょう。

市社協が市から体制整備を受託し、生活支援コーディネーターの配置と協議体の設置に着手したのは2016年4月。第1層協議体は同年度中、第2層協議体はその後の2か年ですべての第2層圏域で設置を完了しました。

並行して、従来から市社協が助成する住民主体の「ふれあい・いきいきサロン」（高齢者サロン）とは別に、体制整備の一環として週2回の地域交流サロン「お茶の間カフェ」（市社協が主催、住民ボランティアが運営）の開設を進めます。カフェは2018～19年度にかけて12地区にオープンしました。これだけを見れば順調ですが、第2層協議体の停滞はそうしたなかで生じています。

また、大半のサロンに共通する傾向——男性が少なく、参加者が固定化——も明らかになっていました。コーディネーターたちは打開に向けて動きます。

2019年度の途中から地域支援のあり方を一部見直し、生活課題、すなわち「地域にないもの」を洗い出し、それを補う仕組みをつくって解決を目指す方向性をいったん保留。



500人収容のホールで開かれた「お宝発表会」（市社会教育総合センター 2020年2月21日、写真提供：太田市社会福祉協議会）

逆に「いまあるもの」「できていること」を見つけて生かすアプローチを取ったのです。

具体的には、地域の暮らしのなかで日々営まれる大きささまざまな集いや支え合い、健康・生きがいづくりで役立つ活動——たとえば自宅や商店でのお茶飲みから、公園などでの散歩やラジオ体操、趣味・娯楽・スポーツのサークル、地区のお祭り、草刈りなどの共同作業までを、すべて実質的な「サロン」と評価。さらに、仲間内で車を乗り合わせたり、体調を崩して寝込んでいる友人に料理を差し入れたり、サークルなどに姿を見せない人がいれば電話したり家を訪ねたりといった気遣いは、事実上の「生活支援」と捉えます。

誰もが「お宝」を持つ

実際にサービスに頼り切らずに一人暮らしや夫婦二人暮らしを送る高齢者の生活ぶりをコーディネートが取材すると、実質的なサロンや事実上の生活支援が豊富に見つかりました。

これらを地域福祉の資源と位置づけ、「太田市の地域のお宝」と呼び、

住民にアピールすることになりました。

コーディネーターたちは高齢者の暮らしの場に入り、お宝を掘り起こし、その意義と価値を広く周知する取り組みを開始。情報誌の発行に加え、お宝当事者の姿に触れる発表会を開きました。映像資料も制作、DVDで自治会などに配布しています。



市と市社協が共同発行した情報誌「太田市の地域のお宝」

第2層協議体では、お宝について説明すると同時に、構成員に地元のお宝情報の提供を求めました。

「すると『私の地区にもお宝がある』『取材してほしい』といった反響

があり、前向きな話し合いができるようになりました」（小林さん）

お宝を生かす地域支援とは、住民一人ひとりが自分らしいお宝を持つようあと押しすること。具体策はお宝の掘り起こしと、情報媒体や発表会などによる「見える化」が柱となります。自分や家族が持つお宝に気づく、持っているだけではどうすれば持てるかを考えてもらう、そのきっかけを提供することがお宝を守り、増やす鍵です。

コロナ禍でもこうしたアプローチ



コロナ禍では商業施設などで「つながる通信」パネル展開催（3頁参照、写真提供：太田市社会福祉協議会）

は有効でした（3頁参照）。コーディネーターたちは孤立防止や見守り、健康づくり、支え合いに資する住民の営みを次々に見つけ、発信し続けています。

個人、家族、友人、自主グループ、自治会・老人会組織などさまざまな活動の場でのつながりを育む。1人がほんの2、3人でもいい、気にかけて合える仲間を得る。仲間内でお互いの困りごとを察知し、できる範囲で手を差し伸べる——そんな関係性を地域に広げることが目標です。介護予防サロンや生活支援サービスの新規立ち上げは、その必要性も含め、こうした関係性がすでに地域に存在することを踏まえて検討すれば、より効果的な開設・運営に結びつくでしょう。

そして、介護・福祉のサービスを利用しても地域のつながりを損なわない配慮が、すべての専門職の共通認識となれば、お宝とサービスの調和を図ることも可能となります。本来の意味で「高齢でも誰もが自分らしく」暮らせる地域社会へ、着実に前進が期待できるのです。

聞こう！生活支援コーディネーターの声



太田市社会福祉協議会の生活支援コーディネーターたち（左から川田敬一さん、町田充隆さん、鈴木彩乃さん、小林正和さん、関口桂子さん、秋谷蓉子さん、須藤美樹さん、廣瀬将貴さん）

太田市社会福祉協議会の生活支援コーディネーター8人に2020年10月6日、インタビューを行い、これまでの取り組み、その背景にある考えかた、コロナ対応やコロナ後の展望などを語ってもらいました。第1層担当の小林正和さんをはじめ、第2層7人のコメント（要約）を紹介します。

お宝を探して「見える化」

小林正和さん



「太田市のお宝とは、端的には人のつながりと、つながることが高齢になっても自宅や地域で元気に過ごせるその暮らしがこと。これを見える化し、広めていくのがお宝を生かす地域支援」コロナ前に500人収容のホールでお宝発表会を開き、たいへん好評でした「コロナ禍では公民館や集会所などのサロン、会合、イベントが休止。でも、お宝的つながりを持つ人たちは感染防止に配慮して小さな交流を続け、孤立やひきこもり、虚弱を上手に防いでいます。私たちはそれを見つけて取材し、広く知ってもらえるようにしています」住民活動の取材件数はコロ

ナ前とほぼ変わりません。情報紙に加え、商業施設などでのパネル展も行っています「コロナ禍でどう知恵や工夫は、コロナ後の地域づくりにも役立つでしょう」

コロナで集いの場が「二極化」

川田敬一さん



「公民館や集会所の、ある程度公的な位置づけのサロンなどはコロナで休止。一方、小規模で私的な集まりは工夫して続けているところがたくさんある。その二極化が印象的です」私たちは、実際につどいや交流を続ける人たちが取材し、どんな活動で、どんな配慮があればリスクを抑えられるか、具体事例を情報紙の記事として示し、お知らせしています。こうすればコロナ禍でも日々の

生活を豊かにできますよと提案したい。集まる方法を模索する人たちに、工夫してつどい姿が共感を持って受け止められるといいですね」

家族のお宝に気づく

須藤美樹さん



「生活支援コーディネーターになるまで地域のつながりというのをあまり意識していませんでしたが、お宝取材をして、皆さん楽しそうだな、こんな年の取り方ができたらいいなと私自身そんなふう思うようになりました」私の母は一人暮らしですが、いつ訪ねても留守。以前は『家を空けてばかりで困る』と思っていましたが、実はお宝をたくさん持っていたからなんです。そんな母の暮らしを応援してあげられるようになりました」

つながりある人は元気

秋谷蓉子さん



「お宝取材を通して感じたのは、つながりを持つ人は皆元気で、心がいきいきしているということ。つながりをつくり、守っていくことが健康寿命を延ばすことになるのではと思います」先日パークゴルフ場で取材したんですが、そこに集まる一人ひとりがまた別のお宝的なつながりや場を持っているようでした「一人でも多くの住民とお話をして、つながりの輪への入り方を教わり、多くの人に伝えられればと思います」

毎朝のラジオ体操に注目

町田充隆さん



「コロナでサロン活動が休止するなかで、住民はそれぞれ工夫して集いと交流を続けています。取材させてもらうことは私自身にとっても勉強になります。コロナ収束後の地域づくりを考えるうえでも参考になると思います」毎朝公園でラジオ体操をするグループを取材したのですが、誰でも気軽に参加でき、サロンと違って男性が多い特徴があります。体操前後に会話も弾み、健康増進だけでなくつながりづくりにもなっています」

お宝情報で地域に活気

廣瀬将貴さん

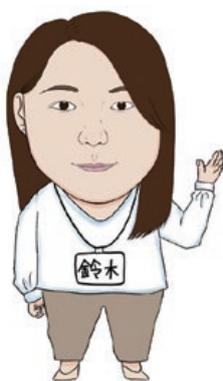


「生活支援体制整備の開始当初、住民への説明に苦慮しました。サロンや生活支援サービスの立ち上げは、暮らしやすい地域づくりの一つの手段ですが、それ自体が目的や成果のように扱われがちで、住民も私もどこか釈然としないものがあつたと思

います」お宝を見る化し広めていくことは、手段と目的がわかりやすい「お宝を情報紙で取り上げると、当事者や周囲の人たちがとても喜びます。地域が活気づくききっかけにもなるのでは」

つながりの実相と価値

鈴木彩乃さん



「お宝に触れ、ようやく本当の人のつながりを知ったと思います。仲のいい人たち同士ができること・できないことを交換して支え合う。運転できない人を車に乗せてあげたり、具合の悪い仲間の手料理をおすそ分けしたり、一人暮らしの人をさりげなく見守っていたり」当事者や家族は案外その意義や価値に気づいていません。あらゆる機会をとらえてそれを伝え、理解や共感を促したい」

「今後は高齢者だけでなく、子どもや若者、障害を持つ人のお宝にも目

を向けていきたいですね」

現場に何度も足運ぶ

関口桂子さん



「お宝取材のときは、できるだけ住民の自然な姿と笑顔を撮影しようと心がけています。だから何度も足を運び、その場になじんでからが取材の本番。最初のうちは皆さん身構えてしまつて、いつもの様子と違っていることが多いですよ。何度も通つて、私が『また来たよ』と言つて、『待つてたよ』なんて笑顔を見せてくれると私もうれしくて、自然体で接することが出来ます。高齢になつてもみんなが笑顔でいられるといいですね」

各コメントに添えた似顔絵はすべて、生活支援コーディネーター鈴木彩乃さんの作品です。太田市社協の「つながる通信」でも解説欄などで使われています。

コロナ下の住民活動と地域の拠点
 ～集う・つながる・支え合う 実践の現場～
 高知県佐川町



佐川町地域福祉計画マップ(町・町社会福祉協議会制作のパンフレットより[許諾を得て内容を一部変更])

まちの概要と
 「地域の拠点」

高知県中西部に位置し、山間の盆地に市街地を形成。町域は小学校区相当の5地区(佐川・斗賀野・尾川・黒岩・加茂)で構成。各地区に集落活動センター、あったかふれあいセンターなどの住民活動の拠点と運営組織がある。人口1万2455人、6049世帯、高齢化率39.9%(2021年10月1日時点)

地域の拠点

町内5地区すべてに住民活動組織があり、それぞれ集落活動センター(集活C)などの拠点を整備、あったかふれあいセンター(あったかC)事業などを展開する。

両センターとも高知県独自の補助事業を活用して実施するもの。あったかCは市町村が共生型の地域福祉拠点として整備し、サロンや見守り、各種生活支援を行う。スタッフ



の人員費や運営費などの経費を県が補助。集活Cは地域おこしや生活環境の維持・向上を図る各種事業展開の拠点。施設整備などハード面や人材導入経費などを県が補助。

佐川地区を除く4地区では、町が集活C施設を整備、住民活動組織が指定管理者に。佐川地区は、町社会福祉協議会が所有する建物の管理運営を住民活動組織に委託する形で拠点施設を確保した。同町の場合、各地区の拠点施設が、あったかC事業の運営場所としても利用されている。

2021年末時点の県内の集活Cは63か所。あったかCは拠点施設55か所、サテライト施設283か所。

〈解説〉住民活動組織と拠点の立ち上げ

はじめに

本冊子では、高知県佐川町の各地区で主に「集落活動センター」や「あつたかふれあいセンター」などを運営・利用する住民が、コロナ下で創意工夫をこらして地域のつながりを守ろうとする様子を紹介します。

記事に触れる前に読者の皆さんに知っておいてほしいのは、各地区で住民活動組織が結成され、拠点運営を担うようになるまで長期にわたって話し合いが重ねられたこと。それを町や町社会福祉協議会の職員らが陰に日向にサポートしてきたことです。組織づくりや拠点確保のプロセスそのものが住民同士や、地域と社協・行政のつながりを強めました。行政や社協の職員は支援者として関わるだけでなく、住民と同じ立場で行事に参加し、ときに酌み交わし、苦楽をともにして確固たる信頼を築

きました。

そうしたことが、コロナ下で住民自ら考え、必要に応じて行政・社協と連携し、行動する基盤になっています。

「絵に描いた餅」にせず

住民活動組織の結成や拠点の確保に向け、町と町社協が地域支援に乗り出したのは2005年度。第1次地域福祉アクションプラン（地域福祉計画および地域福祉活動計画）策定の準備作業がこの年に始まっています。

町と町社協は、プランをてこに住民活動組織や拠点の立ち上げを中長期で支援する構想を持っていました。第1次プラン（計画期間08～12年度）で組織づくり、第2次（同13～17年度）で拠点確保、第3次（同18～23年度）で拠点を核とした支え合いの仕組みづくり、という流れで

す。

プランが「絵に描いた餅」にならないよう、策定では各地区住民の希望や意見がきちんと反映される話し合いの枠組みが整えられました。また、各地区目標には自主防災、伝統文化の継承、観光振興、環境保全、地場産品の商品開発など、住民がしたいと思うことは福祉分野に限らず採用されました。

プラン策定に際し、住民代表からなる策定委員会を設立し、プラン完成後はこれを母体に「みんなで福祉のまちづくり委員会」を立ち上げます。同委員会は、プランの進捗よく確認や達成度評価を行うとともに、各地区の目標実現に向けた活動の推進役となります。全体会と5つの地区部会で構成され、会合は毎年度開いて各地区の活動状況の報告や情報交換を行います。2018年度以降は、全体会が生活支援体制整備事業の第1層協議体になっています。

第1次プラン策定後、目標実現へと踏み出せるよう、全体会や地区部会に参加する住民には、町社協の職員が折を見て「目標の実現に向けて何かやりませんか」などと働きかけます。これを受け、ある地区はまず名所・旧跡を巡るマップづくりに挑戦。続いてマップを使ったウォーキングイベントを開催し大好評を博します。実践が自信となり次のステップへ進む好循環が生まれます。委員会での情報共有などで、他地区へも同様の動きが波及していきました。2016年12月までに、5地区すべてで住民活動組織が結成され、それぞれが拠点施設を確保するに至りました。あつたかふれあいセンターの運営は、早い地区で2009年、遅いところでも2020年までに各拠点施設内で始まっています。

【注記】次ページ以降の記事に登場する人物の年齢・役職などは取材を行った2021年10月15日～22日時点です。写真撮影の際、ごく短時間マスクを外してもらった場合があります。記事の掲載順は、原則として地区名の五十音順としました。



おいぼ連隊の隊員たち
(2021年10月21日の活動。
隊員14人のうち11人が参加した)



おいぼ連隊の隊長、岡村建介さん



尾川地区活性化協議会の澤村重隆会長

「おいぼ連隊」

人口706人、385世帯、高齢化率54・0% (2021年10月1日)

尾川地区活性化協議会 (尾川地区)

尾川地区活性化協議会は、集落活動センターたいこ岩を管理運営する住民活動組織。前身となった組織を含め30年近い地域づくりの実績があります。活動の三本柱は、手づくり惣菜の配食・移動販売、本格ピザ釜のピザ焼き体験会、子どもから高齢者まで地区を挙げて盛り上げる「おがわ秋祭り」。コロナ禍で祭りなどが休止するなか、男性有志が「おいぼ連隊」を結成、センター周辺の美化に取り組み始めました。

毎週木曜の午後3時、集落活動センターたいこ岩に隣接する約1ヘクタールの緑地公園「ふれあいの里尾川」に、20〜70歳代の男性10人あまりが刈り払い機を持参して集合。おいぼ連隊のメンバーです。

1時間ほど草刈りに汗を流しま

す。

隊結成は2020年4月。コロナの感染拡大で政府が最初の緊急事態宣言を出した頃と重なります。

「毎年春と秋祭りの頃に地区総出で公園の草刈りをするんですが、それ以外の時期は草が伸び放題でしたので、いつもきれいにしておきたいと思ったんです」

こう話すのは隊長の岡村建介さん(65歳)。

建介さんは当初、尾川地区活性化協議会の会長、澤村重隆さん(74歳)に「まず私一人でやろうと思う」と相談。澤村さんは「一人ではやるな」とたしなめ、自身の参加を表明。さらに「ほかの人も誘ってみんなで草刈りをして、たまには飲み会でもしたらいい」と提案。手伝ってくれそうな3、4人に声をかけて活動を開始しました。参加者は徐々に増え、現在は14人。活動も月2回から週1回になっています。屋外での間隔を空けての作業で、コロナの影響はほぼ受けていません。

草刈りのほか、公益社団法人高知県森と緑の会の補助を受け、ハナモモなどの花木50本を植樹。感染が落



「ふれあいの里尾川」での草刈り作業

ち着いている時期にバーベキューパーティーを開くなどして親睦も深めています。

中心となる年齢層は60歳以上。ユニークな名称は「高齢でも老いばれんぞ」の決意表明です。

隊員たちは、公園を散策する人からの「きれいになったね」の一言に胸を熱くしつつ、「コロナがあろうとなかろうと、草がある限り刈り続ける」覚悟で団結。

「以前はあまり親しくなかった人



作業が一段落し、しばし休憩



<https://youtu.be/xIpFv0CLkDQ>

おいば連隊は動画でも見られます。左記URLをインターネットブラウザに入力するか、QRコードを読み込み動画配信ページへ。

とも気軽に言葉を交わせるようになりました」と建介さんは喜びます。

公園は美しく、自分たちは元気に。そして地域のつながりは強く。よいことづくめの草刈りレンジャー活動です。



集落活動センターたいこ岩



群生地の保護活動には毎月主に60～80歳代の男女10人前後が参加(写真提供:加茂の里づくり会)

「コロナ下で継続する活動」

バイカオウレンの花守

加茂の里づくり会(加茂地区)

人口985人、449世帯、高齢化率42・4%(2021年10月1日)

加茂の里づくり会は、集落活動センター加茂の里を拠点とする住民活動組織です。里山環境の保護をはじめ地場産品を生かす商品開発支援、良心市(青果などの無人販売)やあったかふれあいセンターの運営、地区の祭りや世代間交流イベントの開催といった活動を展開。バイカオウレン(梅花黄蓮)の保護も手がけ、開花期には県内外から多くの見物客を受け入れます。

加茂地区の里山にバイカオウレンの群生地があります。毎年2月初旬、葉の間からたくさんの花茎を伸ばし、地面いっぱいには白梅に似た花を咲かせます。加茂の里づくり会は年間を通じてその保護に取り組んでいます。

「弱い植物なので、スギなどの枝葉が落ちると枯れてしまう。定期的

な清掃作業は欠かせない」と説明するのは、同会の自然環境部会で部長を務める大山征彦さん(79歳)。会設立の2015年より10年以上前から、地区の有志らとともにバイカオウレンの花守活動を続けてきました。

現在は毎月1回程度を作業日とし、広く住民に参加を呼びかけて、群生地に落ちた枝葉拾いや散策路の整備を行います。中学生が地域学習の一環で作業に加わるようにもなりました。

会では、開花する1週間ほどの期間中「バイカオウレン花祭り」と銘打ったイベントを開き、花見を兼ねたグループウォーキングなどを行います。あいにく2021年2月はコロナ禍で休止。「花祭りとそのあとの打ち上げが大きな楽しみだったが、仕方ない」と征彦さんは残念がります。それでも、マスク着用や距離の確保を呼びかけて散策路を開放すると、千人以上が訪れ、静かに花を愛でました。

感染拡大の影響は多岐にわたり、会が実施する伝統の火文字祭りをはじめ、運営を支援する子ども食堂や



一斉に開花するバイカオウレン
(写真提供: 加茂の里づくり会)



開花期は2月初旬。里山が冬化粧をすれば花と雪の共演も
(写真提供: 加茂の里づくり会)

地元小学生がツアー客のガイドを務めることも (写真提供: 加茂の里づくり会)



左からバイカオウレン加茂の里づくり会の自然環境部会長・大山征彦さん、同会の会長・大山端さん、集落支援員・藤本雅生さん、北添愛美さん

交流目的の地域居酒屋など主要な行事はすべて休止に。一方で、毎月の花守活動は屋外で三密にならないため、ほぼ通常どおり継続しています。会長の大山端さん(82歳)は「バイカオウレンは地域の宝。貴重な自然を守りつつ交流や観光に結びつけたい」とし、そのうえで「人びとが集い、一緒にわいわいやるのが大事。そこで人がつながり、新しい活動の芽が出る」と期待します。人のつながりと、そこから生まれるもののすばらしさを象徴するかのように、バイカオウレンは美しく群れ咲きます。

花守活動は動画でも見られます。左記URLをインターネットブラウザに入力するか、QRコードを読み込み動画配信ページへ。



<https://youtu.be/j46fkAvmjZo>



集落活動センター加茂の里

コロナ下で生まれた活動

天空の道 「黒岩スカイライン」

黒岩いきいき応援隊（黒岩地区）

人口1009人、501世帯、高齢化率48・4%（2021年10月1日）



眺望の妨げになる雑木の状況を確認するプロジェクトチームのメンバー

集落活動センターくろいわを運営する住民活動組織、黒岩いきいき応援隊。コロナ禍の影響で、子ども食堂やモーニング喫茶、ビアガーデン、敬老会、文化祭など多くの事業が休止に追い込まれました。その一方、センター開設当初からの宿願だった、山々の稜線を走る道路「黒岩スカイライン」（延長約9km）の再生プロジェクトに着手。ウォーキングイベントへの活用も始まっています。

黒岩地区の標高450メートル前後の山々に、一本の道路が通っています。昭和40年代、山仕事の作業道として町の補助を受け住民が整備したもので、路上からまち並みや川の流れを一望できます。まさに天空の道。住民は親しみを込めて「黒岩スカイライン」と呼びました。

道路は次第に使われなくなり、荒れていきます。このまま放っておくのは惜しい——そう考えたのは、現在、黒岩いきいき応援隊の副会長を務める中内雄三さん（79歳）。2016年4月の集落活動センター開設に際し、応援隊の事業計画にスカイライン再生を盛り込みます。しかし、交流や健康づくり、地場産品を生かした商品開発などが優先され、再生には着手できないまま時間だけが過ぎていきました。

そこに転機が訪れます。

「コロナで草刈り以外の活動はほとんど休止。空いた時間を生かして再生への挑戦を提案しました」

2020年10月、応援隊の運営委員ら有志が、スカイラインを視察。翌11月、集落支援員の横畠安彦さん（70歳）を中心にプロジェクトチームを発足させ、再生計画を策定。12月には作業を開始し、通行や眺望の妨げになる雑草や樹木の除去、道路への砂利敷き、勾配が急な場所へのコンクリート舗装などを進めます。チームは58〜82歳の男女15人で、なかには林業や土木のプロも。1年後の2021年10月までに総



「第7回黒岩いきいきウォーキング」(2021年11月23日)で眺望を楽しむ参加者(写真提供:黒岩いきいき応援隊)



スカイライン再生作業の様子



プロジェクトの発案者・中内雄三さん(右)、黒岩いきいき応援隊長・永田滋さん(中央)、プロジェクトリーダー・横島安彦さん(左)



集落活動センターくろいわ

延長の半分まで作業を完了。11月23日開催の「第7回黒岩いきいきウォーキング」では、町内外から集まった小学生から高齢者まで85人がスカイラインを歩き、

昼食の芋煮に舌つづみを打ちました。

応援隊長でチームの一員でもある永田滋さん(75歳)は「コロナでも何でもできず、みんなうずうずしていたからいいタイミングだった。地域の結束、連帯感も強まった」と喜びます。将来はマウンテンバイクやトレイルランの大会なども開き、交流人口の拡大を目指す考えです。



<https://youtu.be/nTtDt2p3K74>

黒岩スカイラインは動画でも見られます。左記URLをインターネットブラウザに入力するか、QRコードを読み込み動画配信ページへ。



農耕部の部員たち (2021年10月21日、夢まち農園で。この日の作業には部員約20人のうち13人が参加)



農耕部リーダーの田村幸生さん



サトイモの収穫作業

「コロナ下で継続する活動」

つながり育む畑仕事

NPO法人さかわ夢まち協議会 (佐川地区)

人口6593人、3267世帯、高齢化率37・4% (2021年10月1日)

佐川地区の住民活動拠点、さかわ夢まちランドを運営するNPO法人さかわ夢まち協議会。5つの事業部門の一つに地域づくり・生きがい事業部があり、そのなかに遊休農地を借りて畑仕事をする「農耕部」があります。

佐川町の中心市街地の一面、家々に囲まれた1反歩(約1千㎡)ほどの畑があります。時折、60〜80歳代の男女十数人が畑仕事に精を出しています。

黒々とした土にサトイモやサツマイモ、ハクサイ、大豆などがよく育ち、葉の緑が目にも鮮やか。NPO法人さかわ夢まち協議会の農耕部が管理する「夢まち農園」です。協議会が任意団体として発足した2016年から、遊休農地を借りて交流や生きがいづくりに活用しています。

「草ぼうぼうだった畑をみんなで復

活させました。耕起、種まきから収穫まで部員が家族のように力を合わせてやっている」と話すのは、農耕部リーダーの田村幸生さん(63歳)。

収穫した野菜は部員に分配するほか、夢まちランドなどで販売。その収益は協議会の運営費に充てます。

大豆は農耕部の有志がつくる味噌の材料になり、サツマイモは地元小学生の栽培・収穫体験で使われています。毎年恒例のイベント「収穫祭」で振る舞う芋煮は、味噌も含めほぼすべての食材が「夢まち農園」産。

コロナ禍の影響で、収穫祭をはじめ多くの行事や集いの場が休止に。それでも農耕部の畑仕事など、主に屋外の活動は、継続または早期の再開が可能でした。

協議会の理事長で農耕部員でもある吉村典宏さん(67歳)は「畑仕事だけでなく、私たちの活動すべてが地域のつながりづくりだ。住民、特に高齢世代が、活動を通じて元気になってきたと感じる。コロナでもできることを続け、もっと多くの人を巻き込んでいきたい」と意気込みます。

畑では野菜が育ち、協議会ではつながりと元気が生み出されています。



花壇部リーダーの
刈谷要介さん

「敷地があまりに殺風景。なんとかしたいと思った」
こう話すのは、さかわ夢まち協議会花壇部リーダーの刈谷要介さん（71歳）。



花壇づくりに活躍する皆さん（2021年10月19日撮影）

NPO法人さかわ夢まち協議会の交流事業部に2018年、新たに「花壇部」が発足。もともと電気工務会社の社屋で簡素な造りだった「さかわ夢まちランド」の外構や敷地は、四季折々の草花で彩られるようになりました。



さかわ夢まちランド

「コロナ下で継続する活動」みんなの花壇に笑顔咲く

NPO法人さかわ夢まち協議会（佐川地区）

要介さんは、協議会の拠点施設「さかわ夢まちランド」の玄関脇の植え込みに花を植えます。さらに敷地をよく観察すれば、花壇をつくれそうなスペースが。

「皆さんにそんな話をする、ぜひやりましょう」と

こうして花壇部が発足。敷地境界の金網フェンスに沿って長さ約20メートル、幅約70センチを植栽スペースとし、ブロックで区切って土を入れます。金網にはプランターを吊り下げました。
土や堆肥、草花の苗などは有志が寄贈。その後の施肥、消毒、給水のための資材や植え替え用の苗なども同様です。

「必要なものを持ち寄りたりして、みんなの力でどうにかやっている」
年間をとおして花を楽しめるよう、多様な品種を組み合わせさせて植えています。

実は、花壇部には部員名簿がありません。

「ここに足を運ぶすべての人が部員。花壇はみんなのもの。だから名簿もつけない」
植え替えなどを行う際は、日時を

掲示板などで告知し参加者を募集。介護予防サロンなどの日に合わせて作業日を設定し、居合わせた人も誘います。日々の水やり当番は主に常連参加者から募り、現在は6〜7人が週替わりで務めます。

咲き誇る花々は通りからよく見え、立ち寄る人が多くなりました。花の前で人は自然に笑顔を浮かべ、会話を弾ませます。

「出会いや交流の機会が増えたと感じる」

コロナ禍にあっても花は咲き、人は笑い、地域のつながりは広がっていきます。

農耕部と花壇部は動画でも見られます。左記URLをインターネットブラウザウザに入力するか、QRコードを読み込み動画配信ページへ。



<https://youtu.be/lh7qC0x-Qhc>

あったかふれあいセンターとかの（NPO法人とかの元気村・斗賀野地区）

＜コロナ下で継続する活動＞

お助け大作戦 2021

人口3162人、1447世帯、高齢化率38・3%（2021年10月1日）



ボランティアによる庭の草刈りを見守る高齢女性（右）。「とてもありがたい」と感謝を語っていた

斗賀野地区のNPO法人とかの元気村が「とかの集落活動センターあおぞら」内で運営する「あったかふれあいセンターとかの」は毎年9月、生活支援ボランティア体験イベント「お助け大作戦」を開催します。2020年は台風で中止でしたが、翌21年は県のコロナ警戒レベル上昇を受け、10月に延期して実施。小学生から高齢者までの男女67人が参加し、ともに草刈りや掃除に汗を流しました。

あったかふれあいセンターとかのは、通常業務の一環で、ホームヘルパーが対応しない高齢者宅の窓拭き、電球交換、エアコンフィルター清掃、草刈りなどを1時間500円で引き受けます。作業は常勤スタッフ4人（全員40歳代女性）で分担しますが、大掃除のような要望には対

応が難しい場合があります。そこでセンターのコーディネーター、森田有紀さん（47歳）は一計を案じます。町社会福祉協議会の災害ボランティアセンター運営訓練をモデルに、多くの住民をまき込んで一気に高齢者宅の清掃や庭仕事を行うボランティアイベントを企画したので。2017年9月3日「夏のお助け大作戦」と銘打って初開催。以来毎年9月の第1日曜に実施し、小学生から80歳代の高齢者まで70人前後、多いときは90人ほどが参加。3～9人で班を組んで掃除や草刈りに励みます。

作業は午前中に終え、料理担当のボランティアがつくる昼食と一緒にいただき、夕方には打ち上げの飲み会も。「住民同士のつながりづくりの効果も大きい」と有紀さん。実際、参加者からは「楽しみながら人助けができる。普段顔を合わさない人とお話ができるのもいい」（49歳男性）といった感想が聞かれます。2020年は台風接近で中止。翌21年9月は県がコロナの非常事態を宣言したため10月17日に延期して開催しました。



あったかふれあいセンターのコーディネート、森田有紀さん



NPO法人とかの元気村の理事長、田鍋勝さん

実は、センターとその運営母体のNPO法人とかの元気村による交流事業やサロン活動は、2020年4月頃から軒並み休止。一方、大作戦は住民から「困っている人がいるなら助けて」との声が多く寄せられ、実施を決定。屋外作業が多く三密を回避しやすいことも、あと押しにな



窓や軒下を掃除。この家に住む女性はヒザを痛め、こうした作業は難しい



作業終了後、参加者におにぎりや汁物をふるまう



NPO法人とかの元気村の活動拠点

りました。
元気村の理事長、田鍋勝さん（59歳）は、「私も含めみんな斗賀野が大好き。その気持ちを具体的な行動で分かち合う機会でもある」と大作戦の意義を語ります。
人と地域の両想いが、支え合いの基盤です。

お助け大作戦は動画でも見られます。左記URLをインターネットブラウザに入力するか、QRコードを読み込み動画配信ページへ。



<https://youtu.be/u7-3U3pzL2U>

河添房さん宅（尾川地区）

〈コロナ下で継続する活動〉

20年以上続くお茶飲み

尾川地区で一人暮らしの河添房さん（92歳）。元気の秘けつは「縫いもの、畑、お料理、お茶飲み」です。お茶飲みは、集落活動センター「いこ岩を会場に開かれる「あつたか

お茶飲みは、集落活動センター「いこ岩を会場に開かれる「あつたか

ふれあいセンター「ひまわり」のサロンで週2〜3回。そして房さん宅でも、週1回はしています。お茶飲み仲間は、同い年の田村美恵子さんと森田栄子さん、それに房さんの姪、山崎美佐子さん（80歳）。

お茶飲み場は、かつて物置だった小屋。テーブルや食器棚を置いて素敵なティールームに改装しました。そこで20年以上、喫茶と交流を楽しんでいます。お茶請けは持ち寄り。野菜や手料理のおすそ分けもしょっちゅう。一緒にお昼をいただくことも。

コロナ禍でサロンが休止でも、自宅のお茶飲みは感染予防に配慮しつつ、長年の信頼に基づいて継続。つながりの輪のなかで孤立とは無縁の暮らしです。



河添房さん（左から2人目）宅のティールームとお茶飲み仲間たち

青去のお食事会（佐川地区）

〈コロナ下で生まれた活動〉

つながり保つ地域食堂

20年以上続く自治会の夏祭りがコロナで中止——そのとき「なんとかなして住民の、特に高齢者のつながりを守ろう」と地域食堂を立ち上げた人たちがいます。佐川地区の青去自治会（78歳）と、民生・児童委員の刈谷要介さん（71歳、11ページの記事にも登場）です。2人はボランティア仲間とともに



2021年10月19日の食事会の様子

地区集会所で「青去のお食事会」を開始。毎月第三火曜のお昼、おかず4品にご飯と味噌汁、お茶と食後のコーヒーも付けて500円で提供します。米や青果類は農家の仲間からの差し入れでまかない、費用を抑えます。参加は20人に限定し、県のコロナ警戒レベルによつては休止する場合があります。

参加者は主に60〜80歳代の高齢者。町社会福祉協議会の職員も加わり、地域と社協のつながりづくりの場としても活用されています。

「コロナ下で継続する活動」

仲間づくりのラジオ体操

牧野公園（佐川地区）



ラジオ体操の参加者（2021年10月21日撮影）



グループウォークはおしゃべりも楽しみの一つ



見晴らしのいい公園の中腹で体操

早朝ウォーキングをする人たちが、道すがらあいさつを交わすうち、いつしか歩みをともし、一緒にラジオ体操もするようになりまし。佐川町中心部の牧野公園での、名もないウォーキング&ラジオ体操会です。

佐川町出身の著名な植物学者、牧野富太郎博士にゆかりの牧野公園。町中心部の小高い丘にあつて、園路を登ると市街地を一望できます。その公園の中腹で、毎朝6時半頃ラジオ体操をする人たちがいます。

主に同公園の周辺に暮らす60〜80歳の男女15人前後、多いときで約20人が集まります。それぞれの自宅から公園を目指して歩き出し、途中で仲間と合流。おしゃべりを楽しみつつグループウォーク、公園の見晴らしのいい場所で体操。

「以前はみんなバラバラに歩いていた。行き会って『公園に行きませ

んか』とか、声をかけ合つてだんだんグループで歩くようになり、ラジオ体操もするようになった」
そう説明するのは堀見昇出さん（72歳）。10年以上前に夫婦でウォーキングを始めました。グループウォークとラジオ体操は、2016年頃に始まったそうです。

「みんなで歩いていると『今日も行かなきゃ』と思うから、長く続く。仲間とおしゃべりできるのが魅力。それが楽しみで続けているようなものだ。朝歩いて体操すると生活リズムも整うよ」

コロナ禍で最初の緊急事態宣言が出た時期は、念のため別々に歩きました。その後はマスクを着用するなどして一緒に歩いています。

歩き始めて3年という女性（73歳）は「転勤族で知り合いが少なく、退職後は特に寂しい思いをした。でも、これで友だちが増えた」と喜びます。何か用事があつて休むときは、「無断欠席はしない」（昇出さん）。事前に仲間に伝えるようにしています。

健康づくりはもちろん、仲間づくりや見守りにも役立つウォーキング&ラジオ体操です。

〈支援者の視点〉 佐川町社会福祉協議会

住民活動組織の結成から拠点の確保、その後の運営まで長期にわたる地域づくりの過程に寄り添い、サポートし続ける佐川町社会福祉協議会。コロナ下の住民活動とその支援について、事務局長をはじめ担当職員に聞きました。



地域福祉推進に携わる佐川町社会福祉協議会の職員（左からコミュニティソーシャルワーカー・田村里桜さん、事務局長・田村佳久さん、生活支援コーディネーター・正岡幹子さん）

地域のつながり絶やさず

事務局長 田村佳久さん

「コロナ前から各地区の住民活動

組織が、地区の特徴を生かした活動を展開してきました。その基盤があるので、コロナ下でもかなり高齢者らの見守りができています。私たち社協は、従来からの支援活動を通じて住民と気軽に話し合える関係性をつくってきました。非常時でも緊密に情報交換を行い、必要に応じて支援する体制ができています」

「住民のコロナの受け止めかたはさまざま。『集まるのは危険』という人もいれば『大丈夫』という人も。それが地域の活動をやりにくくしている要因の一つです。リスクをおそれ過ぎることが、逆に心身の健康や幸せの実感へのリスクになりかねない実情を踏まえ、感染防止の十分な配慮のうえで、地域のつながりを絶やさない活動を支援したいと考えています」

「人と人がつながることで共感や安心感を得、幸せを実感し、心身の健康を保つということをコロナで強く意識させられました。どんな状況でも、つながりを広げて地域全体の

幸せを向上させていくという私たちの思いは一貫しています。平時と非常時の両方を視野に入れ、地域の住民活動支援を続けていきます」

地域と社協の関係づくり

コミュニティソーシャルワーカー

田村里桜さん

「各地区の住民がコロナ下でもできることを考え、実践する、その創意工夫がすごい。住民活動組織を立ち上げる頃から、地域づくりは自分たちでという意識が根づいていると思います」

「住民が必要に応じていつでも私たちが頼れる環境、関係性をつくっておくということが重要です。コロナ下かどうかは、あまり関係ないですね」

『社協です』と地域に入るとき、大抵の住民は身構えず普通に受け入れてくれます。そういう状態を継続させていきたい。そのことは常に心がけています」

つながりが生きる力に

生活支援コーディネーター

正岡幹子さん

「住民やあったかふれあいセンターの職員らが、コロナ下で何ができるかを真剣に考え、実行する姿を目の当たりにし、感動しました」

「やはり人のつながりは大事。生きる力の源だと実感します。逆に言うと、孤立して生きていくのは難しいという現実も見えた感じですよ」

「住民が集い、つながる場、井戸端会議でもウォーキングでも、できるだけ現場にお邪魔して日常の暮らしのなかで住民の本音を聞く、その積み重ねから地域づくりのヒントをつかめるんじゃないかと思っています」

3人のコメントは動画でも見られます。左記URLをインターネットブラウザに入力するか、QRコードを読み込み動画配信ページへ。



<https://youtu.be/q0EUqTsWIHc>

〈支援者の視点〉

佐川町健康福祉課、

チーム佐川推進課、集落支援員

あったかふれあいセンター、集落活動センターをそれぞれ所管する健康福祉課とチーム佐川推進課の職員に、コロナ下の両センターの状況を聞きました。また、集落支援員の一人で今回取材を担当した西森信三さんに感想を語ってもらいました。

困る前からつながりを

佐川町健康福祉課保健師

吉村 真弓 さん



「行政では、住民が深刻な困りごとを抱えてから相談を受け、対応することが多い。一方あったかふれあいセンターは、困る前に住民とつながっています。センターの集い機能が休止しても、スタッフが訪問で高齢者らを見守りました。ちよつとした困りごとでもセンターのスタッフに相談でき、混乱を小さく抑えられた

と思います。たとえば、買い物ものにつなぐ段階で行政に相談する人はあまりいませんが、センターはいち早く察知し買い物もの支援を行いました。このような予防的な対処ができます。気軽に相談に乗れる関係性が大事だと痛感しました」

「誰もが生きがいと楽しみを持って暮らせるよう、地域福祉の輪のなかにあったかふれあいセンターがあり、つながりと支え合いを広げていければいいですね」

住民の工夫と実践、自信に

チーム佐川推進課企画おもてなし係長

安岡 裕美 さん



「集落活動センターのいろいろなイベントが中止になりました。活動再開を模索するなか、住民は屋外にある『地域のお宝』に目を向けています。たとえば黒岩地区ですと、黒

岩スカイラインという山頂付近を通る町道を自分たちで手入れして、町内外の人に来てもらい、にぎわいを取り戻そうとしています」

「コロナ下で何ができるかを自分たちで考え、形にできたことは自信につながるでしょう。住民の課題解決の力はすばらしい」

「住民がやりたいと思うことを、これからもたいせつにしていきます。私たちが地区の活動を引っ張るのではなく、あと押しする形で支援します。特にコロナで中止していた行事の再開では、なるべくスムーズに負担なくできるような支援を心がけたいと思います」

地域づくりのヒント得た

集落支援員 西森 信三 さん



「カメラを持って取材してまわっていると、みんな工夫しているんな

ことをやっていました。屋外作業なら三密にならないわけで、黒岩地区のスカイライン道路整備なんかは、やりたいと思って以前はほかのイベントなどが忙しくてできなかったのを、この機会にやった。なるほどと思いましたね。尾川地区でも、年2回だけの公園の草刈りを毎週やるようにしました。イベントは無理でもこういうことはできる。地域づくりのヒントをたくさんもらいました」

「コロナ下で得た知見や実践は、コロナ後も生かされるでしょう。案外いい機会だったのかもしれない。平時からのつながりがあれば、非常時にも対応できるとわかりました。この経験を共有し、受け継いでいきたいですね」

3人のコメントは動画でも見られます。左記URLをインターネットブラウザウザに入力するか、QRコードを読み込み動画配信ページへ。



<https://youtu.be/m2PnHNTTkuI>

つながりが地域を元気に！ ～気かけ合いが広がる優しいまち～ 竹野南地区（兵庫県豊岡市）

地域の概況

豊岡市は兵庫県北東部に位置し、2005年4月、1市5町（豊岡市、城崎町、竹野町、日高町、出石町、但東町）が合併してできたまちです。

市域の約8割を森林が占め、北は日本海、東は京都府に接し、中央部には円山川が流れています。山陰海岸国立公園、氷ノ山後山那岐山国定公園をはじめとした自然環境にも恵まれ、2005年9月には、国指定の特別天然記念物・コウノトリが自然放鳥され、

人里で野生復帰を目指す取り組みが始まっています。

農林水産業、観光業などが盛んで、城崎温泉、神鍋スキー場、出石城下町などを有しています。地場産業としては、かばんや出石焼などの生産が行われています。

豊岡市西部の旧竹野町のなかでも、竹野南地区は山間部に位置します。JR豊岡駅より車で20分ほど走ると、竹野南地区の中心部に到着します。そこから谷に沿って、逆さYの字のような形で谷があり、それに沿って集落が広がっています。中心部から端の集落までは約8km。地区内には市運営のコミュニティバス「イナカ」が走り、通学や通院の足を支えています。地区には県の天然記念物・郷土記念物に指定されている桑野本の大イチョウなどがあります。

豊岡市(2021年11月9日現在)

人口 79,057人
世帯数 33,563世帯
65歳以上人口 26,874人
高齢化率 34.0%

竹野南地区(2021年11月9日現在)

人口 909人
世帯数 399世帯
65歳以上人口 427人
高齢化率 47.0%

地域をみんなで考える「コミュニティ組織の立ち上げ

自分たちの手で できることを

竹野南地区でボランティア活動をする「よつばの会」代表の富森とも子さんは、少子高齢化、過疎化が進む竹野南地区を『困った』と言いつけるのではなく、何かできることがあるのではないかと。自分たちの手で行うことができることを考えていこうと考え、

20年ほど前から市社会福祉協議会の職員を交えて話し合いを続けてきました。当時、給食や読み聞かせ活動を行っていた富森さんたちボランティア仲間の間では、「道端での立ち話もたいせつだが、いろいろな人が出会え、顔を合わせて楽しく過ごせ

る場がほしい」という目標ができ、2007年からふれあい・いきいきサロンを、2008年からは市社協からの補助金を活用して集落に出張してサロン活動を開始、同時にボランティアグループよつばの会が誕生しました。

当初から、「竹野南地区全体での活動を考えていた」と富森さんは話します。南北に8kmの距離があり、高低差もあることから、しだいにそれぞれの集落で自主的にサロンが開催されるようになっていきましたが、同時に、人口の少ない集落では自分たちで開催することが難しいこともわかってきました。そこで富森さんたちよつばの会のメンバーがその地区に行き、サロンを開催する「出張サロン」も開催するようになりました。

第1回目の出張サロンは、3世帯が暮らす山の上の集落でした。すぐ近くの集落までは山をくだり、20分ほど歩かなければなりません。富森さんたちが出張サロンの提案をする時、何年も使っていなかった集会所



NPO 法人わいわいみ・な・み副会長／よつばの会代表
富森とも子さん

を住民が掃除をしたりして出迎えてくれました。ふもとの集落の人を中心にサロンのお手伝いをしてもらうことで、お互いに気にかけて合うきっかけづくりにもなりました。「出張サロンに行ったらとても喜んでくれてね。『四つん這いになってもこうしたサロンを続けていこうね』と言ってくれる人もいるんですよ」と富森さんは話します。

コミュニティ組織の誕生

よつばの会を中心とした住民による手づくりの活動は、少しずつ地域の気運を高めていきます。そうした基盤があるところに、2014年、豊岡市から地域コミュニティの推進という方針が打ち出されます。当時、竹野南地区の区長会長をしていた岡田隆男さんは、「いままでは区長会長が中心となって地域の活動をしてきましたが、区長は1年の任期制のため、勉強会や視察などで1年が終わってしまいます。これでは地域の課題解決には至らない、という市長からの号令でもありません」と振り返ります。

竹野南地区にはコミュニティ組織がなかったため、2015年からコ

ミュニティをどんな組織にしていこうかという検討会が始まり、竹野南地区は3年間のモデル地区に指定されました。地区の公民館をコミュニティセンターに建て替えることも打ち出されていたため、富森さんをはじめとした竹野南地区の女性を中心に、「どんなコミュニティセンターにしたいか」が話し合われました。岡田さんは、「我々には、ここでどんな活動をしたい、というプランが先にあったのです。そのためにどんな機能がほしいか。それは実際、ここを中心として使う人の意見が反映されることが一番。たとえば、配食をしたい、という思いがあるなかで、雪の日でも荷運びがしやすいように調理室の前に車が止められるようにしたり、高齢者の居場所をつくりたい、という思いを受けて、高齢者が汚してしまつたときにすぐに洗えるようにシャワー室を設置したり。だから、この建物（コミュニティセンター）は、会議室ベースではないんですよ」と話します。

そうして、2017年4月に「竹野南地区コミュニティわいわいみな・み」が誕生しました。「わいわいみ・な・み」には、区長だけでなく、

学校、消防団、商工会、公民館登録グループなどが参加し、「竹野南のありとあらゆるグループと人が『わいわいみ・な・み』の登録メンバー」と岡田さん。「自分たちだけでなく、みんなで活動する、ということが大事。それができるのが竹野南地区の強み」と話します。

コミュニティの活動はプロジェクト方式で

竹野南地区コミュニティの特徴は、縦割り組織ではなく、プロジェクト方式という点にあります。組織ではなく必要な活動に予算を使うために、ワークショップを重ね、地域に必要なことを住民みずからが考え合います。そして、1年ごとの重点項目を決め、「チームみなみ」と呼ばれる5〜10人の実行委員会形式のプロジェクトチームを立ち上げます。このプロジェクトで通所サロンや営農組合なども立ち上がっています。

メンバーは、その事業に必要と思われる人で構成するため、必ずしも「地区の顔役」が入るわけではありません。たとえば、コミュニティセンターのステージに^{どんちやう}緞帳がないこ

とから、「みんなでつくろう！」とプロジェクトチームが立ち上がりました。この中心となったのは、裁縫が得意な地区の女性たちです。古い浴衣をほどこいて緞帳づくりが始まりました。女性たちのなかには、通所サロン（詳細7p）の利用者や、桑野本地区の女性たちもいました。桑野本地区の女性たちは、毎週水曜日に集まり、おにぎりなどお昼ご飯を持ち込み、お漬けもの自慢をしながらおしゃべりを楽しんでいましたが、「若い者ができないことは私らがしたらええんだがな」と自分たちのつどう時間を地域のボランティア活動に充てていたのです。



ほどいた浴衣を並べて緞帳の柄を決める

プロジェクト方式で進める 地域づくり



「コミュニティを彩る」さまざまな活動

出会い、楽しみ、つづきやき拾う喫茶よつば

2018年度からは、竹野南地区を旧4小学校区程度に分け、それぞれの地域で防災リーダーを育成、各地区での防災体制の構築に力を入れています。その背景には、高齢者の増加だけでなく、竹野南地区を走る道路が、土砂崩れなどで分断されてしまうと、中心部にあるコミュニティセンターから支援を届けられない可能性を考えたからです。行政からの支援を待つだけではなく、そして中心部のコミュニティセンターに集まれないまま、各地区で災害に対応ができるように、地区ごとのマニュアルづくりに取り組み、同時にそれに対応できる人材を育てているのです。

竹野南地区は、コミュニティセンターのある森本地区を中心に、「逆さのY字」のような形で谷に沿って道路が走り、そこに集落が点在しています。それぞれの道を「イナカー」と呼ばれる市バスが走り、豊岡市の中心部に行くには、自家用車でなければ、イナカーで森本まで来て、そこからさらに一般路線バス（全但バス）を乗り継ぎます。イナカーは走っているけれど、乗

り換えのために1時間ほどバスを待たなければならぬこともあります。コミュニティセンター近くの診療所に来て、帰りのバスを長時間待たなければならぬこともあります。雨の日、晴天で気温の高い日、重い荷物のある日は、その待ち時間がことのほか長く感じる……。そこで目をつけたのが、診療所やイナカーのバス停からほど近く、旧JAの支店に隣接する空き店舗。ここを改装して喫茶スペースをつくり、バス待ちの間に利用してもらおうと考えたのです。



喫茶よつばの手づくりケーキ

2016年から毎週木曜日、ここで喫茶を運営するのは「よつばの会」のメンバー。手づくりのケーキとお茶を200円でいただくことができます。バス待ちの間だけでなく、高齢になり、移動が難しくなった友人同士がこの喫茶で会い、おしゃべりを楽しんだり、ほかの地域から遊びに来たお友だちを連れて来たり。小さい子どもを連れてお母さんが来ると、場もいつそうにぎわいます。民生委員や駐在所の警察官なども、「ここに来ればいろいろな人に会える、いろいろな情報がわかる」と顔を見せます。毎回40食を用意するケーキは、足りないときもあるというほど

喫茶よつばの日常



の盛況ぶりです。

喫茶よつばは、待ち合わせやおしゃべりの場という以上に重要な役割を持つています。それは、来ている人たちのつづやきを拾うこと。「いつも来る〇〇さんが来ていない」というと、誰かが「最近腰を痛めていて今日は来られないよ」と教えてくれます。そうした情報を聞くと、さりげなくその人の様子を気にかけて、ときには電話や訪問をして状況を聞きます。体調不良が深刻であれば、本人の同意を得て診療所の医師とも情報を共有し、診察の際に気をつけてもらうように伝え、その後の様子を教えるもったりします。

「顔見知りだから、さりげないこ

と、わざわざ話すことでもないよう

なこぼれ話から、生活上の悩みを聞くことがあります。そうしたことが、必要であればよつばの会のスタッフと共有して定期的に様子を見に行くようになったり、通所サロンなどに来ってもらうようになったり。私たちでは解決できないことは、地域包括支援センターなどにも連絡します」と富森さん。

家族介護に悩む住民が来たときは、介護経験のある住民がその人の話を聞くことがあります。愚痴や悩みを話す場があり、それを受け止めてくれる人がいる。それだけでまた「明日も頑張ろう」という気持ちになれる。一見するとおしゃべりの場にす

ぎませんが、思いを吐き出し、受け

止めてくれる人がいるという心の健康を支える場にもなっているのです。竹野南地区コミュニティセンターの地域マネジャー（集落支援員）の鶴原広美さんは、「よつばの会のスタッフの皆さんは、ただ接客しているだけではないんです。カウンターの中心にいる時間はとても短くて、住民が来たらそばに行つて出迎え、同じテーブルに座つておしゃべりをしていきます。それが、喫茶よつばのすばらしいところなんです」と話します。

手押し車を押してくる姿が中から見えたらしつと扉を開け、「会えてうれい」と全身で喜びを表し、立ち話。わずか数メートル先の座席に座



喫茶よつばで情報交換

る間にもおしゃべりがはずみずみ。待ち合わせの人が来るまではそこで一緒におしゃべり。大きく相槌を打つたり、笑ったりしながらも、ちょっとしたこぼれ話から気になることをしっかりと拾っています。

「スタッフはみんな、お節介というか、人のことを気にかけているんですよ。そして住民の皆さんもそれがよくわかっている。気になることも、ここでお茶を飲みながらしゃべること、きちんと受け止めてくれるし、私たちが受け止めきれないことはどこかにちゃんとなんでくれる。そういう思いがあるので、安心

してしゃべってくれます。喫茶よつばは、そういう役割のある場なのだと思います」と富森さん。「一緒にお茶を飲んでいただけでいろいろ話が出てくるんです。そうした話を、聞いているほうは流すのではなくて、取捨選択してつなげていく。よつばの会のメンバーには、民生委員や福祉委員、看護師やホームヘルパーがたくさんいます。なにげない会話からその人の思いを引き出したり、気になることをつなげるノウハウを持つていることも、心強いですね」と話します。

生きがいと買ひもの ニーズのマッチング

喫茶よつばの横のガレージで、喫茶と同日の毎週木曜日に開催されるのが、竹野南地区コミュニティわいわい・な・みが主催する「わいわい・な・み市場」です。朝10時の開店を前に、地域住民が列をなします。竹野南地区では買ひものをする場所がなく、一方で、高齢になっても畑を続けている住民が多くいます。たちで食べる以上の野菜をつくって

わいわい・な・み市場



いるため、その野菜の販売をおし
て買ひものと生きがいの双方を支援
する取り組みとして、2017年に
スタートしました。

木曜日の朝、出品者は各家で袋詰
めをした野菜を持って次々に集まっ
てきます。ここで1枚1円のラベル
を買ひ、商品に貼っていきます。

鶴原さんは、「つくる人の楽しみと、
買ひに来る人の楽しみを大事にして
いるので、品ぞろえが少ない日もある
れば多いときもあります。生産者の
人にとっては、苗代にもならない程
度の価格かもしれませんが、『ここ
に出すから収穫に行かなきゃ』来年は
こんな商品をつくって売ってみたい』
など、生産する高齢者の皆さんの楽

しみになっていて、それがいい、と
思つて取り組んでいます」と話しま
す。売り上げの1割は「わいわい・
な・み」の事務手数料となりますが、
市場の開催中はわいわい・な・み
の職員がレジを担当するなど、当日
の運営を担っています。

あの人の野菜はおいしい、どんな
調理法で食べようか、という会話が
聞こえてきます。ひととき評判がい
いのは、87歳の立花文子さんのつく
る野菜です。立花さんは、売るため
の秘訣を「土づくりからこだわること
と」「ほかの人の畑で匂を迎える少し
前に出すこと」「ちよつと珍しい品種
を仕入れること」と話します。普段
は通所サロンに通い、近所の人が立

花さんのかわりに出荷をしますが、
「これから明日のお店に出すために
収穫しないと」と意気込み、「サトイ
モは皮をむいて洗つて出せばそのま



生産者が野菜を搬入。ラベルを貼って販売準備



新鮮な野菜にあれこれ目移り

「まずぐに使えるからね」と工夫をこらして袋詰めをしています。「ちよつとの工夫が売れるコツなのよ」と笑って話す立花さん。その言葉に自信がみなぎります。

介護予防の場をつくらう！

出前サロンや喫茶よつばと活動を広げてきたよつばの会のメンバーは、「地域には、もう一步進んだことが必要(富森さん)と感じていました。おりしも、生活支援サポーター養成講座を受講していたメンバーたち。豊岡市支え合いサービズ事業を受託し、コミュニティセンターに日帰り



楽しいゲームで顔がほころぶ

で過ごせる介護予防の場をつくらう、と思ひ至りました。豊岡市から介護予防・日常生活支援総合事業の通所型サービズAの指定を受け、2017年11月、「ささえ愛通所サロンわいわいみ・な・み」が誕生しました。ささえ愛通所サロンは、月4回、水曜日、10時から始まります。午前中は季節に応じた手づくり品の製作、午後は歌をうたったり、軽い体操をしたり、ゲームも盛り上がります。それでも一番生き生きとするのは、やはりおしゃべりの時間。伺った日は、2月にみんなで仕込んだ味噌の出来ばえを確認しました。竹野南地区には、昔から味噌づくりで評判の



手づくり味噌の思い出を話す立花文子さん(左)

集落がありました。住民の高齢化でその味噌づくりが途絶えていました。そこで、その集落の住民に教えてもらってサロンでも味噌づくりをしたのです。

立花さんも、「昔は味噌をつくらう」と話します。「味噌と梅干は、とても大事なものです。だから開ける日も、いい日を選ぶのよ。それだけ大事なものだったの」「この味噌はいい麴でつくったから大丈夫。まんべんなく混ぜたらいい」「塩と唐辛子がカビ予防になる」など、経験からさまざまな知恵を話してくれました。

ほかにも、「畑仕事をしている、毎日1万歩を歩く」「畑に行く途中にお友だちの家があつて、おしゃべりをしてい



送迎の車内もミニサロン

見られます。ささえ愛通所サロンには、竹野南地区全域から利用が可能なため、送迎を行っています。その送迎車の止まる場所での待ち時間からおしゃべりに花が咲き、いわば「サロンの0次会」が始まっています。もちろん、帰りの送迎車は「サロンの二次会」。今日あったこと、車窓から見える竹野南の景色など、おしゃべりは止まりません。

富森さんは、「ささえ愛通所サロン

る」「ひとり暮らしで、冬場はテレビを見ながらお友だちと電話をしたり、近くのサロンでお茶飲みをしている」など、おしゃべりから、日常の暮らしの知恵や工夫が垣間

に来ていた人は、支援の受け手なのかもしれないけれど、みんな担い手でもあるのです」と断言します。リウマチで手が不自由な人には「知恵と知識を出して」とアドバイスを求めたり、地域行事の手伝いをしてもらったり。「できる範囲でいいから来てほしい、と声をかけて、一緒にこれをやろう、と声をかけています。笑う機会をたくさんつくるのが大事ですからね」と話します。

暮らしの場に向く生活支援

「介護を受けるほどではないが、家事を少し手伝ってほしい」「食事づくりがしにくくなってきたし、栄養の偏りが心配なので配食サービスをお願いしたい」「必要な買い物をしてくれると助かる」「一人暮らしで安否確認をしてほしい」などの声を受け、2020年7月、豊岡市からの委託事業として「ささえ愛生活支援サービス」が始まりました。

そのうちの1つ、配食サービスは、社協事業とよつばの会のボランティアによって、あわせて週3回実施されています。毎回30食ほどを3人ほ

どのボランティアがつくりまします。「ブルコリーは柔らかかめにゆでたほうがいいかな?」「盛りつけはこうしたほうがきれいね」などと話しながら、栄養バランスや彩りに配慮されたお弁当が次々とつくられていきます。

配食を始めるにあたり、活躍したのはやはり地域の高齢女性たちでした。「このお宅に届けたいけれど道がよくわからない」と言う配達ボランティアとともに車に乗り、道案内をしてくれます。次の家に届けるまでその家でおしゃべりをして待ってもらい、また一緒に帰っていきま

す。配達ボランティアがその家までの道のりがわかっただけでなく、高齢者同士、久しぶりのおしゃべりを

楽しむ姿がそこにありました。

訪問するスタッフも、竹野南地区の住民です。顔見知りも多いため、「お弁当を届けることだけでなくおしゃべりを楽しみに待っている人が多い」（鶴原さん）と言います。訪問に同行すると、いつもいるはずの家が不在だったことに気づいたスタッフ。「畑にもいなかったし、今日はデイサービスの日ではないし……」。ふと、この日は月に2回の地域サロンの日であることを思い出します。「ちよつと行ってみよう」と地域サロンの会場に。そこで楽しそうにおしゃべりする姿にほつとしつつ、周囲の人からも話を聞くことも忘れません。コーヒーを飲みながら「皆勤賞だ

よ、常連さんだからね」と話す住民の声から、「この人は毎回ここに来ていいる」とわかるだけでなく、友人同士のおしゃべりにも耳を傾け、そこでの様子を気かけます。



彩りに気配りしながら盛りつけ

配達とともに見守りも



こうした情報は、喫茶よつばでお茶を飲みながらスタッフや民生委員とも共有します。富森さんは、「個人情報という懸念があることもわかっています。『地域のこと』としてみんなで許せる範囲で共有するということを、みんなが承知しています。地域のことを地域のなかでみんなが解決していききたいという思いはみんなが持っていることです。情報を知らないのと動けないので、懸念を乗り越えていかないと、本当にみんなに寄り添っていくことはできないと思っっています」と話します。不安に寄り添い、絶妙なさじ加減でつないでいく配慮が地域にあふれているのです。



弁当を届け、体調を気遣う

自分たちで決めて、楽しみ、つながりを続ける

2019年、「竹野南地区コミュニティわいわいみ・な・み」はコミュニティ組織としてNPO法人化した。事業の広がりにつれて、さまざまな契約を団体としてできるようにするためです。理事長は岡田さんが、副理事長は富森さんが務めています。

「コミュニティを立ち上げるときに、『立派な事業計画書はつくらない』『きれいな組織はつくらない』という2点を決めたくらなく、岡田さん。『自分たちだけでなく、みんなで活



NPO 法人わいわいみ・な・み
理事長 岡田隆男さん

動する、ということが大事。立派なものだけでなく、自分たちで考えて、自分たちが決めたことを、自分たちがするんだ、ということが一番大事だと思っています」と話します。

そして富森さんは、活動の極意をこう話します。「楽しそうでしょ。楽しいことがないと、なんでもやっていけないんじゃないかな。しんどいことばかりでは、続きませんよ。その言葉を裏づけるように、竹野南地区ではどこに行っても笑い声が聞こえてくる温かさ、そして暮らしの不便があっても暮らし続けられる知恵と工夫とつながりがあふれています。

鶴原さんは、「専門職だけでこの900人以上の住民全員を把握することはできないし、専門職一人ががんばっても、それは専門職の活動で、地域の活動ではありません。私が地域をまわっていても気づかない人や知らない人はいます。だから、専門職は自分だけでやってはいけません。自分の活動にはいけないんです。地域の皆さんと協力することで、住

民一人ひとりの思いや願いを広く拾っていくことができるようになります。地域で孤立したり、課題を抱えている人の情報は、雑談のなかからあがってきます。それを気づいた人が私たちに教えてくれるんです。住民の皆さんとつながっていくと、こぼれていくものが少なくなります。誰かがそれを拾って持ってきてくれることで、専門職としての仕事もできるんですよ」と話します。

地域を誇りに思い、そしてつながりのなかで不安に寄り添い、安心を生み出す、竹野南地区。この地区には、ぬくもりと優しさが満ちあふれています。



竹野南地区コミュニティセンター
地域マネジャー 鶴原広美さん

竹野南地区 年表

1987年4月	竹野南小学校設立（三原・椒・大森・森本の4校が統合）。のちの「よつばの会」は、竹野南小学校の校章（4つの学校なので四葉）にちなんで命名された
2001年	調理ボランティア活動を開始
2005年	給食活動、読み聞かせ活動をスタート
2005年4月	平成の大合併により、旧竹野町が豊岡市に合併
2006年	豊岡市乳幼児家庭教育委託事業「ヨチヨチランド」スタート（2009年よりよつばの会が関わり、2020年より『わいわいみ・な・み』の自主事業に）
2007年	給食調理や読み聞かせをしていたメンバーがふれあい・いきいきサロンを開始、「よつばの会」として活動開始
2008年	ボランティアグループ「よつばの会」誕生、補助金を活用した「出張サロン」を始めたり、森本保育園との交流事業に関わる
2008年10月	竹野町町営バスの路線を引き継ぎ、豊岡市のコミュニティバス「イナカー」運行開始
2012年4月	床瀬区サロン友の会 スタート。公民館の交流広場を利用して月1回、ふれあい喫茶を開く
2014年	豊岡市で地域コミュニティづくりの推進が始まる ふれあい喫茶を毎月第3木曜に設定
2015年	コミュニティ設立準備委員会 豊岡市の土曜チャレンジ学習事業として「子ども教室」スタート。スタート時よりよつばの会が関わり、その後、『わいわいみ・な・み』の自主活動に
2016年4月	「交流広場わいわいみ・な・み」開設。JA店舗跡地でボランティアグループ「よつばの会」による週1回の喫茶が始まる
2017年	中村区で地域活動支援センター「だんだん」の喫茶（月2回）始まる
2017年3月	竹野南地区コミュニティセンター開所
2017年4月	「竹野南地区コミュニティわいわいみ・な・み」誕生
2017年5月	豊岡市健康づくり地域自主活動支援事業「玄さん元気教室」開始。竹野南地区では、行政区ごとに11グループが活動中
2017年6月	交流広場にて「わいわいみ・な・み市場」スタート
2017年11月	豊岡市の委託を受け、「ささえ愛通所サロンわいわいみ・な・み」（介護予防・日常生活支援総合事業による通所型サービスA）開始
2018年1月	竹野南営農組合設立
2019年9月	「NPO法人わいわいみ・な・み」設立
2020年7月	豊岡市の委託を受け、「ささえ愛生活支援サービス」（介護予防・日常生活支援総合事業による訪問型サービスA）開始
2020年7月	三原地区でサロン「カフェ燦とびあ」スタート
2020年9月	防災ワークショップ 開始
2021年1月	エリアごとの「水害時避難マニュアル」作成
2022年3月	竹野南小学校、竹野小学校、中竹野小学校の統合により、竹野南小学校、中竹野小学校が閉校予定。以後、放課後児童クラブは竹野南地区コミュニティ内に設置予定。森本保育園が閉園予定

コロナ禍でもつながりをあきらめない

〜ワクワクが広がる地域づくり〜

泡瀬第三自治会（沖縄県沖縄市）

地域の概況

沖縄県は、九州から台湾に連なる南西諸島の南半分に位置し、東西約1000km、南北約400kmに及ぶ海域に、沖縄諸島、先島諸島、尖閣諸島、大東諸島の大小160の島々（うち有人島47）から成っています。41の市町村があり、200種類が確認されるサンゴをはじめとした豊かな自然や独自の琉球文化が発展する、豊かな観光資源も併せ持ちます。

15世紀に琉球王朝が興り、アジア

アや日本などの周辺諸国と交易を行い、海洋国家として発展を遂げてきた琉球。1609年の薩摩藩の武力侵攻により支配下に置かれましたが、1879年に沖縄県となりました。

第二次世界大戦では、日本で唯一の地上戦の激戦地となり、多くの犠牲者を出しただけでなく、1945年に日本が降伏したあとにも沖縄はアメリカの軍政下に置かれ、1972年に本土復帰を果たしました。しかし、現在も日本全体の約75%の米軍専用施設があ

り、人々の生活と密接に関係しています。

沖縄本島の中央部に位置する沖縄市は、1974年にコザ市と美里村が合併して誕生した、那覇市に次ぐ沖縄第二の都市です。2007年に「エイサーのまち」宣言をし、エイサー文化の継承・発展ならびに青少年の健全育成など、地域活性化に取り組みしています。

市域面積の約36%を米軍基地が占め、アメリカ、フィリピン、ベトナムをはじめとした約70か国にルーツを持つ人々が住んでいます。

泡瀬区は、沖縄市の東部地区のなかで、中城湾に面した地域にあります。泡瀬第三地区は、泡瀬5丁目と6丁目の地域で、平坦な地形が広がります。地区内の中央部を路線バスが走り、商店、工業高校、保育園や商店が立ち並び、徒歩圏内にはスーパーや飲食店も多くある地域です。

沖縄市 (2021年11月30日現在)

人口	143,077人
世帯数	65,167世帯
高齢者数	30,056人
高齢化率	21.0%
年少人口	24,307人
年少人口割合	17.0%
平均年齢	41.96歳

泡瀬第三地区 (2021年11月30日現在)

人口	2,433人
世帯数	1,136世帯
高齢者数	822人
高齢化率	33.8%
年少人口	274人
年少人口割合	11.3%
平均年齢	49.18歳

「ワクワクの達人」自治会長の思い

「ワクワクの達人がいる」……そう聞いて訪ねた、沖縄市泡瀬第三地区。沖縄市の東部、中城湾に面した泡瀬地区のうちの泡瀬5丁目と6丁目はそのエリアです。1950年の泡瀬通信施設の建設にともない、このエリア一体が埋立地となり、住民が流入しました。エリアのなかでも最後に開発が進んだ三区は、当初から約1150世帯に大きな変化はなく、現在は2433人が暮らします。

海岸に近い泡瀬第三地区は、他地区に比べて高齢化率も高い地域で、一人暮らしや日中独居、高齢者のみの世帯も多くあります。自治会加入率は50%程度と、市内でも加入率の



泡瀬第三自治会長 仲真紀子さん



泡瀬第三公民館外観

高い地域ではありませんが、加入者の多くは高齢者や高齢者のいる世帯です。防災の観点からも、「万一のときに連絡がとれるように」と自治会では気になる人に登録を呼びかけ、その家族の連絡先などを把握しています。

「空き家が出てもすぐ次の人が引越してくるから、世帯数に大きな変化はないねえ」と話すのは、前出の「ワクワクの達人」こと、泡瀬第三自治会長の仲真紀子さん。仲真さんは、公民館に常駐し、さまざまな地域活動を生み出したり、住民からの困りごとに対応しています。そ

の根底にあるのは、「楽しいことのでつながりたい」という強い思いです。

2019年4月に7代目の自治会長に就任する前は、16年ほど会計として自治会活動に携わってきた仲真さん。「楽しくなければ人は集まらない」という言葉どおり、公民館では連日、楽しい集まりが開催されています。健康体操、カラオケ、まいみな会、グラウンドゴルフ、ミニデインなどの活動に多くの住民が参加しています。

2021年の冬にはイルミネーションで公民館を飾ることを思い浮かべます。インターネットで飾りつけ用のイルミネーションを購入しようとする、通常配送では1週間という時間がかかることが判明。それではクリスマスには間に合わない！と、調べてみると、業者から大阪までは翌日配送、大阪から沖縄までは宅配便の利用で1〜2日で配送が可能だとわかりました。そこで、大阪の知人に頼み、いったん受け取ってもらって沖縄への配送の手配を依頼。配送にかかる時間を大幅に短縮でき、クリスマスまでの約1週間で、地域住民とともに公民館を見事に飾

りつけた……というエピソードも。「配送が間に合わない」とあきらめるのではなく、どうすればそれができるのか、どんなときでもその最善の方法を考えて走っている……それが泡瀬第三自治会です。

泡瀬第三自治会の さまざまな活動

●まいみな会

沖縄のことばで、もやしを「まいみな」と言います。まいみな会とは、文字どおり「もやしの会」のこと。泡瀬第三公民館では、毎週木曜日の14時から、高齢者が集まってもやしのひげ取りをしています。4年ほど前に始まったまいみな会は、3人からのスタートでした。いまでは毎回、8〜10人程度が参加します。女性が多いですが、ときには妻を迎えに来た夫と一緒に参加し、妻よりも夢中になることも。デイサービスに通っている人も3人ほどが参加していて、ここでデイサービスの情報交換がされることもあると言います。

沖縄の食卓にのぼることの多いまいみなは、量り売りで大量購入し

ます。「ひげをきれいに取れば長持ちするのよね」と話しながら、丁寧な仕事ぶり。ひげ取りをしたもやしは重さをはかり、再度袋詰めをして、希望者が購入します。以前は婦人会のLINEで購入を呼びかけていましたが、その評判が口コミで広がり、最近では事前の予約でほとんどが売れてしまいます。

まいみな会の売り上げは積み立てて、ちよつと遠いところにランチやモーニングに出かけます。わざわざ遠いお店を選ぶのは、参加者の多くが90歳前後で、その年代の高齢者だ



もやしのひげ取りに励む

まーみな会



けではなかなか行くことができないからだと言います。「仲がいい、元気なおばあちを家に閉じ込めたくない」と仲真さん。ランチついでにドライブも楽しみます。

14時から始まるまーみな会ですが、13時には参加者が続々と公民館に集まります。1時間ほどおしゃべりを楽しみ、まーみなのおしゃべり開始。2時間ほどひげ取りをしたら、16時過ぎにはお茶を飲みながらまたおしゃべりが始まります。

取材に伺った日には、初めてまーみな会に参加したという女性も。「昨日も今日も公民館に来て。みんなでおしゃべりもできるし、楽しいわ」と盛り上がります。

「まーみなを買いたい人も多いし、



ゆんたくの前に、片づけもみんなで

収益も上がるけれど、参加者が増えなくてもまーみなは増やさない」と仲真さん。それは、まーみな会をとおして、参加者同士のおしゃべりの時間が何よりもたいせつだと考えて

いるからです。

新型コロナウイルスの感染拡大で、ランチのお出かけはお休みしていますが、まーみな会は広い会場でそれぞれがマスクをし、換気をするなどの感染対策をしながら続けます。

参加者のなかには、緊急事態宣言から家にとじこもりがちになり、体力が低下して歩行にふらつきが見られるなどの症状が現れてしまった人もいます。感染拡大期には休止することもあるまーみな会ですが、再開したときには「10分でも20分でも、ゆんたくだけでもいいからおいでよ」と、仲真さんたちは声かけをしています。

あるとき、この女性と病院で出

会ったという人は、この女性から「公民館に行きたいから元気になりたい」と言って通院し、リハビリに取り組んでいることを聞いたと言います。仲のいい友だちと出会い、おしゃべりを楽しみ、そして自分たちが取り組んだことが誰かに喜んでもらえる。そうした循環が、前向きな気持ちを生み出しているのは言うまでもありません。

●声かけ隊

2020年3月。緊急事態宣言にともない、新型コロナウイルスの感染防止の観点から公民館は閉館となり、利用できない状況になりました。「実は、当初はこの状況がそんなに長く続くとは思っていなかった」と仲真さん。閉館中に、いまままで気になっていたけれど手をつけることができなかつた看板の修理などに取りかかります。「それもあつという間に終わっちゃってね。1週間が過ぎて、毎日のように顔を合わせていた皆さんがどうなってるか、気になってしまつて」と言います。

そこには、仲真さん自身のある経験がよみがえりました。元気だった

声かけ隊



母が閉じこもりがちになったときに、体力が落ち、食欲もなくなり、耳が聞こえにくくなるという身体症状があらわれたのです。散歩や公民館活動に誘い、人とのふれあいのなかから少しずつ元を取り戻したという母の姿が重なりました。「コロナで家に閉じこもり、人と会い、話す機会がなくなったら同じようなことが起こるのでは」と、仲真さんは危惧しました。再び会えるようになったときに、体力が落ちて集まれなくなってしまうのは元も子もありません。

緊急事態宣言中に、集まれなくても体を動かしたり、顔を見て安心できるような何かができないか……。ひらめいたのは、区内スピーカーの活用でした。毎日10時と15時の1日2回、区内のスピーカーを利用して、朝はラジオ体操、午後は唱歌を流します。スピーカーの近所の家には、音で迷惑をかけるかもしれない、と事前に説明に向かいました。また、おたよりをつくって全世帯に配送し、ラジオ体操と唱歌の放送を周知しました。

10時になると、「家の中でも外でもいいから一緒に体操しよう」などとDJ風に仲真さんが元気よく呼びかけ、ラジオ体操が始まります。終わると、『自治会長散歩』に行きますよーと区内スピーカーから声かけ。シルバーカーに小さなスピーカーを載せて、スマートフォンから音楽を流しながら散歩します。特にひとり暮らしの高齢者などを気にかけて歩き、「15時には歌を流すから一緒に歌おうねー」などと声かけをします。15時の唱歌は、曜日ごとに曲を決めています。歌詞カードをつくり、地域の広報紙などを配付する協力員の力も借りて、各世帯に配付しています。「今日の歌はよかったですよ」などの感想も届いていると言います。



おそろいの赤いポロシャツとマスクが声かけ隊の目印

再開すると、公民館の仕事もあることから、仲真さんが地域の気になる人に声をかけ続けることが難しくなりました。泡瀬第三自治会は、婦人会の結束力が強かったこともあり、婦人会に「一緒に声をかけていかない？」と呼びかけます。「自分の班だけでいいから、ちよつと声をかけてくれない？」と言うと、12人ほどが賛同しました。おそろいの赤いポロシャツを作成し、2020年8月18日に「声かけ隊」を結成！ひとり暮らし高齢者や高齢者世帯などを中心に、声かけ隊による見守りや声かけが始まりました。その後、声かけ隊の人数は徐々に増え、現在は28人。

全20班ある泡瀬三区ですが、各班に1〜2人の声かけ隊がいることになり、それでもどうしても手が足りないとときには自治会の役員が声をかけます。

「ひとり暮らし世帯や高齢者世帯が多い地域だから、顔を見ておかないと不安なのよ。声をかけたら、何かあったときにも話してくれるから」と仲真さん。声かけ隊がスターとして、住民の「入院している」「電球が切れた」などの情報が、いままで以上に入ってくるようになりまして。「引越しをするのだけど、植木は自分で運ばなければならなくて



声をかけ、気にかけてもらうお互い様の関係



ウォークラリーのチェックポイントで
(写真提供：泡瀬第三自治会)

●防災訓練

困っている」という声があがったときには市社協につなぎ、ボランティアを派遣してもらったことも。

住民も、声かけ隊の訪問をとて楽しんでしています。声かけ隊の女性は、「声をかけに行っているお宅は昔からよく知っている方ばかりです。私の家族のこともよくご存じで、こちらのことも気にして言葉をかけてもらうことも多いんですよ。私もお会いしておしゃべりをするのが楽しみです」と話してくれました。

泡瀬第三自治会では、年1回の防



家族と、近所の人と、避難訓練ウォークラリー
(写真提供：泡瀬第三自治会)

災訓練を実施しています。津波を想定し、例年は避難訓練などをしていましたが、2021年は新型コロナウイルスの感染拡大を受け、集合での避難訓練を中止。そのかわり、4日間のうちの都合のいい日に挑戦する防災訓練ウォークラリーを実施しました。ウォークラリーでは、オリエンテーリング形式で防災にまつわるクイズなどを答えるスポットを設け、避難ルートを歩く形式です。「いま、いる場所」「海抜」などを答え、避難ルートのゴールまでの所要時間をカウントします。

家族や友人など、少人数で参加



夏休み子どもランチで子どもたちの元気も確認
(写真提供：泡瀬第三自治会)

●夏休み子どもランチ

し、すべてのスポットをまわったら公民館で答え合わせし、参加賞のプレゼント。住民がそれぞれ防災について考え、そして外出の機会をつくり、公民館で言葉を交わしてそれぞれの体調を気にかけて合う。コロナ禍で生まれた新しい防災訓練のかたちです。

2021年夏。コロナ禍で仕事をがんばっている保護者を応援しようと、夏休み中の子どもたちのために、「夏休み子どもランチ」を計画しました。予算は寄付でまかなうべく、

こどもランチ



自治会だよりなどを使って地域に「こどもランチサポーター」として、資金や食材の提供を呼びかけました。緊急事態宣言の延長により、ランチは断念してお弁当のテイクアウトに切り替えましたが、約1か月の期間中（実施日は20日間）、一日平均50食のお弁当の提供をしました。

このお弁当は無料で、自治会員・非会員を問わず、泡瀬第三地区に住んでいる子どもならば利用が可能です。料理をつくるのは婦人会が中心となり、地元のお惣菜屋さんから食材の提供などもありました。

週4回の開催のうち、婦人会のメンバーが腕をふるうのは2日。それ以外の日は、公民館名物のカレーや



夏休みこどもランチにはたくさんの食材の寄贈も（写真提供：泡瀬第三自治会）



婦人会による夏休みこどもランチ。たくさんのおかずが届きます（写真提供：泡瀬第三自治会）

地元の飲食店から提供された食材を使ったメニューです。それでも、婦人会のメンバーにとって毎週2回のお弁当づくりはたいへんだったので、と思いきや、ここにも泡瀬第三地区流の工夫がありました。婦人会のメンバーに、「あなたは何の料理

が得意？」と聞くと、ある人は「ゴーヤチャンプルー」、また別の人は「卵焼き」といろいろな答えが返ってきます。そこで、小分けのカップを渡して、「得意な料理を1品だけつけてきて」と頼んだのです。何品もの料

理をつくることはいへんでも、1品特化でしかも得意な料理ならば、とメンバーが腕を振ります。開けるメンバーが増えていくにしたがい、お弁当の品数もだんだん多くなり、豪華なお弁当に。終わるころにはメンバーから、「このくらいで本当によかったの？まだまだできるわよ」という声が聞こえるほど。負担感は少なく、それ以上に子どもたちの笑顔や「ありがとう」の言葉に、婦人会のメンバーのやりがいにもつながりました。

「予定よりも寄付金が多く集まったから」と、残金で公民館カレーの日にトンカツ用の豚肉を注文しようとする、「自分たちにも協力させてほしい」と無償提供されたと言



お付き合いを始めたばかりのカップルが七夕に願いを込めて…12月には結婚の報告が
(写真提供：泡瀬第三自治会)

泡瀬第三自治会で毎年開催する夏祭りは、地域外からも来客があるなど約800人が集まる大賑わいのものでした。ですが、新型コロナウイルスの流行により、そうしたイベントの開催も難しくなりました。

2020年は、「自粛が続く、子どもたちも活動が制限されている。何かできないか」と考え、中止にするのではなく、工夫をして開催する方法を選択しました。時期を「感染者が少ない今の時期に」と7月中旬

●地域イベントも開催

ます。地域の気かけ合いの思いが広がっている温かなエピソードです。



七夕に願いを込めて
(写真提供：泡瀬第三自治会)

の土曜日に設定。幅広く参加を募るのではなく、自治会会員、第三支部会員などを対象とした会員祭りとして、事前申し込み制にして来場者を把握しました。これは、大人数での混雑を避けることに加え、万一、罹患者が出た場合にも連絡をスムーズにとるための方策です。さらに、例年は会場で飲食ができましたが、持ち帰りの弁当を渡して会場での飲食は行わない、基本は屋外でのイベントとして、隣のテントとの間隔を十分にとる、フラダンスなどの発表は室内で行うが、観客は外のテントから見る、などの工夫がなされました。

2021年を迎える新年会も、感染拡大時期と重なり中止……と思

きや、「ペーパー新年会」を開催。ペーパー新年会は、自治会だよりにプログラムとQRコードを掲載し、各自が好きなときにその動画を視聴するというものです。地域住民などが歌や踊りを動画で披露し、各家庭で楽しんでもらいました。また、住民が初詣に出かける泡瀬ビジュアル(神社。石神を信仰の対象とする)も年末年始期間が閉鎖されたため、「バーチャル初詣」としてビジュアルを参拝する動画も作成。会えなくても楽しさを共有するアイデアがあふれ出てきます。



鯉のぼりを見学に来る保育園児たち
(写真提供：泡瀬第三自治会)

2021年4月には、子ども会が中心となって、地域の川に手づくりのこいのぼりを飾りました。子ども



秋のお楽しみ会～ミュージックライブの様子
(写真提供：泡瀬第三自治会)

たちも一緒に飾りつけを行い、コロナ禍の地域に明るい話題が広がります。さらに、7月には七夕の短冊を川に飾りました。新型コロナウイルスが猛威をふるう時期でも、屋外で楽しめるイベントを企画しながら、絆を深めています。

住民の多くがワクチン接種を終えた11月には、感染の縮小期とも重なり、秋のお楽しみ会「ミュージックライブ」を開催。来場者にはマスクとフェイスガードの着用を呼びかけ、感染対策にも配慮をしつつ、音楽ステージや獅子舞ならぬ「牛舞い」などの出しもので、住民がつどい、楽しむ時間となりました。「やっばり、人と会い、顔を見て笑い合うこ

地域振興券



2020年夏の会員祭り。それまでの夏祭りでは、市外の大店舗で購入した景品を抽選会で渡していましたが、「コロナ禍で困っているのは地域のお店も同じ。地域のお店を買いもので応援できれば」と、地域振興券を作成しました。地域のお店に協力を呼びかけると、飲食店、理髪店、雑貨店など11店（現在は12店）が快諾。空くじなしの抽選会で地域振興券を渡すと、来場者にもとても好評でした。

●地域振興券

とが一番。それで元気ももらえるし、安心にもつながる」と仲間さんは話します。



地区に開店したばかりのお店でも使えることもあり、住民がその店舗を訪れるきっかけにもなりました。

コロナ禍で、敬老行事も中止となりましたが、その際にも地域振興券を製作。声かけ隊がお弁当と地域振興券を持って80歳以上の高齢者宅を訪問しました。その後、秋のお楽しみ会「ミュージックライブ」の抽選会でも発行しています。

「地域振興券のおかげで地域の人がたくさん買えるものに来てくれるようになった」と言います。お店を買いもので応援することで、お店もまた



敬老会のイベントは中止でも、地域振興券を配布。来館の折りにも振興券のお礼を
(写真提供：泡瀬第三自治会)

地域行事などに一肌脱いでくれるという循環がいつそう生まれていきます。そしてなにより、買えるものしながらのおしゃべりは、貴重な地域の情報交換の場にもなっています。公民館を中心に、地域のつながりが広がっています。

●道路ボランティア

沖縄市では、建設部道路課の事業として、地域の道路を清掃する住民グループにボランティア活動助成を実施しています。泡瀬第三地区でも、男性を中心とした10人ほどの道路ボランティアが、道路の植え込みの草取りなどで活躍しています。

「男性にこそ参加してほしかった」と仲間さん。定年退職後の夫が家にいる、というお宅に向き、「力を貸してほしい」と頼みます。「そこまで言うなら、としぶしぶ始めた男性が、道路ボランティアにはまってるんですよ」と話します。

当初は月1回の活動を想定していた道路ボランティアですが、活動を始めた男性たちは、「植栽のある植樹マス内の草取りだけでなく、花を植えたい」「花を植えるための穴を



造花や置きものがある、遊び心いっぱいの植え込み



公民館の草花に水やりをする笑顔のパトリ
(写真提供：泡瀬第三自治会)

掘ろう」と大活躍。月1回ではもの足りない、現在は毎週土曜日の午前中に活動をしています。
花を植えていくと、今度はその花に水をまかなければなりません。ですが、地区内の植樹マスに植えた花

への毎日の水やりは、道路ボランティアだけでまかなうことは難しい。「気がついたら、道路ボランティアの男性たちが、近所の人に声をかけてほしい、水をまくために水

あるとき、歩いていた仲真さんは、「あれ、なんだろう?」と植樹マスを覗き込みます。「こんな花、咲いていたかしら?」。近寄ってみると、それは造花。花が少ない時期に、少しでも地域が明るくなるようにと誰かが造花を咲かせたのだと言います。ほかに、マスコットや石こうでつくった手づくりの鯛などが置かれている場所があり、「楽しくて笑っちゃうわよね」と言います。地域が明るくなるような、誰かのちよつとした遊び心と心遣い。楽しさの輪が広がっています。

泡瀬第三自治会を担当エリアとする、沖縄市地域包括支援センター東部北で第2層生活支援コーディネーターを務める中田有彦さんは、「私の担当エリアの自治会は、どこも『めげない』地域ですね。皆さんそういう傾向にある感じ。自治会長さんが熱心なのは、自分たちが住んでいるところ、自分たちの地域が好きだからだと思います。さらに、『泡瀬第三地区は、会長が』楽しいことをやっていけば、自治会も地域も活動的になるから、自分が率先してやっていく」と話されています。自分も楽しいし、自分が楽しいことをやったらみんなも楽しくなる

道路ボランティアと水まき隊



道を通してほしい、って」と仲真さん。地域の環境を気にする人が、一人、また一人と増えていっていたのです。

泡瀬第三自治会を担当エリアとする、沖縄市地域包括支援センター東部北で第2層生活支援コーディネーターを務める中田有彦さんは、「私の担当エリアの自治会は、どこも『めげない』地域ですね。皆さんそういう傾向にある感じ。自治会長さんが熱心なのは、自分たちが住んでいるところ、自分たちの地域が好きだからだと思います。さらに、『泡瀬第三地区は、会長が』楽しいことをやっていけば、自治会も地域も活動的になるから、自分が率先してやっていく」と話されています。自分も楽しいし、自分が楽しいことをやったらみんなも楽しくなる

自治会長は「地域のインフルエンサー」

自治会では、月1回、市社協、担当地域包括支援センターと福祉連絡会を開催、地域の情報交換をしています。「楽しいことも気になることも共有します。得るものが多いたいせつな時間」と仲真さんは話します。そして、「私たちに何ができるかな? とこの場でもいつも、アンテナを立てているんですよ」と言います。



第2層生活支援コーディネーター
中田有彦さん

という思いのもとに、いろいろな活動に取り組みられています。ただ、『地域のため』と言いますが、会長も地区の皆さんも、とても楽しそうですね。会長は、いろいろな人に関わってもらったときも、楽しい巻き込み方を伝えていて、みんなが受け入れやすいような話をされて、住民にも受け入れやすいシステムづくりを進めていると感じます。人に情熱を持たせるのが上手な方なんです」とも。

泡瀬第三地区は坂が少なく、買い物ものにも歩いて行ける利便性に恵まれた地域でもあるため、「普段から、歩いている人をよく見かけます」と中田さん。公民館で行事があるときも、「大きな駐車場はあるものの、歩いて公民館まで来る人が多い」ということに気づきを持っています。

担当地域のなかで泡瀬第三地区は高齢化がもっとも高い地域ではありますが、介護認定率はもっとも低く、こうした日常の行動が健康づくりに一役を買っていることも推察されます。

さらに、自治会活動で大きな力を発揮する婦人会の連絡に、グループLINEを導入。最初は「できない」と言っていた人も、使っているうちにできるようになったというエピソードを聞いた中田さん。「婦人会内の連絡でやり方を覚えて、遠くに住む家族ともやりとりができるようになった」という話も聞いています。コロナ禍で離れて住む家族とは会いづらい日が続いていますが、新しいつながり方をそれぞれができるようになっていく、これも自治会の力ですよね」と言います。「自治会長さんは、地域に大きな影響を与えるインフルエンサーのようなもの」と笑います。

沖縄市の考える これからの地域づくり

沖縄市では、2021年12月16日に「高齢者サロン交流会 地域のお宝発表会」を開催し、3か所の高



左から、長嶺みどりさん、又吉佳菜さん、黛生世さん、高江洲純子さん
(沖縄市健康福祉部介護保険課地域支援担当)

齢者サロンの発表会を実施しました。実践者と担当する第2層生活支援コーディネーターが発表したサロンの実践からは、定期的開催されているサロンのたいせつさはもちろん、それにとどまらない日常のつながりや気にかかけ合いの様子が報告されました。

沖縄市健康福祉部介護保険課地域支援担当主査の長嶺みどりさんは、「沖縄市は、後期高齢化率が9%程度でまだそれほど高くありませんが、高齢者が元気で活躍していく土壌をつくっていく準備期間ととらえています。生活支援体制整備事業をきっかけに、私たちも地域の関係者

と一緒にそうした地域づくりを目指して取り組んでいるところですよ」と話します。ですが、進めてきた矢先に訪れた新型コロナウイルス。「地域の方々の意識が高まり、取り組みが進んできたという実感を得たときにコロナが来て、いろいろなことがストップしてしまいました。正直なところ、モチベーションが下がってしまっていないかと心配だったんですが、実は地域の皆さんも危機意識を感じていて、地域活動をやりたいという気持ちを持ちながら待っていたことも同時にわかったんです。コロナがあつたから、そうした住民の機運の高まりを強く感じたとも言えます」と長嶺さん。

もともと、「沖縄県全体としてデイサービスの利用率がとて高く、介護保険制度が始まってから、ちよつと足腰が悪くなったらデイサービスにつながって、デイサービスにつながったらそこが居場所になって卒業が難しくなってしまうという課題がありました。地域の通いの場がないというのが沖縄市の課題だったのですが、いまは通いの場が少しずつ増えて、高齢者の方に地域で過



サロン交流会では参加者同士の意見交換も

る場所をお伝えすることができるようになってきました。地域づくりがこれからますます進めば、その効果は大きく出るだろうなと思っていま

す」と長嶺さんは話します。
同課の保健師の又吉佳菜さんは、「コロナ流行前までは、介護予防の観点から週1回、月1回など定期的に参加できるサロンづくりを推進してきました。第2層生活支援コー

ディネーターや地域住民のご協力もあって、活動が広がりつつありましたが、コロナの影響で多くの活動が休止される事象となりました。これまで元気に活動に参加されていた方の体力低下や生活への不安の声があり、改めてサロン活動の意義や、活

動以外の日頃の支え合いの大切さを実感できました。第2層生活支援コーディネーターともそのたいせつさを共有しながら、コロナ禍でも変わらず続くつながり（地域のお宝）を発見し、見える化し、地域の方々や専門職にその価値を意識づけて行うという思いを持ってともに取り組んでいます」と話します。「活動をつくるのではなく、いまあるつながりを発見し、意味づけをしていく。それを見える化してみんなで共有することで、住民さんの意識が変わってきて、自主的な活動が生まれてくる。それは時間をかけてできていくものだ、ということがよく腑に落ちて、動きやすくなったのだと思います。そういう地域のつながりにしつかり目を向けて、そういうことが地域のお宝で、健康を保つ活動だということ発信することが必要で、第2層生活支援コーディネーターと一緒に取り組んでいきたいと思っ

ています」と長嶺さん。ただ、コロナ禍の不安で、高齢者の転倒や骨折が増えていることも指摘します。「介護保険事業対象者のチェックリストを見ると、多くの人が転倒

や骨折にチェックがありました。外出が減り、体力や筋力の低下が数字にも表れています。地域活動に積極的に参加する人は自主的に出かけていかれますが、そうではない人たちのことも地域の皆さんが気遣って声をかけたときに、そこで気になったことをどこに知らせたらいいのか、どこで共有し、どうすればいいのかを考えたらいいかということもあわせて伝えていかなければならないと思っ

ワクワクをつなげ、 広げる地域づくり

ています」。
泡瀬第三地区では、ちよつと気になる人がいたときには、その人の経歴や趣味を聞き、得意なことを地域活動と結びつけています。たとえば、昔、肉屋で働いていたという男性は、バーベキューのときに肉を焼いてもらい、みんなで舌鼓を打ったりしています。
さらに、あるとき、地域の住民が業者による生活支援サービスを利用していただけとわかりました。ワンコインでちよつとした困りごとを解決してくれるサービスは手軽で魅力的で

すが、仲眞さんは「危機感を覚えた」と振り返ります。「相談してくれれば、地区の誰かがその人の力になれるのに。もつともつとコミュニケーションをとって、絆を深めていかなければと感じた」と話します。
家族や身近な人が閉じこもりがちだと聞くと、「公民館に来たら、楽しいことがたくさんあるよ。一度一緒に来てみてよ」と声をかけます。1回来たら、「明日はこんな楽しいことがあるよ。別の日はこんなこともやってみよう」と誘います。「来たら楽しいから、また次も来ようつもりですよ」。
再びの感染拡大で、公民館で「集まる」活動が止まっても、「そのときはまた、ラジオ体操かな。やってみて、これが大事だとわかっているから、それをまたするだけのことよ」と仲眞さんは明るく話します。
気になる人はほうっておかない。その人の得意なことを地域活動とつなげて、地域に「あなたじゃなければ」という出番をつくっていく。その人のワクワクと、地域のワクワクをつなげ、広げる地域づくりが進められています。

解説

コロナ禍で、さまざまな活動が制限され、地域での「孤立」がいつそう浮き彫りになりました。実はこのことは、コロナだから孤立したのではなく、コロナによってよりその状況がクローズアップされ、加速されたとも言えるのですが、コロナがもたらしたその「孤立」にあらがひ、つながり続けることで人と人とが支え合う地域づくりを進めてきた実践が、全国にたくさんあることも同時にわかってきました。

本事業の情報提供事業では、そうした実践に焦点を当て、全国6か所を取材し、編集しました。実践の特徴的なエピソードをわかりやすくお伝えするために、マンガも用いながら紹介をしました。それぞれの活動の全体像はとて大きな取り組みであったり、先駆的な活動であったり、ともすれば「マネできないハードルの高いもの」ととらえられがちかもしれません。あるいは、「スーパーパーソンがいるからできる特別なこ

と」と受け止める人もいるかもしれませんが。ですが、その活動の一つひとつの思いをひも解くと、必ずしも「特別な地域の特別なこと」が繰り返り広げられているわけではなく、「誰かかを思う小さな気づき」「誰かが喜んでくれるちょっとした思いやり」が原点であり、到達点でもあることがわかります。さらには、そうした思いをかたちにし、束ねたり広げたりしながら重なり合うことで、誰も取りこぼさない地域の構築につながっていることが見て取れます。

「孤立させない地域づくり」は専門職だけでも、住民だけでもつくりあげられるものではありません。その担い手ではなく、気にされる人も持っている力や役割があります。たとえば、ずすの会では、自分たちが地域の高齢者を支えていると思っていたボランティアたちが、活動の休止にともない、自分たちの居場所や役割、力を発揮することができず

に閉じこもりがちになってしまいました。ボランティアたちは、活動をとおして支えているだけではなく、支えられていたことにも気づかされる場面です(本文10-11p)。音別ふき路団では、生活保護受給者や若者が音別の地で働く経験を重ねるだけではなく、彼ら・彼女らがいることが、地域の高齢農家や高齢者たちの元気を生み出しています(18-19p)。群馬県太田市では、高齢者の暮らしぶりから元気の秘訣やつながりを学ぶ視点があり(30p)、高知県佐川町では「みんなと一緒だから毎日続けられる」というラジオ体操操(51p)、竹野南地区では、プロジェクト方式のコミュニティ運営で、年齢や性別などにとらわれずにさまざまな立場の人が地域のために汗を流し(55-56p)、泡瀬第三自治会では、90歳を超える女性たちがもやしのひげ取りをしながら地域住民の役に立ち、自分たちの楽しみもつな

げています(64-65p)。このように、

お互いが持つその力を発揮したり、認め合うことで、一方的に支えー支えられる関係から、お互いを支え合う関係へ、さらにはそうした気にかかけ合いが地域に面的に広がり、地域で循環していく地域共生社会へと発展していくのです。

「誰かを気にかける人がたくさんいること」「誰かを気にかけること」が、地域づくりではありません。「誰かを気にかける人も、誰かに気にかけているのではなく、気にかける人も誰かを気にかける力を持っていて、その関係に気づき、高めて合っていくことが、「孤立させない地域づくり」であること、そしてそれが「顔を合わせること」でお互いの思いや願いをかなえ合っていることに、これら6つの活動から気づきを

「新型コロナウイルス影響下での孤立を防ぐ つながり人材の育成及び情報提供・アドバイス事業」

事業報告

1. 運営委員会の設置・開催

本事業では、生活困窮者やひきこもり者、地域づくり支援に関する知見を持つ委員による運営委員会を設置し、情報提供・研修・相談アドバイスの各取組みの詳細について討議、決定を行った。また、本運営委員会の下に研修のカリキュラム等細部を検討する研修企画作業部会を設置した。コロナの状況を鑑みすべてWEB会議とした。

(1) 委員構成

風 保憲* 兵庫県

(社福) 淡路市社会福祉協議会 事務局長

榎部 武俊 北海道

(二社) 釧路社会的企業創造協議会 代表理事

森田 真希 東京都

(特非) 地域の寄り合い所また明日 代表

塚本 秀一 滋賀県

(社福) 湘南学園 専務理事

池谷 啓介 大阪府

(特非) 暮らしづくりネットワーク北芝 事務局長

山本 信也* 兵庫県

(社福) 宝塚市社会福祉協議会 地域支援部長

上村加代子 熊本県

(特非) にしはらたんぼぼハウス 副理事長

池田 昌弘* 宮城県

(特非) 全国コミュニケーションライフサポートセンター 理事長

*作業部会の委員を兼ねる

(2) 開催日程

・第1回 開催日…2021年6月14日(月)

13時～14時30分

参加者…委員長1人、委員6人、アドバイ

ザー委員1人、事務局3人

議 事…事業内容・初期取り組みの確認

・第2回 開催日…2021年7月26日(月)

10時～11時30分

参加者…委員長1人、委員7人、アドバイ

ザー委員1人、事務局4人

議 事…事業詳細の確認・決定

・第3回 開催日…2021年11月29日(月)

10時～11時30分

参加者…委員長1人、委員7人、アドバイ

ザー委員1人、事務局4人

議 事…事業の中間報告と見直し

・第4回 開催日…2022年3月1日(火)

10時～11時30分

参加者…委員長1人、委員7人、アドバイ

ザー委員1人、事務局4人

議 事…事業報告と成果について

【研修企画作業部会】

作業部会は、委員長が研修のカリキュラム作成等に実際にあたる検討委員を必要に応じ招集し、6回開催した(研修講師兼任)。

○委員構成…風委員長、山本委員、池田委員

藤井 博志

関西学院大学 人間福祉学部 教授

高橋 誠一

東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授

佐藤 寿一

元宝塚市社会福祉協議会 常務理事

田村 幸大

(特非) なごみ 事務局長

眞弓 洋一

(社福) 東近江市社会福祉協議会 在宅福祉課長

○開催日程…2021年6月9日(水) 6月22日

(火)、8月4日(水)、9月15日(水)、9月28

日(火)、10月19日(火)

2. 情報提供事業

(1) 法人ホームページ内に、特設サイトを2021年7月下旬に開設

事業目的・概要の掲載とあわせて、情報提供の一環として作成する情報誌や映像データの掲載、研修・相談事業の受付を行った。

(2) 事業告知

マンガを活用した事業告知パンフレット及び研修の開催要綱を作成し、全国の自治体及び社会福

社協議会、地域包括支援センター、生活協同組合、まちづくりスポットの合計9,794か所へ送付して、ホームページへ誘導して研修・相談受付告知を行った。

あわせて、運営委員会メンバーのネットワークによって、支援関係機関にも随時告知の協力をお願いした。

事業告知パンフレットの見開きのマンガは、コロナ禍でのつながりの大切さについてわかりやすく描かれていると好評を得て、「地域住民に広く知っていただくために自分たちの広報紙に転載し、活用したい」という希望が多く寄せられたことから、専用サイトからダウンロード可能に設定したところ98回の利用があった（2022年3月1日時点）。

(3) つながり支援を紹介する情報誌の発行

コロナ禍の状況においても、課題を持つ人ともつながりを切らない活動を行っている地域や、参加支援・地域づくりを行い孤立防止に寄与する団体取材し、情報誌にまとめて6回発行した。情報誌は実践事例の紹

表. つながり支援事例と、紹介した情報誌およびオンライン番組

(アーカイブ視聴回数は2022年3月1日現在)

つながり支援事例	(3) 情報誌	(4) オンライン番組
コロナ禍でも「気になる人を真ん中に」 ～住民主体の地域活動～ NPO 法人すずの会 (神奈川県川崎市)	第1号 2021年9月 発行 12頁	2021年9月24日(金)14～15時 ゲスト:すずの会代表 鈴木恵子さん コメンテーター:山本委員 聞き手:池田委員 申込者64人、アーカイブ視聴127回
コロナ下でも変わらない一人ひとりが 輝く居場所づくり ～就労と活躍の支援の現場から～ 一般社団法人音別ふき蔭団 (北海道釧路市)	第2号 2021年10月 発行 10頁	2021年10月29日(金)15～16時 ゲスト:櫛部委員 コメンテーター:上村委員 聞き手:凧委員長 申込者17人、アーカイブ視聴81回
「つながり」見つけて生かす生活支援 体制整備事業 ～生活支援コーディネーターの挑戦～ 太田市社会福祉協議会 (群馬県太田市)	第3号 2021年12月 発行 16頁	2021年12月20日(月)11～12時 ゲスト:吉沢町二区区长 木村能治さん 市社協1層SC 小林正和さん 同2層SC 川田敬一さん・須藤美樹さん コメンテーター:塚本委員 聞き手:池田委員 申込者51人、アーカイブ視聴102回
つながりが地域を元気に! ～気にかかけ合いが広がる優しいまち～ 竹野南地区 (兵庫県豊岡市)	第4号 2021年12月 発行 11頁	2021年12月22日(水)11～12時 ゲスト: NPO 法人わいわいみ・な・み 副理事長 富森とも子さん 竹野南地区コミュニティセンター 地域マネジャー 鶴原広美さん コメンテーター:森田委員 聞き手:凧委員長 申込者46人、アーカイブ視聴68回
コロナ下の住民活動と地域の拠点 ～集う・つながる・支え合う 実践の 現場～ (高知県佐川町)	第5号 2022年1月 発行 18頁	2022年2月8日(火)14～15時 ゲスト: あったかふれあいセンターとかの コーディネーター 森田有紀さん 佐川町集落支援員 西森信三さん 佐川町社会福祉協議会 事務局長 田村佳久さん コメンテーター:池谷委員 聞き手:佐藤委員 申込者50人、アーカイブ視聴87回
コロナ禍でもつながりを諦めない ～ワクワクが広がる地域づくり～ 泡瀬第三自治会 (沖縄県沖縄市)	第6号 2022年2月 発行 13頁	2022年2月21日(月)11～12時 ゲスト: 泡瀬第三自治会 自治会長 仲真紀子さん コメンテーター:櫛部委員 聞き手:佐藤委員 申込者49人、アーカイブ視聴72回

介とポイントの解説で構成し、マンガも活用しながら、PDFデータ(A4判、1号あたり10～18頁)にして特設サイトに掲載した。

(4) つながり支援を紹介するオンライン番組の配信

上記情報誌と連動したオンライン番組を6回配信(Zom活用・1回60分番組)。運営委員が

進行役・コメンテーターを務め、活動者本人に出演していただき、取り組みを撮影した動画を交えて説明し、チャットによる質疑を設けて、視聴している支援者と理解を深めた。また、本配信内容は、事後に特設サイトに掲載し、アーカイブ機能を設けた。

(5) 事例集の作成・配布

特設サイトに掲載している情報誌やアーカイブ動画をより活用いただくために、情報誌をまとめた事例集を作成し、全国の自治体及び社会福祉協議会、地域包括支援センター、生活協同組合、まちづくりスポットの合計9,794か所へ2022年3月末に送付して、事例集とあわせて特設サイトのアーカイブも活用いただけるよう周知した。

3. 研修事業

コロナ禍において、これからの地域づくりに向けた支援、地域と協働しながら参加支援に取り組む支援者が身に着けておくべき基本的な視点・ノウハウを理解するための研修を、オンラインにて実施した。

(1) モデル研修の開催

本研修に先駆け、10自治体×6人グループの協力を得て、6月22日にモデル研修を実施した。当初は6時間×2日間想定プログラムで考えていたが、受講者から「2日間拘束では研修に参加しづらくなる」「不慣れなオンライン受講への疲労」などの声が寄せられたため、「研修Ⅰ」として1日間の研修プログラムに凝縮したうえで、さらに学びを深めたい人のために「研修Ⅱ」を設け、開催することにした。

モデル研修では、研修内容について、基本的な考え方や地域で実践できる演習の手法を学べるこ

と、自治体単位でグループを組んで参加する意義について評価をいただいた。

(2) 研修Ⅰの開催

研修のねらい：

- ① 地域共生社会が目指す地域づくりや参加支援について、幅広い立場の方向士で共有する体験ができる。
- ② 自治体内で実践できる具体的な演習の手法を学ぶ。
- ③ 自治体単位で参加することで、研修を通じて福祉分野とまちづくり分野等の関係者が共通の認識をもつ。

対象：地域づくりや参加支援（生活困窮者などの支援を含む）に携わる市町村等の自治体職員や専門職だけでなく、自治会長や民生・児童委員、地域づくり・地域福祉実践者、集落支援員・地域おこし協力隊等。

開催日程：2021年8～11月に9回実施。

- ・ 地域での共通基盤づくりのため、個人申込とともに自治体グループでの参加を促した。
- ・ 8～10月に定員60人×8回（8ブロック）を予定していたが、各回とも定員を大幅に上回るお申込みをいただき、定員を3倍に増やしたうえで追加開催（11月8日）を実施した。計9回、のべ1,283人が受講した。

が受講した。

(3) 研修Ⅱの開催

内容：受講者が自分の地域に持ち帰って実践することを目的に、研修Ⅰで伝えきれなかった視点を深めるプログラム。

対象：研修Ⅰを受講した自治体・社会福祉協議会・地域包括支援センター等。

開催日程：2021年11～12月に2回実施。のべ251人が受講した。

表. 地域づくり人材養成研修の申込者数 (カッコ内はグループ参加数)

モデル研修		6月22日(火)	60人(10グループ)
研修Ⅰ	北海道	8月16日(月)	58人(5グループ)
	東北	8月17日(火)	122人(16グループ)
	北関東・甲信越	9月21日(火)	155人(19グループ)
	首都圏	10月14日(木)	157人(19グループ)
	東海・北陸・静岡	10月18日(月)	167人(25グループ)
	近畿	10月19日(火)	159人(20グループ)
	中国・四国	10月27日(水)	151人(25グループ)
	九州・沖縄	10月28日(木)	147人(24グループ)
	追加開催	11月8日(月)	167人(24グループ)
研修Ⅱ	1回目	11月9日(火)	106人
	2回目	12月3日(金)	145人

※研修はすべて2021年に実施

4. 相談アドバイス事業（Zoom活用）

地域共生社会の包括的な支援体制の構築に向けて、自治体・支援団体等からの「断らない相談支援」「参加支援」「地域づくりに向けた支援」等を進めるうえで、の相談ごとに、運営委員を中心とするメンバーがともに考え、アドバイスをを行った。

（1）オンライン相談（非公開）

包括的支援体制構築に取組む支援団体・自治体を対象とした個別相談の受付を、2021年10月より特設サイト上で開始。当初は10件程度を想定していたが、実際の申込は5件と少なく、重層的支援体制整備事業に取り組むにあたっての考え方や取り組み方についての相談が寄せられた。件数が少なかったこととあわせて、研修受講者の様子から、孤立防止のための地域づくりにどこから取り組めばよいかわからず、また関係者と考え方をすり合わせる共通基盤づくりに悩む自治体等が多い状況がわかった。

表. 相談者と相談対応の内容

相談者	相談内容	対応
栃木市社会福祉協議会 地域福祉課 (栃木県)	2021年10月4日受付。 参加支援における個人情報や記録、プラン等データ管理等事務量の負担について、他市町の状況を含めてご教示いただきたい。	厚労省から詳細の示されていない個人情報の取り扱い等には回答できかねるため、事業の考え方や方向性について市行政と一緒に考えていく場として活用いただくのはいかがでしょうかと提案。
高岡市福祉連携推進室 (富山県)	2021年10月14日受付。 今年度から重層的支援体制の移行準備事業を行い、令和5年度までに本格実施を検討している。子ども、困窮、障害、高齢の4分野で協議を行っているが、体制としてなかなか進まない状態にあり、進め方について助言をいただきたい。	2022年3月2日(水) 16:30～18:00 市では、令和6年度の重層的支援体制整備事業本格実施に向けて準備を進めている。担当者が課題を感じている相談支援における庁内連携や、社協、地域包括支援センターなど多機関協働の進め方について、宝塚市における実践と、その経験に基づいた助言と意見交換を行った。また、意見交換のなかで、重層的支援体制整備事業に占める参加支援、地域づくり支援の重要性を確認しあう場となり、宝塚市における職員研修資料等の参考資料提供も行った。 対応：山本委員、池田委員
北谷町福祉課 (沖縄県)	2021年12月2日受付。 各分野の地域づくりに関する動きを継続する方針だが、世代交流できる場や居場所の整備、個別の活動や人のコーディネート、多分野がつながるプラットフォームの展開について助言がほしい。	2021年12月10日(金) 16:00～17:30 各分野の地域活動の場の見える化や、取り組まれている活動の重層化への意識づけ・アプローチについて助言した。 対応：池田委員
多賀城市保健福祉部社会福祉課 (宮城県)	2022年1月28日受付。 昨年度策定した第4期地域福祉計画の中で取り組むべき事業に課題解決の連携体制と仕組みづくりを掲げ、本年度は保健福祉部内を中心に、本市が目指す包括的な支援体制を検討中。重層的支援体制整備事業の視点も入れて試行していくに当たっての進め方や、来年度の地域づくりの展開、市社会福祉協議会との連携についてアドバイスをいただきたい。	2022年2月24日(木) 16:00～18:00 2022年3月9日(水) 16:00～18:00 重層的支援体制整備事業への移行は未定だが、これまで市が取り組んできた庁内連携や、生活支援体制整備事業の地域づくり実践など、既存の取り組みを活かした事業の進め方について、委員の実践や各地の事例をひもときながら、意見交換を行った。 対応：佐藤委員、池田委員

相談者	相談内容	対応
弟子屈町地域包括支援センター (北海道)	2022年2月7日受付。 地域共生社会の包括的な支援体制の移行準備に手を挙げるにあたり、事前に全体的な進め方について助言を受けたい。	2022年2月18日(金) 16:00～18:00 2022年3月3日(木) 15:30～17:00 庁内、および社協等の関係機関の連携を進める際のポイント、生活困窮者等の要支援者を包摂する地域づくりの視点について、委員の経験や各地の事例などを交えて情報提供と意見交換を行った。 対応：風委員長、櫛部委員、池田委員



(2) オンライン支援者交流・座談会
当初は公開型の交流・相談会を想定していたが、事業推進にあたり相談を利用する手前の段階の自治体等が多く、公開相談会よりも、孤立防止のための地域づくりに関する考え方や具体的な取り組みをより理解する場が必要と考え、運営委員による座談会形式で開催することとした(1回90分)。参加者はチャットで質問や感想を出し合い、理解を深めた。アンケート結果より、参加者同士の相互交流を求める声もあったため、来年度以降はその方法を模索していきたい。

表. オンライン支援者交流・座談会

日時	登壇者	参加
2022年2月4日(金) 14:00～15:30	櫛部委員(釧路社会的企業創造協議会 代表理事) 森田委員(NPO法人地域の寄り合い所また明日 代表) 山本委員(宝塚市社会福祉協議会 地域支援部長) 進行: 風委員長(淡路市社会福祉協議会 事務局長)	申込者 45人
2022年2月24日(木) 10:30～12:00	塚本委員(社会福祉法人湘南学園 専務理事) 池谷委員(NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝 事務局長) 上村委員(NPO法人にしはらたんぼぼハウス副理事長) 進行: 佐藤委員(元宝塚市社会福祉協議会 常務理事)	申込者 65人

孤立させない地域づくりのための つながり推進プロジェクト

特設サイト



<https://www.tunagari-pj.net>

アンケート
結果

●オンライン研修

<https://www.tunagari-pj.net/seminar>



●オンライン講座

(アーカイブもご覧いただけます)
<https://www.tunagari-pj.net/case>



●オンライン座談会

<https://www.tunagari-pj.net/meeting>



厚生労働省

令和3年度新型コロナウイルス感染症セーフティネット強化交付金

『新型コロナ影響下での孤立を防ぐつながり人材の 育成及び情報提供・アドバイス事業』

<運営委員会>

	所 属	役 職	氏 名
委員長	淡路市社会福祉協議会（兵庫県）	事務局長	凧 保憲 *
委 員	一般社団法人釧路社会的企業創造協議会 （北海道）	代表理事	櫛部 武俊
委 員	NPO 法人地域の寄り合い所また明日（東京都）	代 表	森田 真希
委 員	社会福祉法人 湘南学園（滋賀県）	専務理事	塚本 秀一
委 員	NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝 （大阪府）	事務局長	池谷 啓介
委 員	宝塚市社会福祉協議会（兵庫県）	地域支援部長	山本 信也 *
委 員	NPO 法人にしはらたんぼぼハウス（熊本県）	副理事長	上村加代子
委 員	NPO 法人全国コミュニティライフサポートセンター	理 事 長	池田 昌弘 *
アドバイザー 委 員	関西学院大学 人間福祉学部	教 授	藤井 博志 *
アドバイザー 委 員	元宝塚市社会福祉協議会（兵庫県）	常務理事	佐藤 寿一 *

* 研修企画作業部会委員を兼ねる

<研修企画作業部会>

	所 属	役 職	氏 名
委 員	東北福祉大学 総合マネジメント学部	教 授	高橋 誠一
委 員	元宝塚市社会福祉協議会（兵庫県）	常務理事	佐藤 寿一
委 員	NPO 法人なごみ（兵庫県）	事務局長	田村 幸大
委 員	東近江市社会福祉協議会（滋賀県）	在宅福祉課長	眞弓 洋一

事務局：全国コミュニティライフサポートセンター

小野寺知子・宇城絵美・田村洋介・橋本泰典

孤立させない地域のつながりづくりのススメ

厚生労働省

**令和3年度新型コロナウイルス感染症セーフティネット強化交付金
「新型コロナ影響下での孤立を防ぐつながり人材の
育成及び情報提供・アドバイス事業」報告書**

2022年3月

特定非営利活動法人 **全国コミュニティライフサポートセンター**

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町 16-30 シンエイ木町ビル 1F

TEL : 022-727-8730 FAX : 022-727-8737

URL : <https://www.clc-japan.com>



特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター